東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報

－ 平成27年度 －

２０１６．３

東大阪市教育委員会

はしがき

東大阪市は、大阪府の東部、奈良県に隣接し、生駒山の懐に抱かれ、自然に恵まれた50万都市です。

生駒山地のふもとには、先人の残した貴重な文化遺産、遺跡が数多く眠っています。本市ではこれら遺跡・埋蔵文化財を保護、顕彰する立場から昭和47年に文化財課と郷土博物館を設置、開館しました。考古資料を展示する登録博物館としては大阪市に次ぎ、府下の衛星都市としては初めてであり、府下市町村の博物館施設の先駆けとなりました。平成14年11月には市立埋蔵文化財センターがオープンし児童や生徒、多くの市民に広く利用され、文化財の活用と普及に努めてまいりました。

本書では、平27年度国庫補助事業による発掘調査の成果を報告します。今回の報告では、西ノ辻遺跡、河内寺跡、善根寺遺跡、市尻遺跡、芝ヶ丘遺跡、慈光寺僧坊跡、若江遺跡の調査・整理概要を掲載しています。いずれも遺存状態の良好な遺構・遺物に恵まれ、既往の調査成果に新たな知見を加えることができました。限られた調査範囲ではありますが、各々の地域史の解明に大きく寄与できたものといえます。

これらは次世代に引き継ぐべき貴重な考古資料であり、本書が埋蔵文化財保護の報告書としてだけでなく、文化財の普及啓発冊子として市民の方々に広く読まれることを期待します。

最後になりましたが、調査の実施や報告書の刊行にあたり、個人・関係諸機関から多大なご協力を賜りましたことに深く感謝し、今後とも文化財保護にご理解とご支援をいただきますようお願い申し上げます。

平成28年3月

東大阪市教育委員会

目　　次

はしがき
目次・例言
第1章　平成27年度埋蔵文化財発掘調査・確認調査の概要……1
第2章　西ノ辻遺跡第51次発掘調査……5
第3章　河内寺跡第23次発掘調査……11
第4章　善根寺遺跡第4・5次発掘調査……19
第5章　市尻遺跡第2次発掘調査 ……63
第6章　芝ヶ丘遺跡第17次発掘調査……73
第7章　慈光寺僧坊跡第1次発掘調査 ……81
第8章　若江遺跡第91発掘調査……91

例　　言

1　本書は、国庫補助50%・市負担50%（総額10,000,000円）で実施した、個人及び零細事業主施行による開発工事に伴う発掘調査ほかの概要報告書である。
2　本発掘調査は、調査原因に係る個人および法人の依頼を受けて、東大阪市教育委員会文化財課が実施した。
3　現地の土色および土器の色調は農林水産省農林水産技術事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』に準拠し、記号表示も同書に従った。
4　現地で出土した遺物の整理については、株式会社島田組、株式会社文化財サービス大阪支店に委託のうえ、実施した。
5　本書の編集は、仲林篤史・奈良拓弥・今井真由美が行った。
6　考古学用語については、佐原真・田中琢2002『日本考古学事典』三省堂の表記に従った。
7　調査では、遺構名称に略号を使用したものがある。略号は以下のとおりである。

SP	ピット・柱穴	SD	溝・濠・溝状遺構
SK	土坑	SE	井戸
SX	その他遺構		

8　現地調査の実施及び報告書作成にあたり、ご協力いただいた地権者の方々や関係諸機関に対し厚くお礼申し上げます。

第1章　平成27年度埋蔵文化財発掘調査・確認調査の概要

平成27年度の文化財保護法第93条及び第94条に基づく埋蔵文化財包蔵地での届出（通知）件数は、平成28年2月29日現在で届出419件、通知37件で合計456件である。届出にかかる工事内容の内訳は次のとおりとなる（0件の工事名は省く）。

個人住宅　71件　分譲住宅　174件　共同住宅　22件　店舗　5件　その他住宅　1件
その他建物　25件　道路　3件　学校　8件　工場　2件　宅地造成　10件　公園造成　1件
ガス　41件　電気　43件　水道　19件　鉄道　1件　下水道　24件　通信　1件
その他の開発　5件

456件の届出（通知）の指導内容は、発掘調査52件、工事立会72件、慎重工事332件であった。

平成23年度では届出（通知）が470件、平成24年度が408件、平成25年度が407件、平成26年度が433件、平成27年度が456件である。平成20年度以降には増加を続けていた工事件数が平成24年度に減少へと転じたものの、平成26年度以降、再び増加の兆しをみせている。

東大阪市教育委員会では、次ページ一覧表のとおり、個人又は零細事業主による個人住宅又は共同住宅等の建築に伴う確認調査及び発掘調査と史跡公園整備工事に伴う発掘調査を平成27年度国庫補助事業として実施した。

その内訳は、個人住宅建設に伴う確認調査が10件（うち発掘調査2件）、個人事業主による共同住宅等の建設に伴う確認調査が11件、零細事業主による共同住宅等の建設に伴う確認調査が2件（うち発掘調査1件）、史跡公園整備工事に伴う発掘調査が1件で合計24件である（平成28年2月29日現在）。昨年度が21件であったため、件数は増加している。平成27年度の国庫補助事業では、個人事業主による共同住宅等の建設に伴う確認調査の件数が最も多く、続いて個人専用住宅建設に伴って実施する確認調査の件数という順序であった。

確認調査が必要となる工事の例としては、基礎工事に地盤改良工事又は柱状改良工事等を伴うものが挙げられる。それらの工事によって埋蔵文化財への影響が考えられることから、国庫補助事業として事前の確認調査を行い、埋蔵文化財保護行政等に必要なデータを得ているところである。

最後に、本報告書では報告ができず、次年度の報告となる調査事例を簡単に報告しておく。

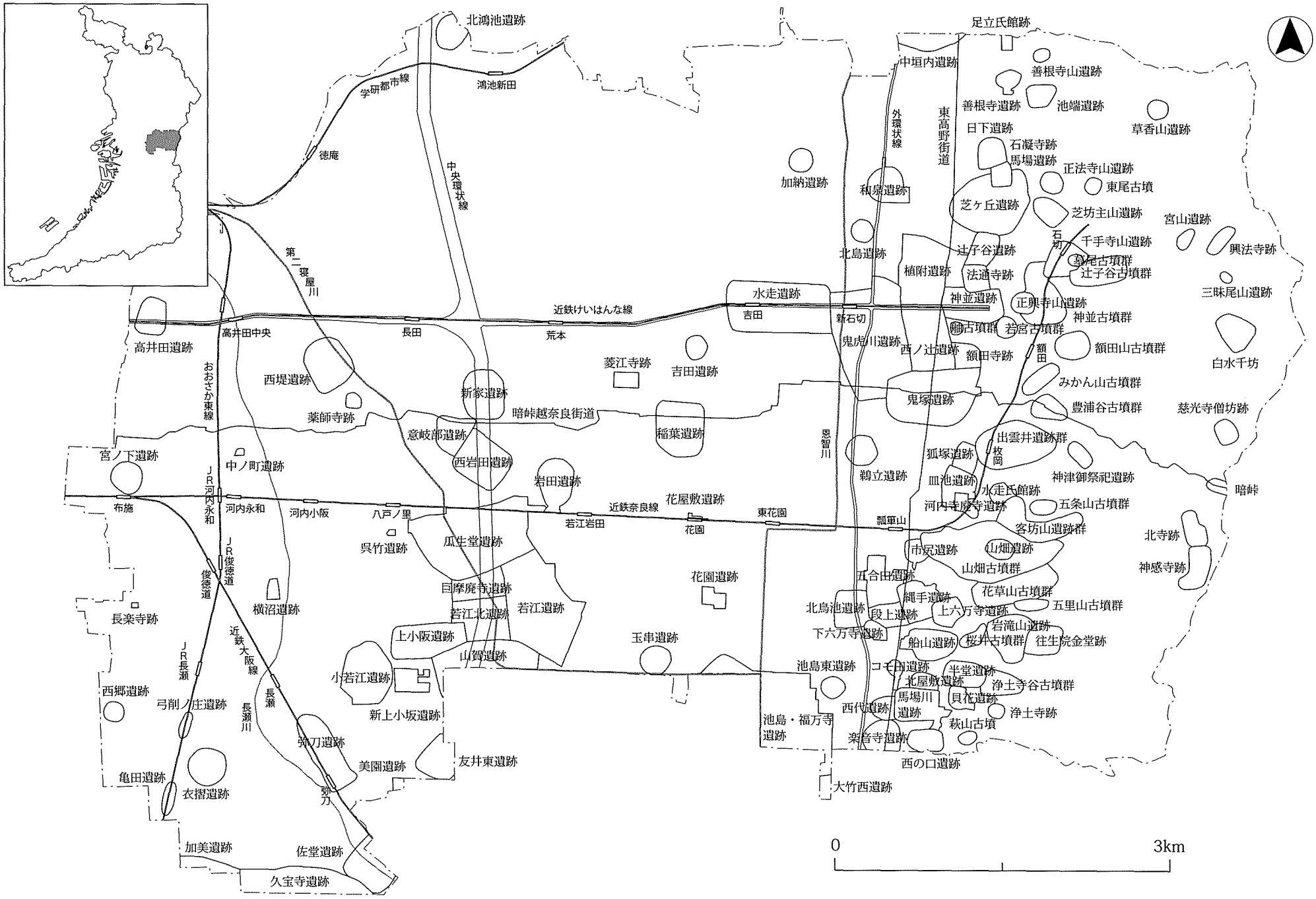
No.20の船山遺跡第9次発掘調査では、確認調査により土師器・須恵器の遺物包含層を検出したため発掘調査を実施した。発掘調査では、古墳時代と考えられる遺構（ピット）を検出した。

NO.23の段上遺跡第15次発掘調査では、確認調査により弥生土器の遺物包含層を検出したため発掘調査を実施した。発掘調査では、弥生時代の遺構（溝）を検出した。

平成27年度国庫補助緊急発掘調査事業実施状況

	調査事業名 （用途）	実施場所	担当	調査期間	調査 面積	調査結果
1	善根寺遺跡第5次発掘調査 （個人住宅建設）	東大阪市善根寺町一丁目652番13	奈良	平成27年4月14日 平成27年4月21日～ 4月22日	8.5㎡	本書第4章。
2	芝ヶ丘遺跡確認調査 （個人住宅建設）	東大阪市北石切町2268番17	奈良	平成27年5月1日	4㎡	GL-0.9mまで確認。埋蔵文化財出土せず。工事実施。
3	弥刀遺跡確認調査 （個人施工による共同住宅建設）	東大阪市友井一丁目9番1の一部	奈良	平成27年5月7日	12㎡	GL-2.3mまで確認。須恵器、土師器が出土。二次堆積によるものと確認。工事実施。
4	若江遺跡確認調査 （個人住宅建設）	東大阪市若江北町三丁目847番2、847番3の各一部	奈良	平成27年5月25日	4㎡	GL-2.0mまで確認。埋蔵文化財出土せず。工事実施。
5	芝ヶ丘遺跡第17次発掘調査 （零細事業主による共同住宅建設）	東大阪市北石切町2012番3、4の各一部、中石切町二丁目2023番2	奈良 今井	平成27年6月22日 平成27年6月24日～ 7月4日	34㎡	本書第6章。
6	縄手・段上遺跡確認調査 （個人施工による共同住宅建設）	東大阪市六万寺町三丁目1329番1の一部	奈良	平成27年7月21日	8㎡	GL-2.0mまで確認。須恵器・弥生土器などが出土。埋蔵文化財に影響を与えない設計に変更し工事を実施。
7	瓜生堂遺跡確認調査 （個人施工による共同住宅建設）	東大阪市下小阪四丁目312番、313番、314番	奈良	平成27年7月30日	16㎡	GL-1.9mまで確認。須恵器・土師器が出土。二次堆積によるものと確認。工事実施。
8	慈光寺僧坊跡第1次発掘調査 （個人施工による住宅建設）	東大阪市東豊浦町1823番1	仲林	平成27年8月4日～ 8月8日	25㎡	本書第7章。
9	辻子谷遺跡確認調査 （個人住宅建設）	東大阪市中石切町一丁目646番7	奈良	平成27年8月10日	2㎡	GL-1.1mまで確認。埋蔵文化財は出土せず。工事実施。
10	衣摺遺跡確認調査 （個人施工による寄宿舎建設）	東大阪市衣摺二丁目1069番1、1235番の一部、1068番1、1235番、1237番1、1237番2の一部、1068番1の一部	奈良	平成27年8月11日	20㎡	GL-1.1mまで確認。土師器・瓦器・瓦が出土。二次堆積によるものと確認。工事実施。
11	玉串遺跡確認調査 （個人施工による共同住宅建設）	東大阪市玉串町西三丁目1142番17	奈良	平成27年8月26日	8㎡	GL-2.0mまで確認。埋蔵文化財出土せず。工事実施。
12	下六万寺遺跡確認調査 （個人施工による倉庫建設）	東大阪市下六万寺町二丁目1804番4	奈良	平成27年8月28日	4㎡	GL-2.3mまで確認。弥生土器が出土。二次堆積によるものと確認。工事実施。
13	水走遺跡確認調査 （個人施工による事務所ビル建設）	東大阪市今米一丁目14番15号	奈良	平成27年9月7日	4㎡	GL-2.5mまで確認。埋蔵文化財出土せず。工事実施。
14	貝花遺跡確認調査 （個人住宅建設）	東大阪市横小路町二丁目675番3、676番4の各一部	奈良	平成27年9月17日	4㎡	GL-2.0まで確認。埋蔵文化財出土せず。工事実施。
15	久宝寺遺跡確認調査 （零細事業主による分譲住宅建設）	東大阪市大蓮南二丁目398番39、398番40、398番41	奈良	平成27年10月1日	4㎡	GL-1.9mまで確認。埋蔵文化財出土せず。工事実施。
16	久宝寺遺跡確認調査 （個人住宅建設）	東大阪市大蓮南三丁目618番3の一部	今井	平成27年11月9日	4㎡	GL-2.3mまで確認。陶磁器が出土。二次堆積によるものと確認。工事実施。

17	花草山古墳群確認調査 (個人住宅建設)	東大阪市上四条町1455番	奈良	平成27年11月17日	5㎡	GL-1.05mまで確認。埋蔵文化財出土せず。工事実施。
18	河内寺廃寺跡第25次発掘調査 (史跡公園整備)	東大阪市河内町438番1	仲林	平成27年11月18～ 11月21日	7㎡	史跡地北側隣接地で古代寺院に由来する遺構を検出。『河内寺廃寺跡第25次発掘調査概要』で報告。
19	河内寺跡確認調査 (個人住宅建設)	東大阪市河内町448番4	仲林	平成27年11月19日	4㎡	GL-0.45mまで確認。埋蔵文化財出土せず。工事実施。
20	船山遺跡第9次発掘調査 (個人住宅建設)	東大阪市六万寺町三丁目603番8、604番2	今井	平成27年11月26日 平成27年12月4日～ 12月24日	40㎡	GL-1.7mまで確認。須恵器・土師器が出土。詳細は来年度報告予定。
21	鬼塚遺跡確認調査 (個人施工による共同住宅建設)	東大阪市箱殿町609番4	奈良	平成27年12月24日	8㎡	GL-2.4mまで確認。埋蔵文化財出土せず。工事実施。
22	小若江遺跡確認調査 (個人住宅建設)	東大阪市小若江三丁目153番23	今井	平成28年2月8日	4㎡	GL-1.7mまで確認。埋蔵文化財出土せず。工事実施。
23	段上遺跡第15次確認調査 (個人住宅建設)	東大阪市下六万寺町三丁目1136番20	今井	平成28年2月15日 平成28年2月22日～ 3月2日	19.5㎡	来年度報告予定。
24	瓜生堂遺跡確認調査 (個人施工による店舗建設)	東大阪市若江北町二丁目42番1、2	奈良	平成28年2月19 日	8 ㎡	GL-2.2mまで確認。埋蔵文化財出土せず。工事実施。



第１図　東大阪市内の遺跡分布図

第２章　西ノ辻遺跡第 51 次発掘調査

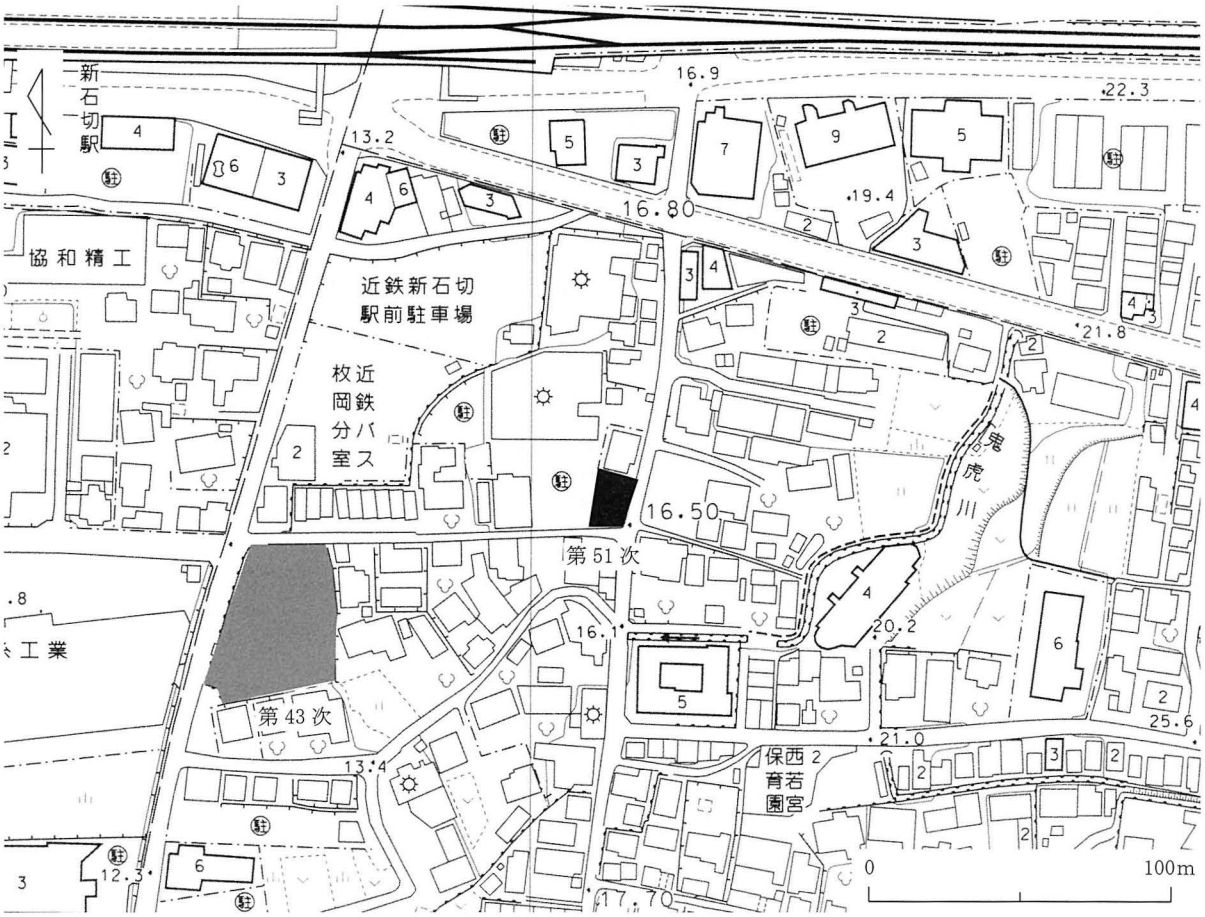
１）はじめに

西ノ辻遺跡は、東大阪市東山町、弥生町、宝町、南荘町、西石切町一丁目及び西石切町三丁目に位置する弥生時代前期中頃から後期、奈良時代から室町時代にかけての複合遺跡である。

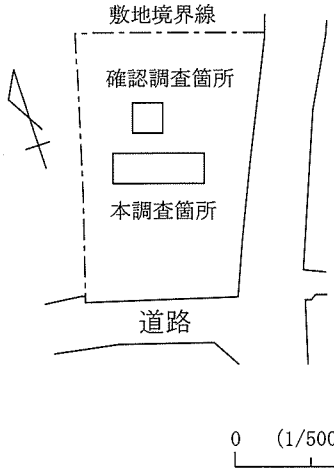
本遺跡の存在が知られるようになったのは、昭和 16（1941）年に、現在の近鉄バス枚岡営業所の場所を整地しようとした際に大量の弥生土器が発見されたことによる。昭和 16 年から 17 年までの京都大学の調査で、弥生時代の標式遺跡として全国的にも著名になった。その後、今回の調査を含め、51 次にのぼる調査が行われている。

２）調査の経過

平成 25 年７月、東大阪市東山町 1256 番において、個人住宅建設に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された（第１図）。当該建築物の基礎工事は、柱状改良工事を含むもので、埋蔵文化財への影響が懸念されたため、事前の確認調査が必要な旨を届出者に通知した。その後、平成 25 年 12 月 18 日に埋蔵文化財確認調査を実施した。調査の結果、調査トレンチ GL-1.8m から -2.2m の間で弥生時代から古墳時代にかけての弥生土器及び須恵器が出土した。この結果に基づき協議代理者と取扱いについての協議を行い、平成 26 年１月７日・８日に調査トレンチを設定して調査を行った。調査面積は、確認調査と合わせて 16 ㎡である（第２図）。



第１図　調査位置図



3）調査の概要

層序（第３図）

盛土

第１層　旧耕作土

第２層　明褐灰色（7.5YR4/2）大礫～粗砂混じり砂質シルト

第３層　灰白色（10YR7/1）粗～細砂混じりシルト質砂

第４層　褐灰色（10YR6/1）粗～細砂混じりシルト質砂

第５層　褐灰色（10YR4/1）粗～細砂混じり砂質シルト

第６層　灰黄褐色（10YR6/4）粗砂混じり粘質シルト

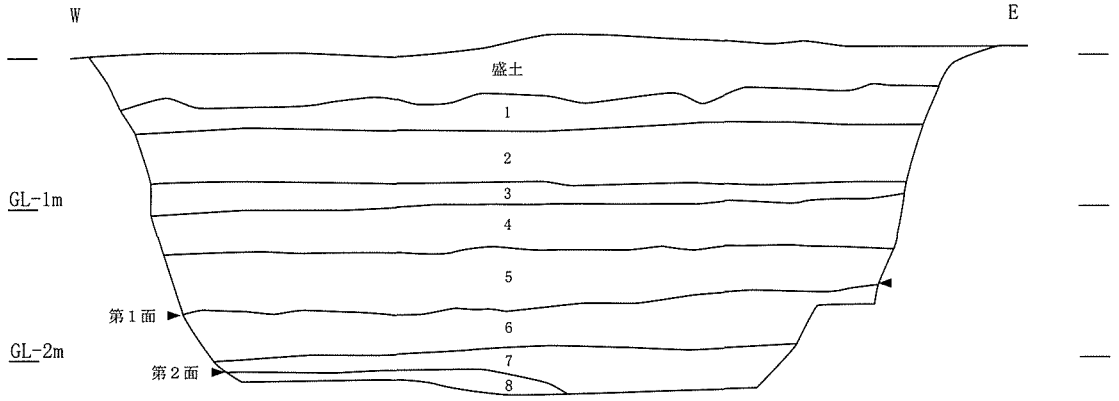
第７層　黒褐色（10YR3/2）粘質シルト

第８層　灰白色（５Y7/2）粘質シルト

第２図　調査トレンチ位置図

第２～５層は耕作土である。第２層からは小破片であるが瓦器が出土した。中世以降と考えられる。第６・７層は東側に鬼虎川が流れており、この川によって堆積した層を母材とする土壌化層である。第８層は基盤層である。

第６層上面を第１面、第８層上面を第２面として調査を行ったが、遺構を検出することはできなかった。



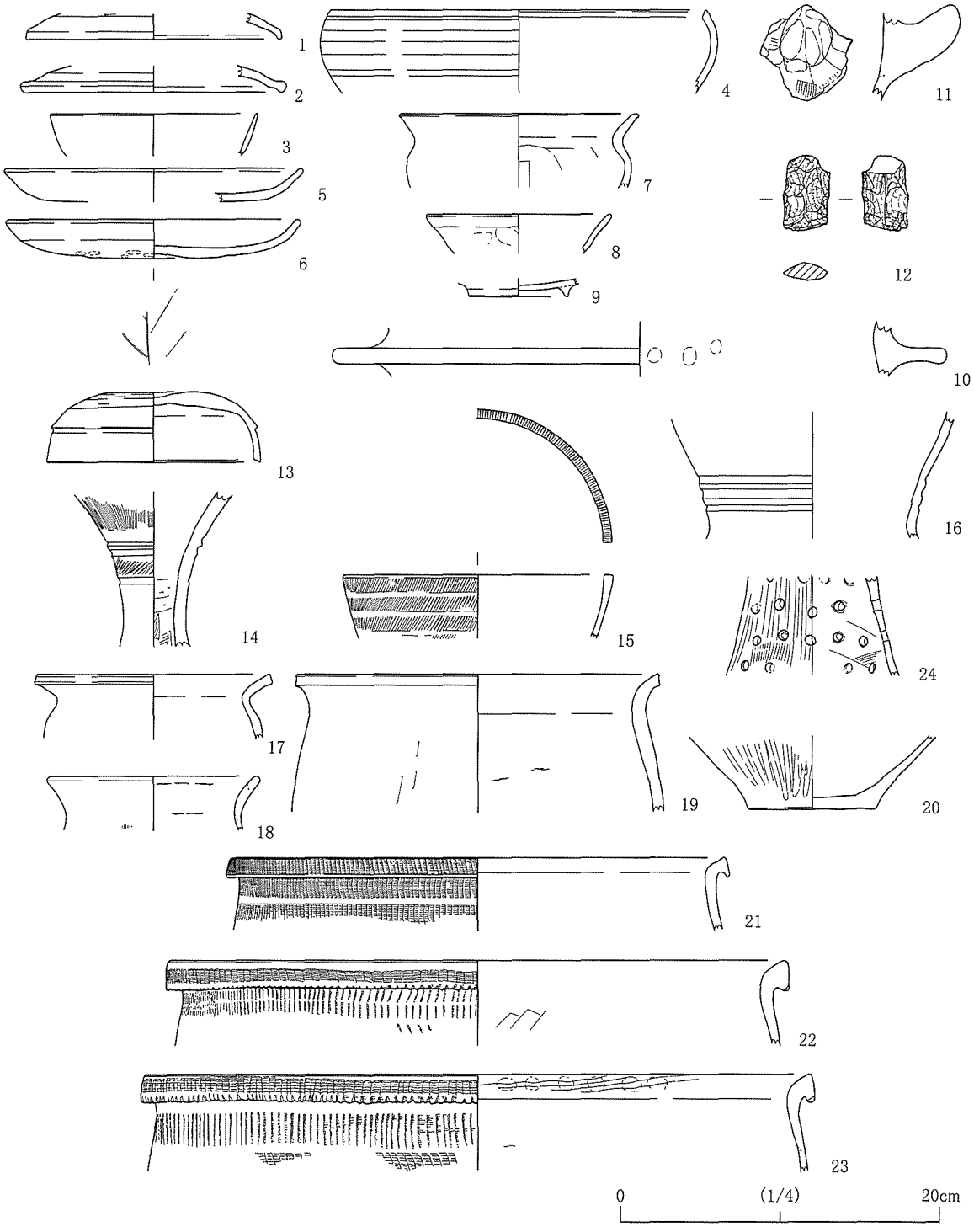
1．旧耕作土
2．明褐灰色（7.5YR4/2）大礫～粗砂混じり砂質シルト
3．灰白色（10YR7/1）粗～細砂混じりシルト質砂
4．褐灰色（10YR6/1）粗～細砂混じりシルト質砂
5．褐灰色（10YR4/1）粗～細砂混じり砂質シルト
6．灰黄褐色（10YR6/4）粗砂混じり粘質シルト
7．黒褐色（10YR3/2）粘質シルト
8．灰白色（5Y7/2）粘質シルト

第３図　調査区北壁断面

4）出土遺物（第４図）

上層（第３～５層）

１・２は須恵器杯蓋、３は須恵器杯である。３の口縁部は外方へと直線的にのび、わずかに底部付近が残る。４は須恵器鉄鉢である。口縁部内側に段をもち、下部に炭が付着する。いずれも８世紀後半であろう。５・６は土師器杯である。６の底部にはヘラ描きによる木の葉文が施される。７は土師器甕である。内面の口縁部と体部の屈曲部にユビナデが明瞭に残る。体部内面には板ナデが施される。



第４図　出土遺物

８は土師器皿である。口縁部は丁寧なヨコナデを施し、体部にはユビオサエが残る。５～７は８世紀後半。８も同様の時期であろう。９は黒色土器の底部である。内黒で断面三角形の貼り付け高台をもつ。９世紀後半。10は土師器羽釜の鍔である。鍔は器壁に対して垂直に取り付き、横へと水平にのびる。８世紀後半から９世紀前半。11は甑の把手である。器壁を貫通させて取り付けている。外面にはわずかにハケメ調整が認められる。時期は不明。12は石剣の基部である。断面菱形を呈し、下端面に自然面が残る。二上山北麓産サヌカイト。弥生時代中期。

下層（第６・７層）

13は須恵器杯蓋である。口縁部端部内面に段をもち、天井部上半に回転ヘラケズリが残る。TK47型式。14は瓶の頸部である。外面には区画する沈線がめぐり、その間をハケにより列点文がめぐる。TK209型式。15は細頸壺である。口縁部上端面に連続する刻みを施し、外面には３段の簾状文がめぐる。16は壺の頸部である。頸部中央には３条の凹線がめぐる。外来系の土器であろう。17～20は甕である。17は口縁部をヨコナデし、断面方形を呈する。18は緩やかに外反する口縁部に端部は丸くおさめる。19は内傾する頸部から短く口縁部を外反させる。端部はヨコナデにより方形を呈し、面を持つ。外面にはわずかにハケメが残る。20は甕の底部で外面に縦方向のミガキを施す。平底で底部の厚さは薄い。21～23は鉢である。口縁部を屈曲させ端部を垂下させることにより面をもつ。この屈曲した口縁部に簾状文を施す。22・23は端部に刻みをもち、体部外面に簾状文を施す。24は多数の円孔をもつ円錐台の脚台である。台付鉢の脚部であろう。弥生土器はいずれもⅢ様式中段階～Ⅲ様式新段階の所産である。

５）まとめ

今回の調査では弥生時代と古墳時代の遺物を包含する層の検出にとどまった。弥生・古墳時代の遺構は第43次において竪穴建物・土坑・井戸・掘立柱建物を検出している。居住域は当該調査区よりも西側に広がっており、今回は居住域の東端部にあたるものと考えられる。

【参考文献】

秋山浩三 1996「近畿南部の煮炊具―播磨・摂津・河内・和泉・紀伊・淡路―」『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東４　煮炊具―』古代の土器研究会

大阪府立近つ飛鳥博物館 2006『年代のものさし―陶邑の須恵器―』

古代の土器研究会編 1992『古代の土器１　都城の土器集成』

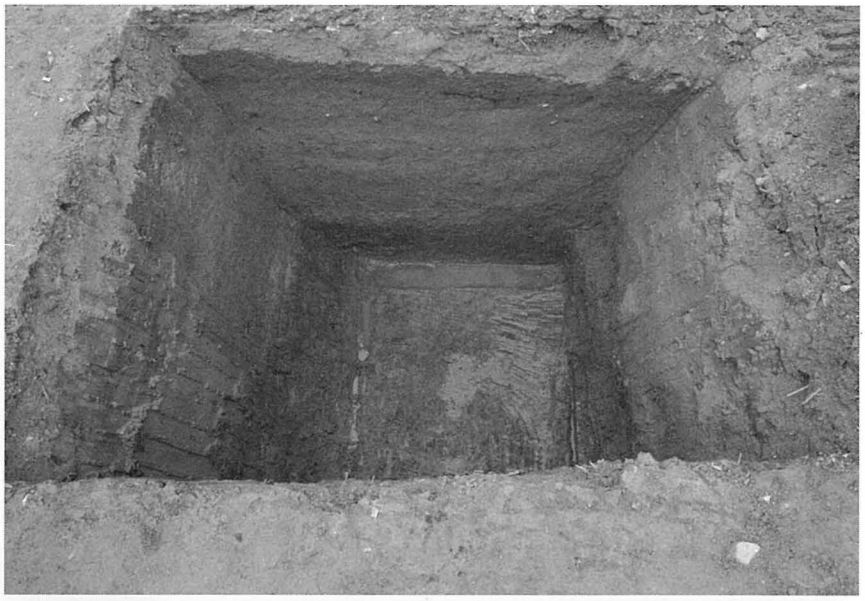
中世土器研究会編 1995『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社

寺沢薫・森井貞雄 1989「河内地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ、木耳社

濱田延充 1993「生駒西麓第Ⅲ・Ⅳ様式の編年」『弥生文化博物館研究報告』第２集、大阪府立弥生文化博物館

東大阪市教育委員会 2001『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告―平成12年度―』

図版1　西ノ辻遺跡第51次発掘調査　遺構

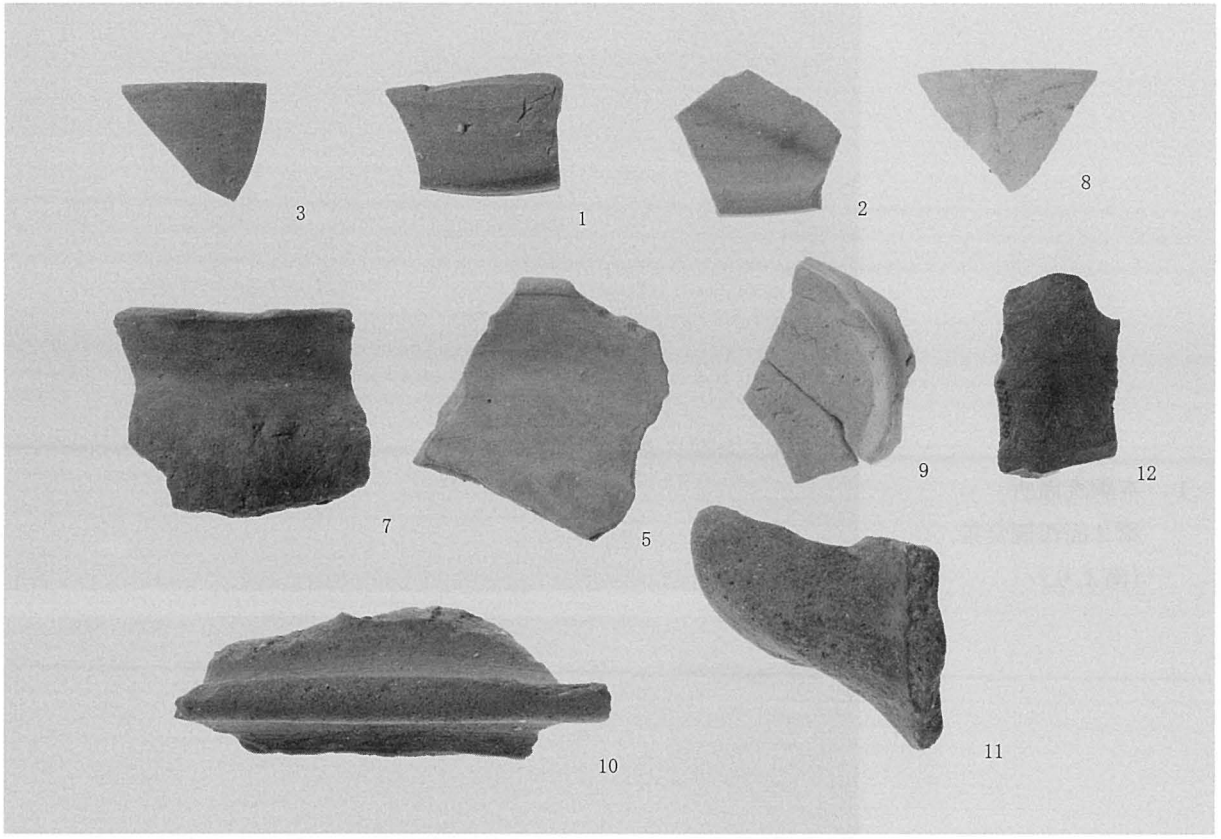


1．本調査箇所
第２面西側全景
（南より）

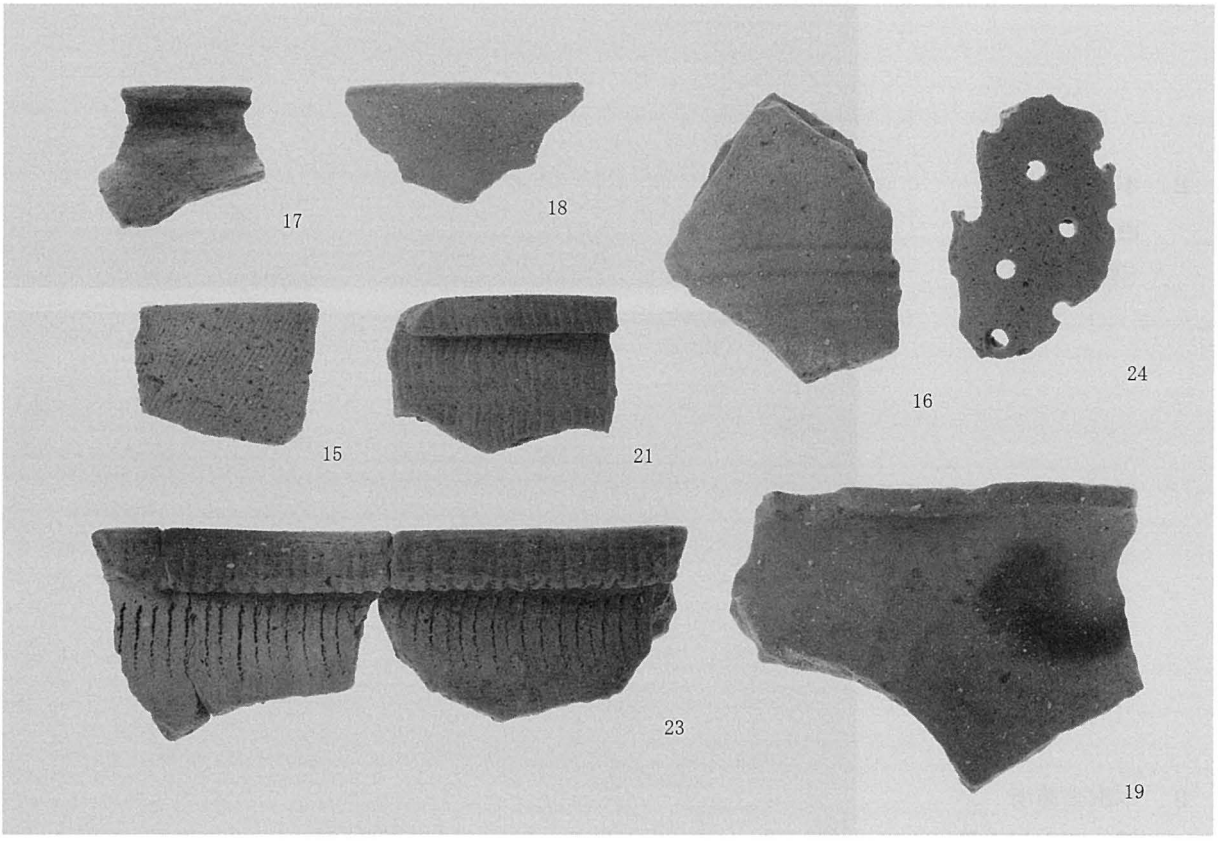
2．本調査箇所
西側北壁断面
（南より）

3．本調査箇所
第２面東側全景
（南より）

図版2　西ノ辻遺跡第51次発掘調査　遺物



1．上層（第３～５層）出土　須恵器、土師器、黒色土器、石剣



2．下層（第６～７層）出土　弥生土器

第３章　河内寺跡第 23 次発掘調査

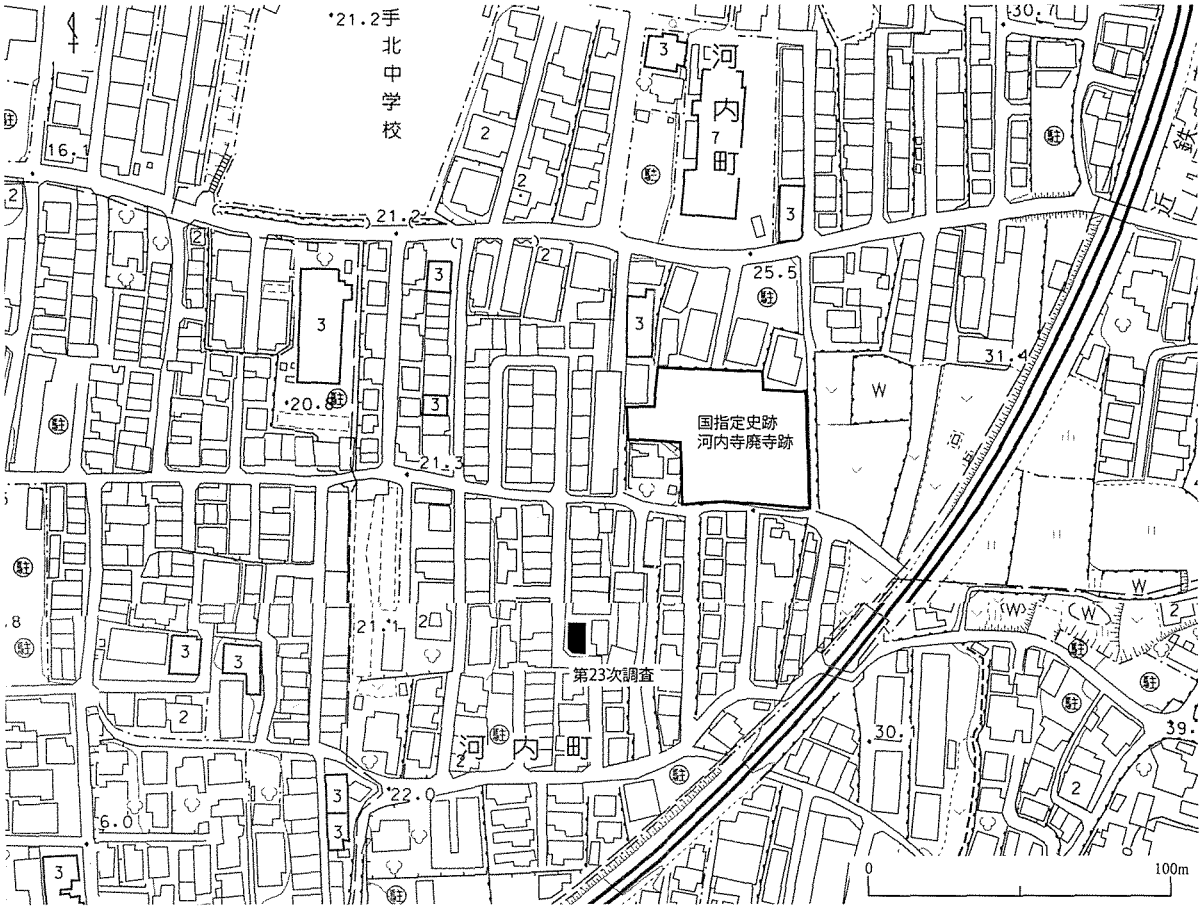
１）はじめに

河内寺跡は東大阪市河内町を中心に広がる古墳時代から室町時代にかけての遺跡である。遺跡の中心は現在国指定史跡となっている「河内寺廃寺跡」で、創建は飛鳥時代後期（7 世紀中頃～後半）に遡る。河内寺廃寺跡は四天王寺式伽藍配置をとる古代寺院跡で、渡来系氏族である河内直（連）一族の創建によると考えられている。河内寺廃寺跡の廃絶は、河内寺跡第５次発掘調査及び史跡地内での発掘調査で検出した土石流状の堆積層から出土した遺物より 14 世紀初頭であると考えられている。ただし、史跡地内での発掘調査により、中世から近世にかけても旧伽藍内で何らかの施設が継続的に造営されていたことが分かっている。

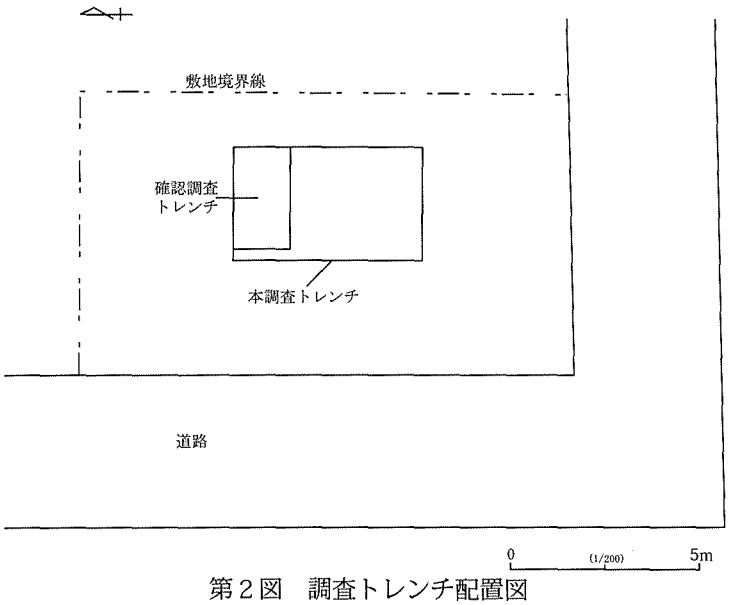
２）調査に至る経過

平成 27 年 12 月 10 日、ハウスコレクションより埋蔵文化財発掘の届出が提出された。当該工事の基礎掘削深度は GL-0.4m で地盤改良工事は伴わなかったものの、周辺の発掘調査事例より、埋蔵文化財へ影響を及ぼすおそれがあったため、確認調査が必要な旨の指示を行った。

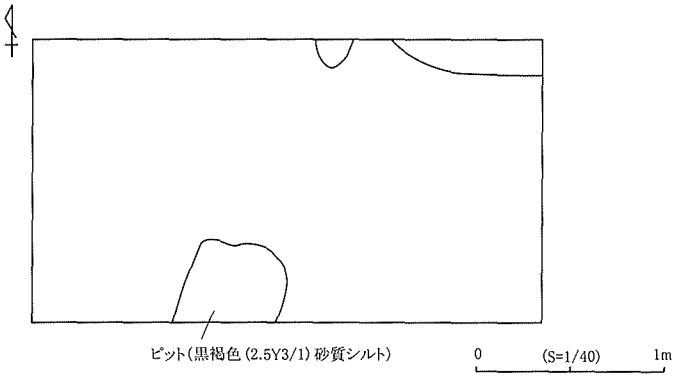
確認調査は、平成 26 年 12 月 22 日に実施した。確認調査の結果、室町時代の土師器を含む遺物包含層及びピットを検出したため、協議代理者と協議を行ったうえで、平成 27 年１月７日から９日まで発掘調査を実施した。



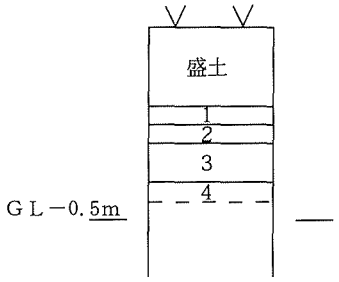
第１図　調査位置図



第２図　調査トレンチ配置図



第３図　確認調査トレンチ平面図



1.黒褐色(10YR3/1)シルト
2.にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト
3.黒褐色(2.5Y3/2)細砂混じりシルト
4.黒褐色(2.5Y3/1)砂質シルト

第４図　確認調査トレンチ柱状図

3）確認調査の概要

確認調査は 1.5 m× 2.7 mの調査トレンチを一か所設定し、行った。確認調査トレンチの堆積状況は以下のとおりである。

第１層　黒褐色 (10YR3/1) シルト。

第２層　にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルト。

第３層　黒褐色 (2.5Y3/2) 細砂混じりシルト。

第４層　黒褐色 (2.5Y3/1) 砂質シルト。

第１～３層は近世以降の整地土である。第４層はピットを含む中世の整地層で、ピットより土師器皿が出土した。

4）発掘調査の概要

発掘調査は５m × 3m の調査トレンチを設定し行った。まず GL-0.1 m までを機械掘削で行い、それ以下を人力掘削で行った。

トレンチの堆積状況は以下のとおりである。

トレンチ北壁

第１層　盛土・旧耕作土・床土。

第２層　灰オリーブ (5Y6/2) 粘土質シルト。

第３層　灰黄色 (2.5Y6/2) 粘土質シルト。

第４層　灰色 (7.5Y6/1) 粘土質シルト。SD02 埋土。

第５層　にぶい黄色 (2.5Y 6/3) 粗砂混じりシルト。5 ～ 10cm 大の礫含む。SD01 埋土。

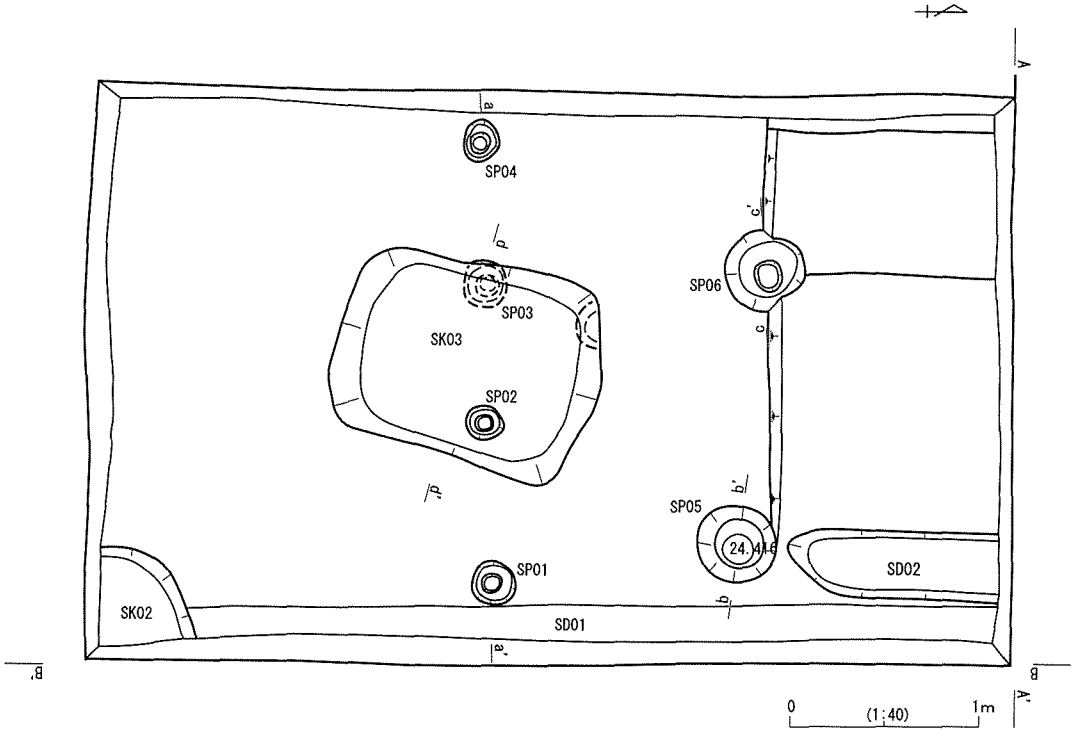
第１層は近現代の盛土、旧耕作土及び床土をまとめた。第４層は SD02 の埋土で、第５層は SD01 の埋土である。第２層は細粒砂を少量含んでおり、暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘土質シルトがブロック状に混入していた。第２層は遺物包含層である。第３層は、耕作に伴うとみられる炭化物を少量含んでいた。

トレンチ東壁

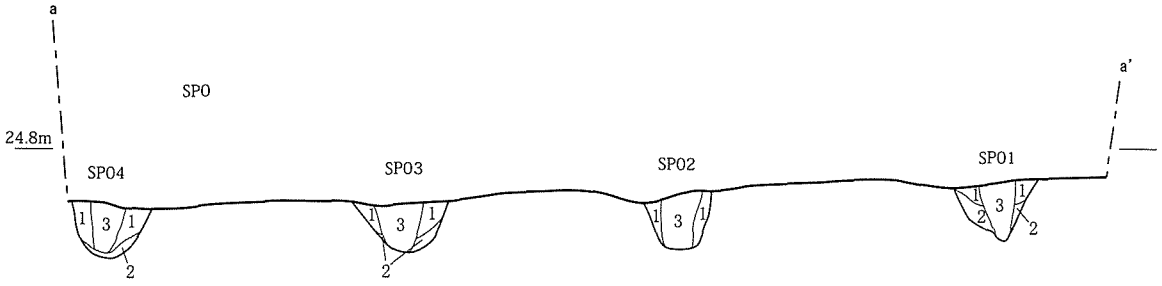
第１層　盛土・旧耕作土・床土。

第２層　灰オリーブ (5Y6/2) 粘土質シルト。北壁第２層と同じ。

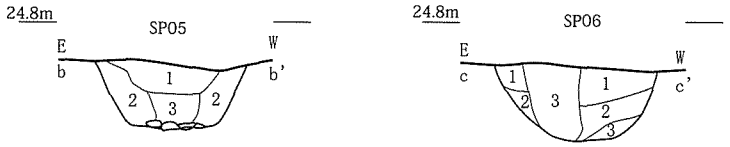
第３層　灰黄色 (2.5Y6/2) 粘土質シルト。北壁第３層と同じ。



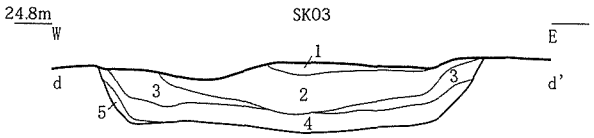
第５図　遺構平面図



1．にぶい黄色(2.5Y 6/3)粘土質シルト
2．黄灰色(2.5Y5/1)粘土質シルト
3．暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土質シルト(柱跡)



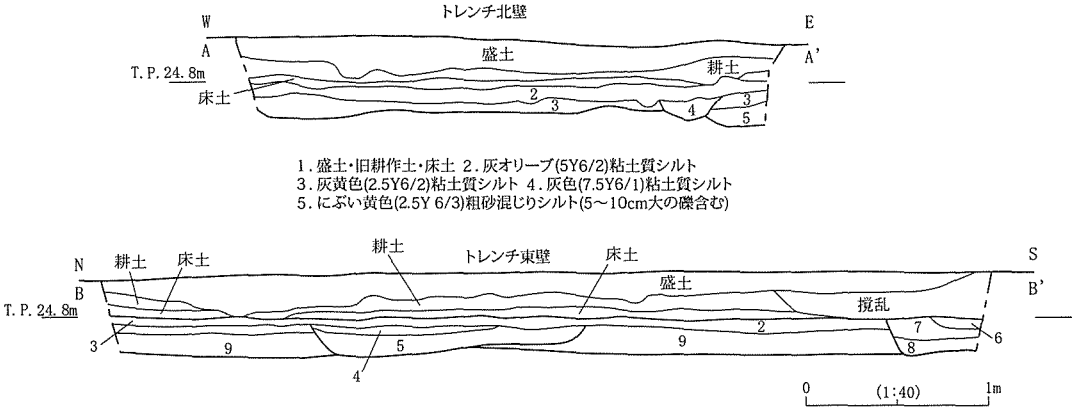
1．灰黄色(2.5Y6/2)粘土質シルト
2．黄灰色(2.5Y5/1)粘土質シルト
3．細砂混じり灰色(5Y5/1) 粘土質シルト
4．暗灰黄色(2.5Y5/2) 粘土質シルト(柱跡)



1．細砂混じり灰色(7.5Y6/1)粘土質シルト
2．灰オリーブ色(7.5Y5/2)粘土質シルト(土器・炭化物含む)
3．灰オリーブ色(5Y5/2)粘土質シルト
4．灰オリーブ色(5Y6/2)粘土質シルト
5．オリーブ褐色(2.5Y 4/4)粘土質シルト

0 (1:20) 40cm

第６図　各遺構断面図



第７図　トレンチ北壁断面図

第４層　灰オリーブ色 (5Y5/2) 粘土質シルト。SK01 埋土。

第５層　灰色 (10Y5/1) 粘土質シルト。SK01 埋土。

第６層　灰色 (N5/0) シルトに黄灰色 (2.5Y6/1) 粘土質シルトがマーブル状に混入する。SK02 埋土。

第７層　黄灰色 (2.5Y6/1) 粘土質シルト。SK02 埋土。

第８層　黄灰色 (2.5Y5/1) 粘土質シルト。SK02 埋土。

第９層　にぶい黄色 (2.5Y 6/3) 粗砂混じりシルト。５～ 10cm 大の礫含む。SD01 埋土。

第４・５層は SK01 の埋土である。第６～８層は SK02 の埋土である。第９層は SD01 の埋土である。トレンチ内では第３層上で鋤き溝、土坑及びピットを検出した。検出したピットのうち SP01 ～ SP04 及び SP05・SP06 がそれぞれ柱穴であることを確認した。SP01 ～ SP04 は SK03 によって切られている。埋土は以下のとおりである。

SP01 ～ SP04 埋土

第１層　にぶい黄色 (2.5Y 6/3) 粘土質シルト。

第２層　黄灰色 (2.5Y5/1) 粘土質シルト。

第３層　暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘土質シルト。柱跡。

SP05・SP06 埋土

第１層　灰黄色 (2.5Y6/2) 粘土質シルト。

第２層　黄灰色 (2.5Y5/1) 粘土質シルト。

第３層　細砂混じり灰色 (5Y5/1) 粘土質シルト。

第４層　暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘土質シルト。

SK03 の埋土は以下のとおりである。

第１層　細砂混じり灰色 (7.5Y6/1) 粘土質シルト。

第２層　灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 粘土質シルト。土器・炭化物含む。

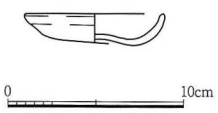
第３層　灰オリーブ色 (5Y5/2) 粘土質シルト。

第４層　灰オリーブ色 (5Y6/2) 粘土質シルト。

第５層　オリーブ褐色 (2.5Y 4/4) 粘土質シルト。

5）出土遺物

出土遺物は確認調査トレンチのピットから出土した土師器1点のみが図化できた。1は土師器皿である。底部は凹みをもついわゆる「へそ皿」である。体部は内弯気味に立ち上がる。体部外面にはユビオサエがやや残り、体部内面はヨコナデ調整し、調整による稜線をもつ。口縁部は直線的に立ち上がり、内外面ともにヨコナデ調整する。口縁部外面にはヨコナデ調整による稜線を持つ。口縁端部はやや尖り気味に終わる。15世紀後半から16世紀前半の所産。確認調査トレンチピットより出土。



第8図　遺物実測図

6）まとめ

今回の調査では室町時代後期から江戸時代にかけての遺構を確認した。特に確認調査で検出したピットからは完形の土師器皿が出土したことから遺構の時期は室町時代後期のものである。ただし、その他の遺構は耕作に伴うものが多く、遺物も多くは磨滅しており二次的な堆積である可能性が高い。また、確認深度が浅かったことから、河内寺との関係を考える上で重要な遺構は検出できなかった。

いずれにしても、河内寺廃寺跡周辺には中世段階での遺構が残されており、また遺構面は現状地盤よりごく浅い部分に残っていることが確認できた。今後、史跡地周辺で実施される土木建築工事については、今回の調査成果を踏まえて必要な指示を行っていく必要がある。

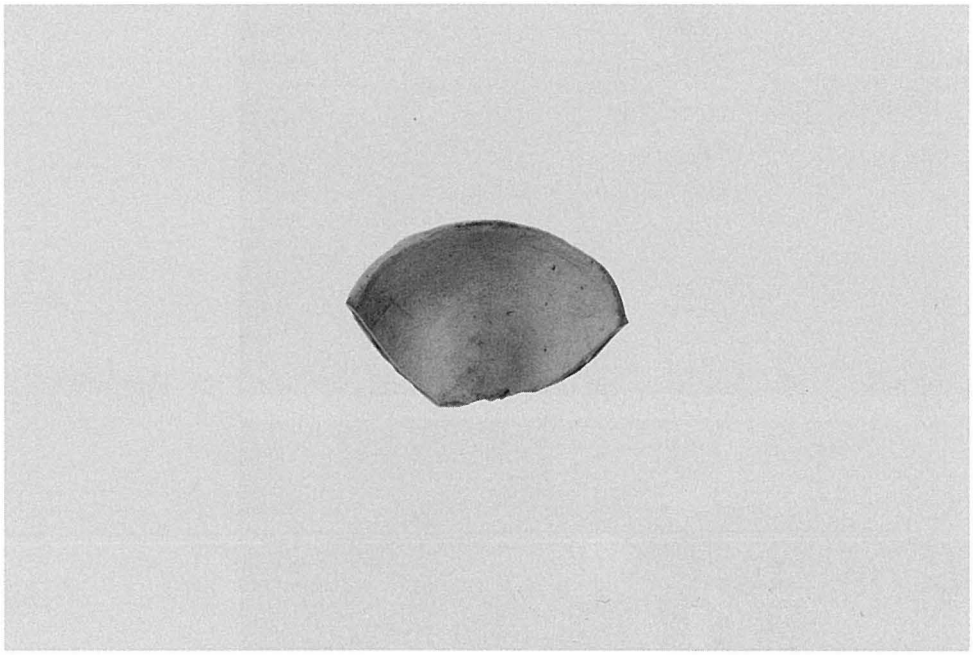


写真　確認調査トレンチピット出土土師器皿

【参考文献】

財団法人　東大阪市文化財協会　1999『埋蔵文化財発掘調査概報集　-1998年度(2)-』
東大阪市教育委員会　2015『国史跡河内寺廃寺跡第22次発掘調査概要』
中世土器研究会編 1995『概説　中世の土器・陶磁器』

図版1　河内寺跡第23次発掘調査　遺構

1．調査実施前（南から）

2．機械掘削状況（南から）

3．人力掘削状況（北西から）

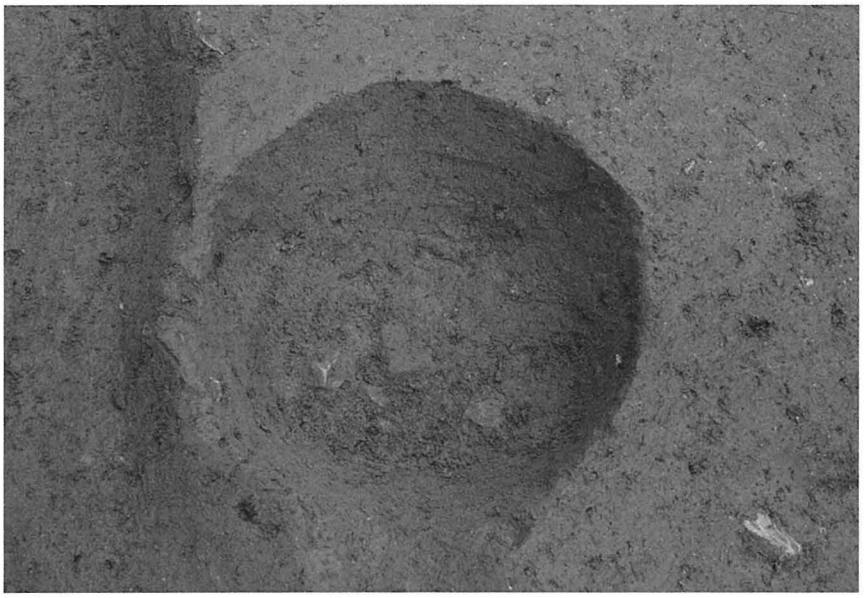
図版2　河内寺跡第23次発掘調査　遺構

1．遺構検出状況（南から）

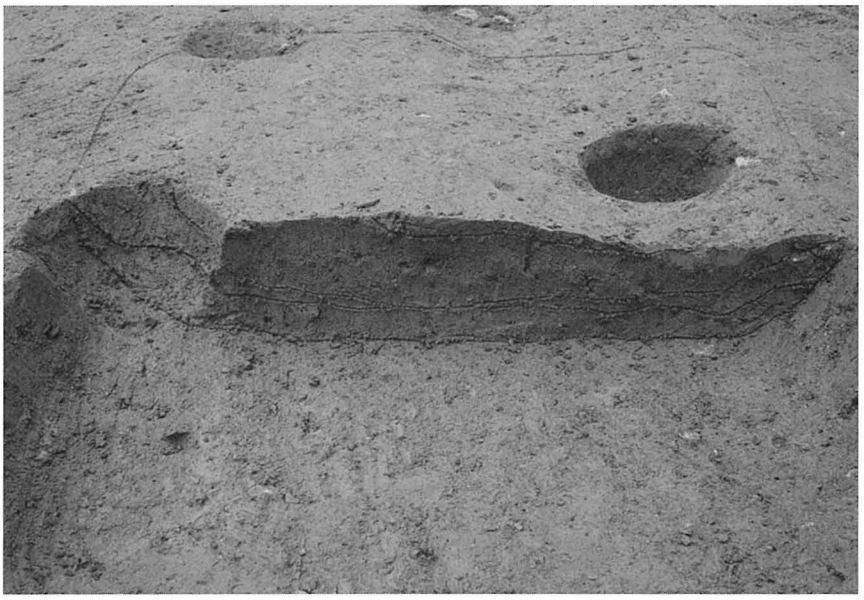
2．トレンチ東壁（西から）

3．SP06 断面（北から）

図版3　河内寺跡第23次発掘調査　遺構



1．SP07 断面（北から）



2．SK03 断面（北から）

3．完掘状況（北西から）

第４章　善根寺遺跡第４・５次発掘調査

１）はじめに

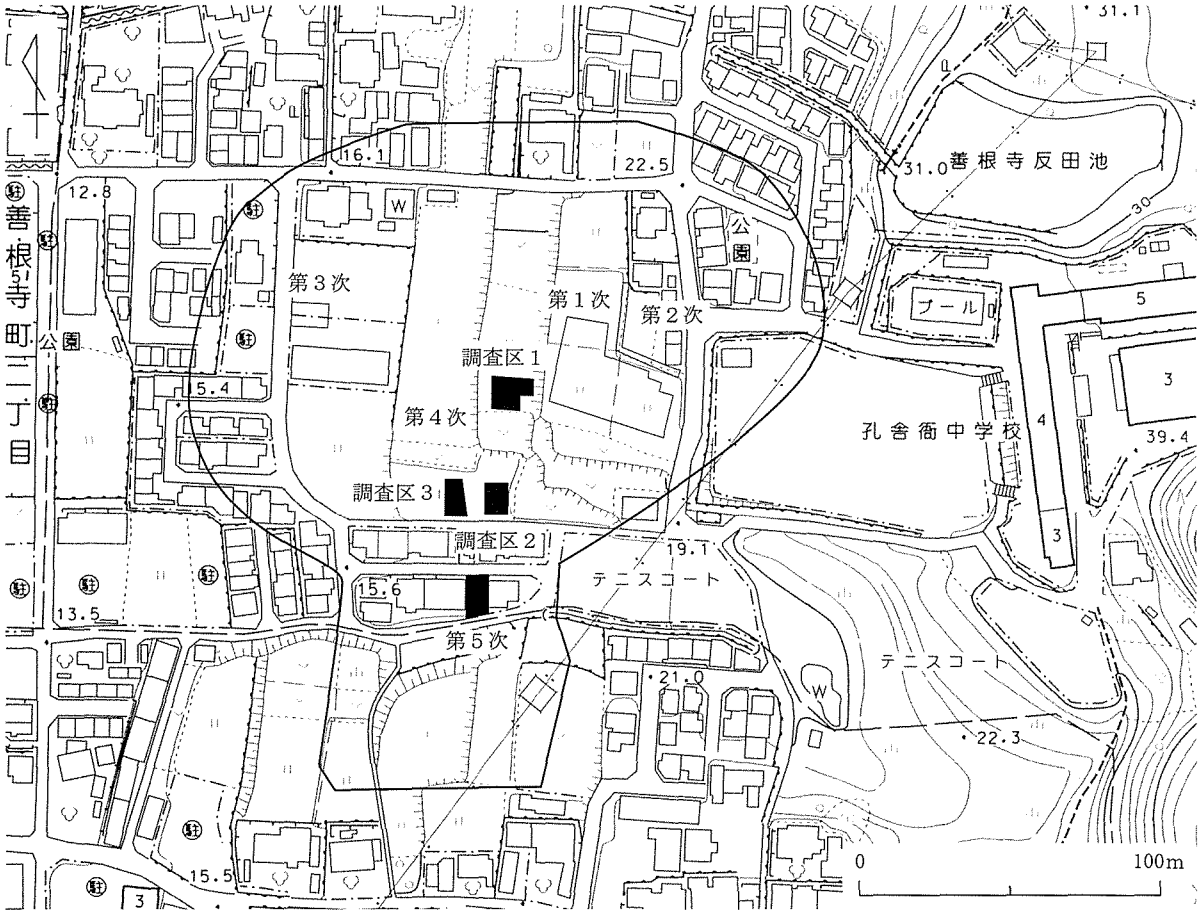
善根寺遺跡は、生駒山西麓の標高 15 ～ 22 ｍの段丘上に位置し、現在の善根寺町一丁目に広がる。北には大川が流れ、南は谷地形を有する。

善根寺遺跡は第１次調査によって奈良時代後半から平安時代中期の掘立柱建物６棟を検出し、建物の西側では井戸・溝・土坑が発見されている。須恵器の蓋を硯として転用しており、古代の郷の役所として機能していたと考えられている。また、円筒埴輪が多数出土したことから付近で古墳が築造されていたようである。今回は、第４次と第５次調査の成果について報告する。

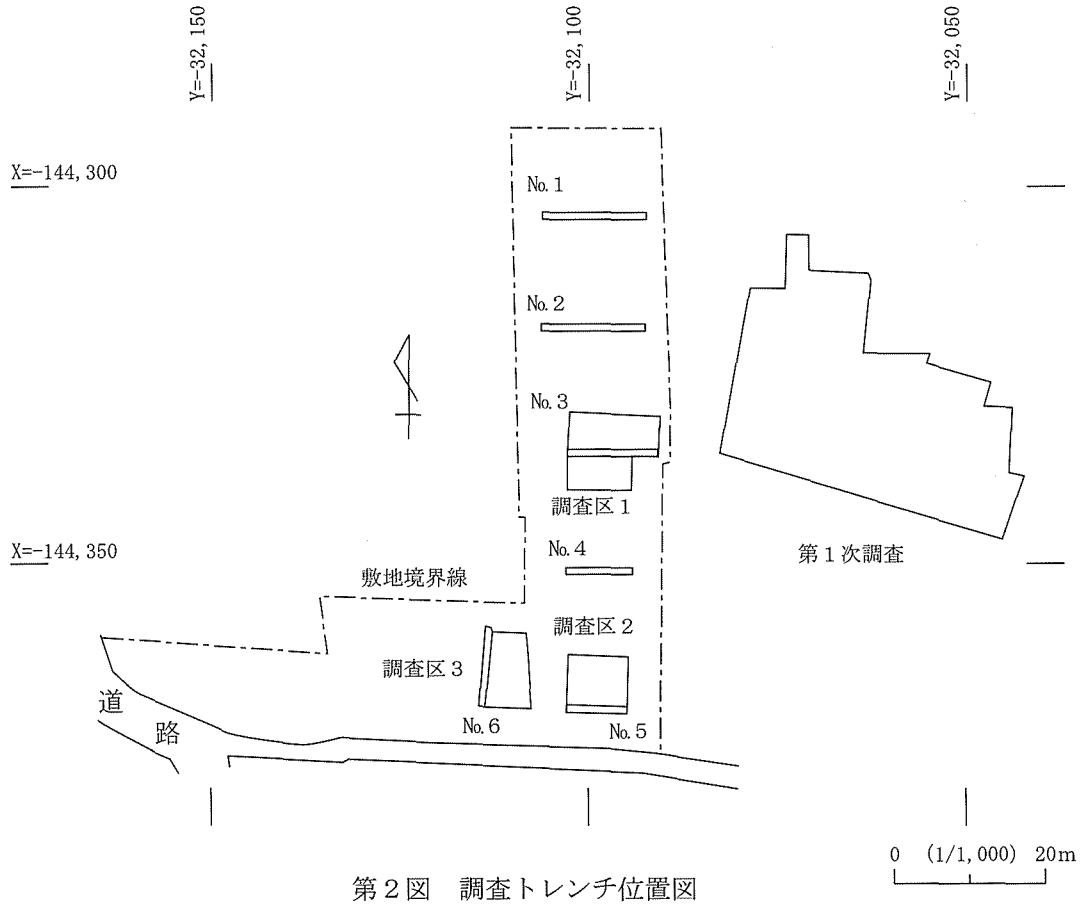
第４次調査

２）調査の経過

平成 26 年４月、東大阪市善根寺町一丁目において、零細事業主による老人ホーム建設に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。当該建築物の基礎工事は、埋蔵文化財への影響が懸念されたため、事前の確認調査が必要な旨を届出者に通知した。その後、平成 26 年５月 22 日・23 日に確認調査を実施した。確認調査の結果、№３において柱穴と溝、№５と№６において中世の柱穴を検出した。この結果に基づき取り扱いについて協議を行い、№３・５・６を中心として平成 27 年２月 23 日～平成 27 年３月 31 日に調査区を設定して調査を行った。調査面積は、計 254 ㎡である（第２図）。



第１図　調査位置図



第２図　調査トレンチ位置図

３）調査成果

（１）調査区１

層序（第３図）

第１層：旧耕作土

第２層：灰白色（10YR7/1）粗～細砂混じりシルト質砂

第３層：褐灰色（10YR5/1）粗～細砂混じりシルト質砂

第４層：黒褐色（10YR3/2）粗～細砂混じりシルト質砂

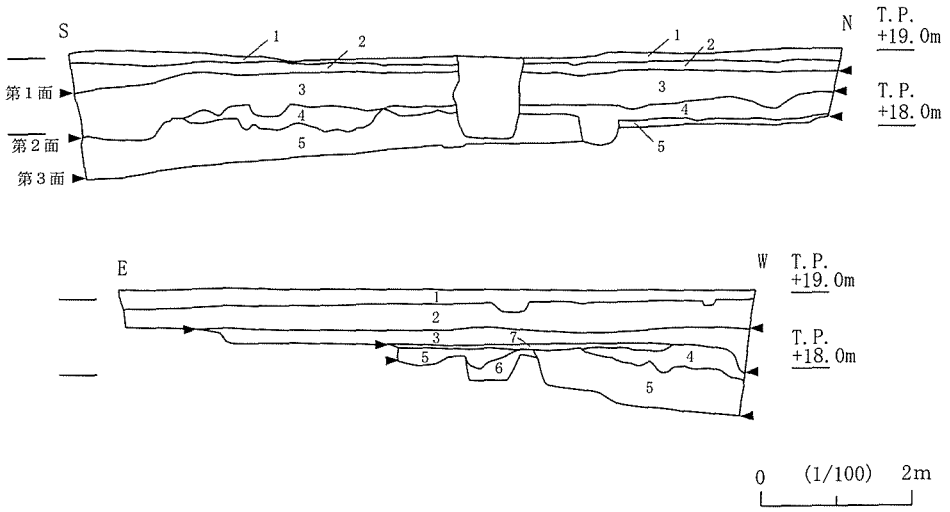
第５層：黒褐色（10YR3/2）粗～細砂混じりシルト質砂
　　黄色（2.5Y8/6）粘質シルトの偽礫を含む

第６層：黄色（2.5Y8/6）粘質シルト 灰白色（2.5Y7/1）粗～細砂混じりシルト質砂

第７層：褐灰色（10YR5/1）粗～細砂混じりシルト質砂

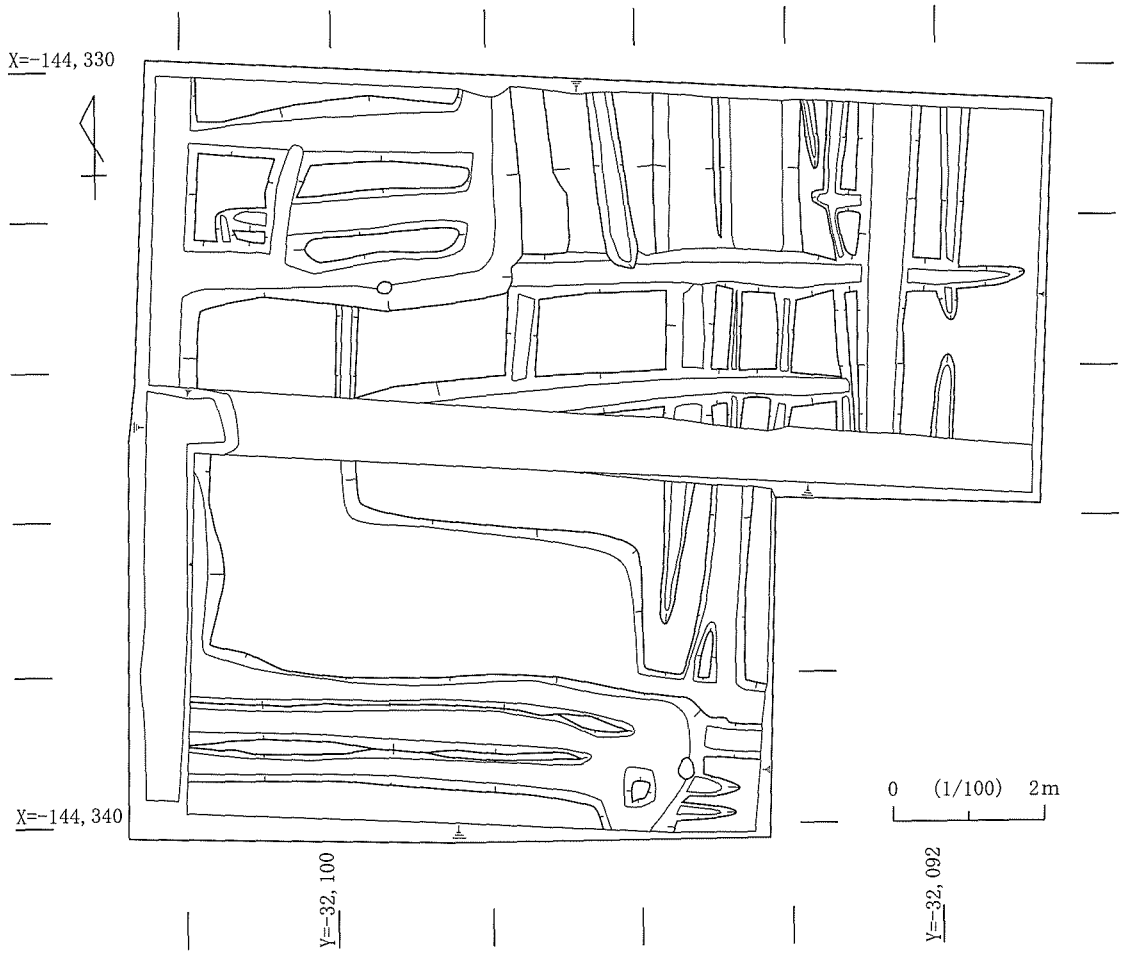
調査区１では、旧耕作土直下に第２層が全面に広がっていたが、調査区西側に大きな窪みが形成されており、この部分でさらに３層の堆積を確認できた。

第１～３層は耕作土である。第１・２層は近世から現代の耕作土である。第３層からは瓦器椀の他に常滑焼甕が出土しており、室町時代の耕作である。第４層は、遺物、炭、偽礫が混じることから盛土または整地土と考えられる。第４層からは８世紀前半の須恵器が出土しており平安時代以降に形成されたものである。第５層は第６層や黒褐色シルト質砂が不規則な大きさの偽礫としてまだらに混じる。南壁では第６層が低位へ流れとどまっている様子がうかがえる。また、黒褐色シルト質砂が上部から陥入し、不規則な大きさに土が割れている。これは、樹木の根による擾乱と考えられる。以上の

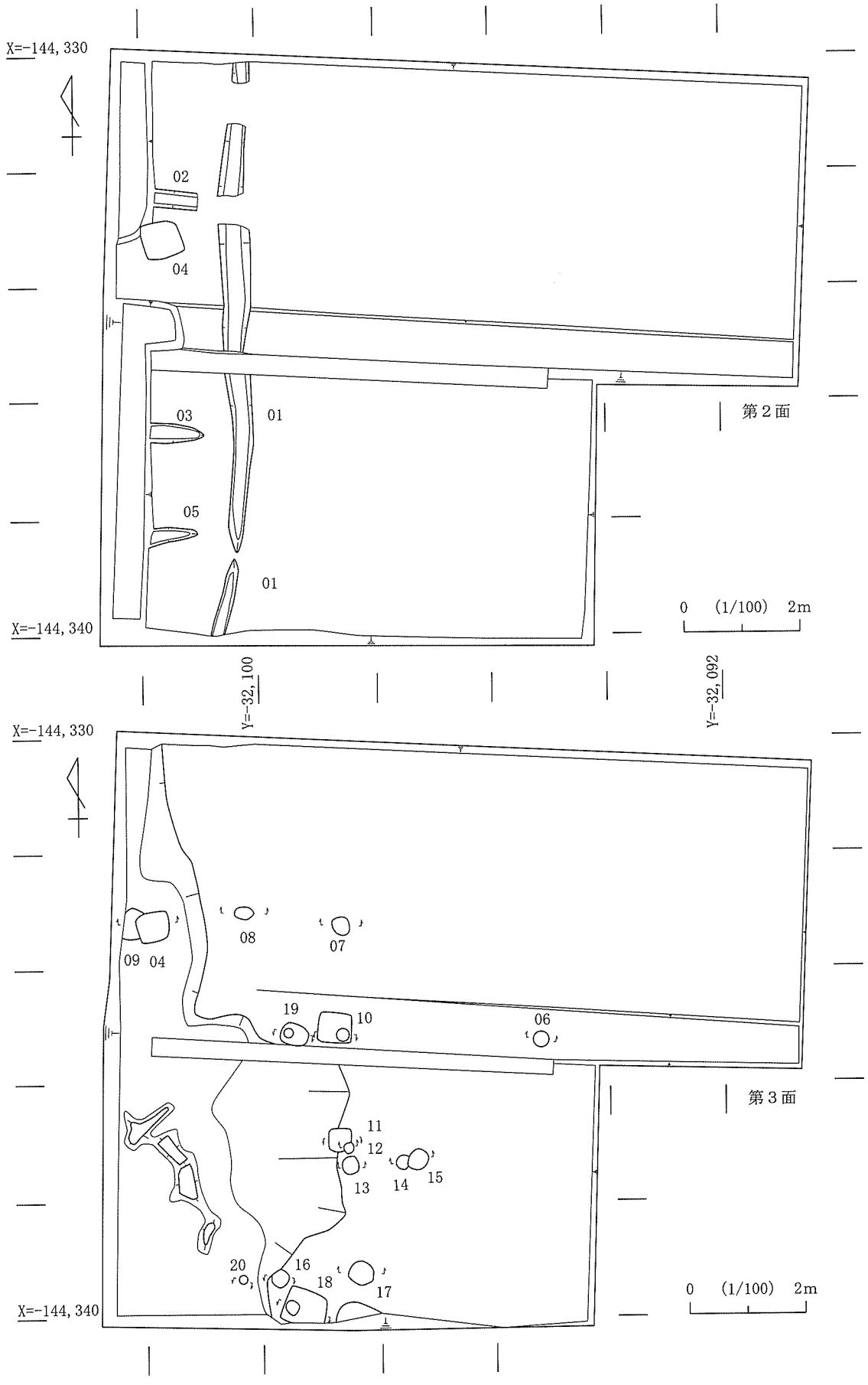


1．旧耕作土
2．灰白色(10YR7/1)粗～細砂混じりシルト質砂
3．褐灰色(10YR5/1)粗～細砂混じりシルト質砂
4．黒褐色(10YR3/2)粗～細砂混じりシルト質砂
5．黒褐色(10YR3/2)粗～細砂混じりシルト質砂
　黄色(2.5Y8/6)粘質シルトの偽礫含む
6．黄色(2.5Y8/6)粘質シルト
　灰白色(2.5Y7/1)粗～細砂混じりシルト質砂
7．褐灰色(10YR5/1)粗～細砂混じりシルト質砂

第３図　調査区１　西壁・南壁断面



第４図　調査区１　第１面平面図



第５図　調査区１　第２・３面平面図

ことから、第６層が低位へと崩落した後に第６層を母材とした土壌が形成され、樹木が生育していたと考えられる。第５層からは８世紀前半の須恵器が出土しており、第６層の崩落と樹木の生育は平安時代前期に属するものと考えられる。

遺構

第１面（第４図）

第３層上面を第１面として調査を行った。この面では、近世の鋤溝を検出した。

北西部分と南側において１段下がった地形を検出し、段々畑の遺構を検出した。鋤溝の軸はほぼ座標北に沿って掘削されている。

第２面（第５・６図）

西側にある第４層上面を第２面として調査を行った。溝４条と土坑を検出した。

01・02・03・05 溝は、いずれも耕作に伴う鋤溝と考えられる。01 溝からは須恵器とともに図化していないが瓦器が出土しており中世の所産である。

04 土坑は、掘り方の一辺が 0.7 ｍの正方形を呈し、検出した深さで 0.25 ｍを測る。当初、柱穴と想定して調査を進めたが明確な柱痕を検出できなかったことから土坑とした。耕作に伴う土坑であろうか。平安時代の須恵器杯と土師器甕が出土しているが、遺構の時期を示すものではなく混入と考えられる。

第３面（第５・６図）

第５層を除去し、第６層上面を第３面として調査を行った。いずれも第６層上面で検出しているが、06・07・08・10・19 は第２層直下での検出である。検出した遺構は、いずれも柱穴で掘り方の形状から円形と方形に分かれる。まず、円形の柱穴としては、06・07・08・12・13・14・15・16・17 が検出できた。06 は柱材が残存しており、底部は平坦に加工されていた。方形の柱穴としては、09・10・11・18・19 が検出できた。10・18・19 には柱痕が認められた。

遺物は 10・11・12・15・16・17・19 柱穴から出土している。図化した以外にも 17 柱穴から黒色土器の破片が出土している。所属時期については、18 柱穴は方形で一辺が 0.7 ｍと大きく平安時代にさかのぼる可能性がある。09 柱穴は西側壁において第４層中から掘り込まれており中世に属するものである。第３層の耕作に伴う削平により第４層は部分的にしか残存しておらず、本来は一帯にあったものと推測されることから、第６層上面で検出した遺構はいずれも第４層上面に帰属するものであり、18 柱穴を除きいずれも中世に属するものと考える。

（２）調査区２

層序（第７図）

第１層：黄灰色（2.5Y4/1）粗～細砂混じり砂質シルト

第２層：褐灰色（7.5YR6/1）粗～細砂混じり砂質シルト

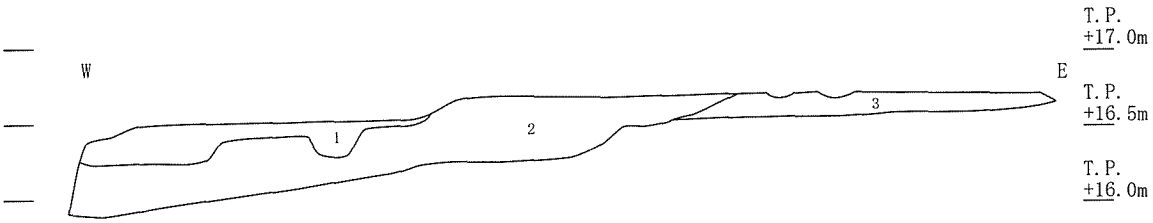
第３層：褐灰色（7.5YR4/1）粗～細砂混じり砂質シルト

第４層：褐灰色（10YR4/1）粗～細砂混じり砂質シルト
灰白色（10YR8/2）粘質シルトの偽礫を含む

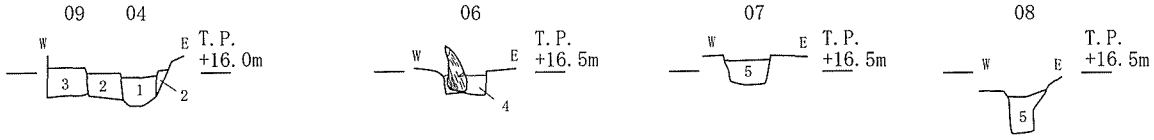
第５層：にぶい黄橙色（10YR7/2）粗～細砂混じり砂質シルト

第６層：黒褐色（10YR3/2）粗～細砂混じり砂質シルト

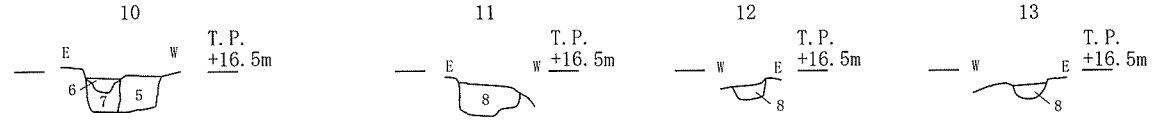
第７層：淡黄色（2.5Y8/3）粗～細砂混じり砂質シルト



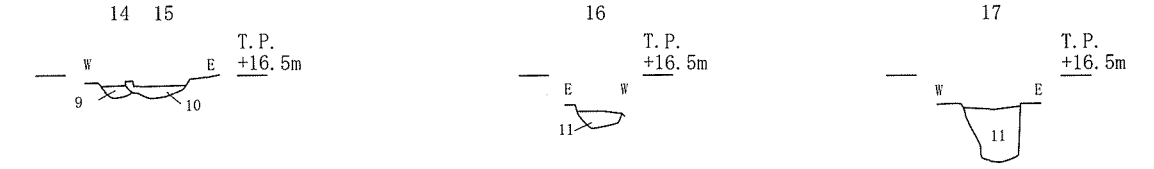
1．褐灰色（7.5YR5/1）粗～細砂混じり砂質シルト
2．褐灰色（7.5YR5/1）粗～細砂混じり砂質シルト
　黄橙色（10YR8/6）粘質シルト黒褐色（7.5YR3/2）粗砂混じり砂質シルトの偽礫含む
3．浅黄橙色（10YR8/4）砂質シルト
　灰白色（2.5Y7/1）砂質シルト混じる



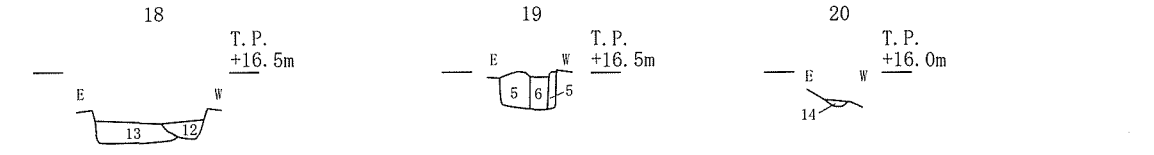
1．黒褐色（10YR3/2）粗砂混じり粘質シルト
2．黒褐色（10YR3/2）粗砂混じり粘質シルト
　明青灰色（5GB7/1）粗砂がやや多い
3．黒褐色（10YR3/2）粗砂混じり粘質シルト
　明青灰色（5GB7/1）粗砂が多い
4．灰色（2.5Y7/1）粗～細砂
　黄橙色（10YR8/8）粘質シルトの偽礫含む
5．暗オリーブ色（7.5Y4/3）粘質シルト
　明黄褐色（10YR7/6）粘質シルトの偽礫含む



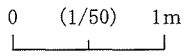
6．黒褐色（10YR3/2）粘質シルト
7．灰白色（5Y7/1）粗～細砂混じりシルト質砂
8．褐灰色（10YR4/1）粗砂混じり粘質シルト　黄褐色（10YR5/7）粘質シルトブロック含む



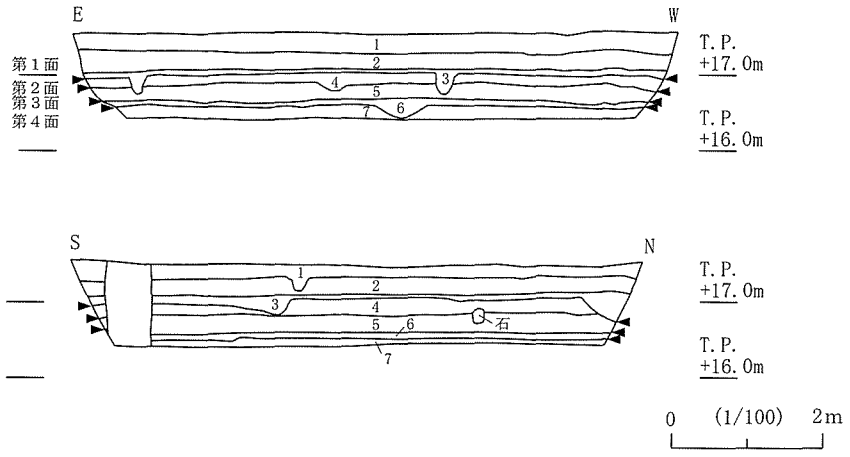
9．褐灰色（10YR5/1）粗砂混じり砂質シルト
10．褐灰色（10YR5/1）粗砂混じり砂質シルト
　灰白色（5Y7/1）砂質シルトの偽礫含む
11．褐灰色（10YR5/1）粗砂混じり粘質シルト
　黄橙色（10YR8/6）粘質シルトの偽礫含む



12．黒褐色（10YR3/2）中～細砂混じり砂質シルト
　明黄褐色（10YR7/6）粘質シルトの偽礫含む
13．黒褐色（10YR3/2）中～細砂混じり砂質シルト
　明黄褐色（10YR7/6）粘質シルトの偽礫多く含む
14．黒褐色（10YR3/2）粗砂混じり粘質シルト
　炭含む



第６図　調査区１　遺構断面図



1．黄灰色（2.5Y4/1）粗～細砂混じり砂質シルト
2．褐灰色（7.5YR6/1）粗～細砂混じり砂質シルト
3．褐灰色（7.5YR4/1）粗～細砂混じり砂質シルト
4．褐灰色（10YR4/1）粗～細砂混じり砂質シルト
　灰白色（10YR8/2）粘質シルトの偽礫含む
5．にぶい黄橙色（10YR7/2）粗～細砂混じり砂質シルト
6．黒褐色（10YR3/2）粗～細砂混じり砂質シルト
7．淡黄色（2.5Y8/3）粗～細砂混じり砂質シルト

第７図　調査区２　西壁・南壁断面

調査区２では７層の堆積層を確認した。第１・２層は近世から現代にかけての旧耕作土である。第３層は耕作土である。12 世紀後半の遺物を含む遺構が下面で形成されており、13 世紀以降の耕作土と考える。中世の耕作土の直下には盛土と整地が行われていた。第４・５層は砂とシルトがかき混ぜられたような複雑な構造がみられる。これは人為的な痕跡であり盛土と整地が行われたと考える。第４層からは瓦質火鉢が出土しており、第５層からは平安時代の須恵器が出土している。第６層は上部に灰色シルトが堆積し、下部に砂質シルトが堆積している。灰色シルトは部分的にしか残存していなかった。斜面地または窪地に堆積した層である。灰色シルトの下面はかなり凸凹しており水が頻繁にたまる湿地であったと推測する。第６層からは８世紀後半の土器が出土している。第７層は砂が卓越しており水によって堆積した層である。ただ明瞭な葉理構造はなく、砂のしまりが悪い。部分的に黒褐色の粘土が堆積しており、雨が降った際の水溜りまたは水みちがあったと推測される。第７層からの遺物出土はなく時期は不明である。

遺構

第１面（第８・10 図）

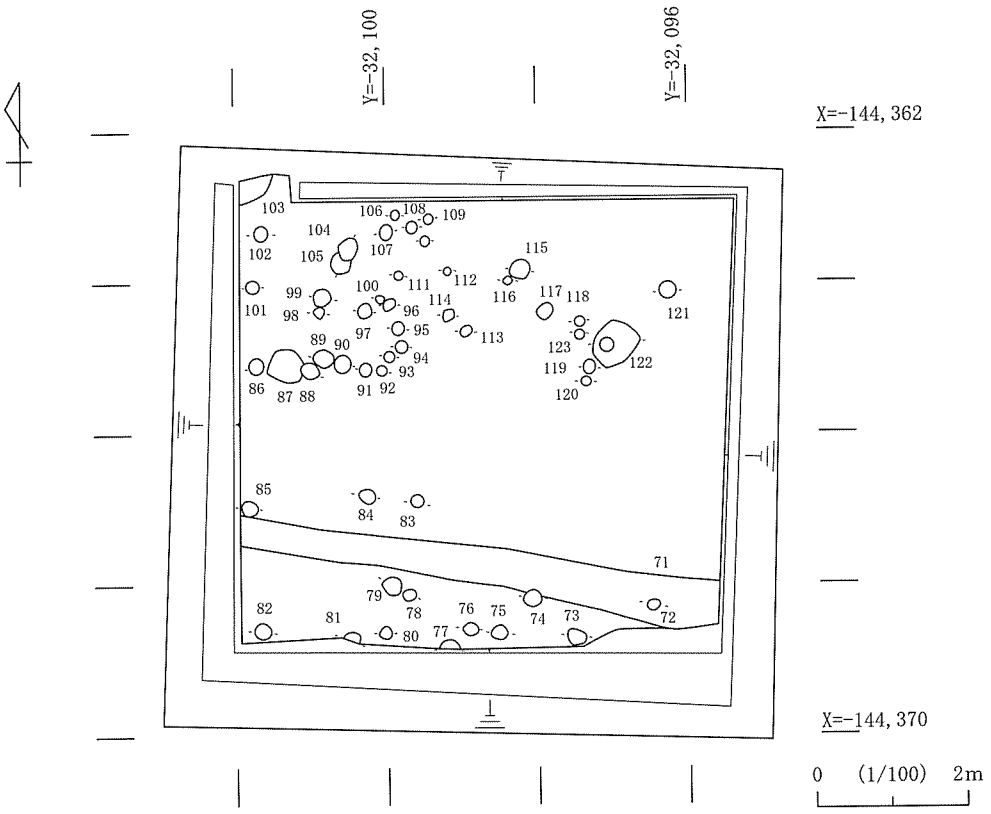
第３層下面を第１面として調査を行った。検出した遺構は壁断面の検討からいずれも第３層中に属するものである。

71 溝は東西に軸をもつ溝である。深さ 0.2 ｍを測る。区画溝であろうか。72 ～ 102・104 ～ 123 は柱穴である。柱穴からは瓦器が出土しており、いずれも中世に属するものと考えられる。103 は土坑である。埋土からは瓦器椀と瓦質土器羽釜が出土した。出土遺物から 13 世紀代に属するものである。

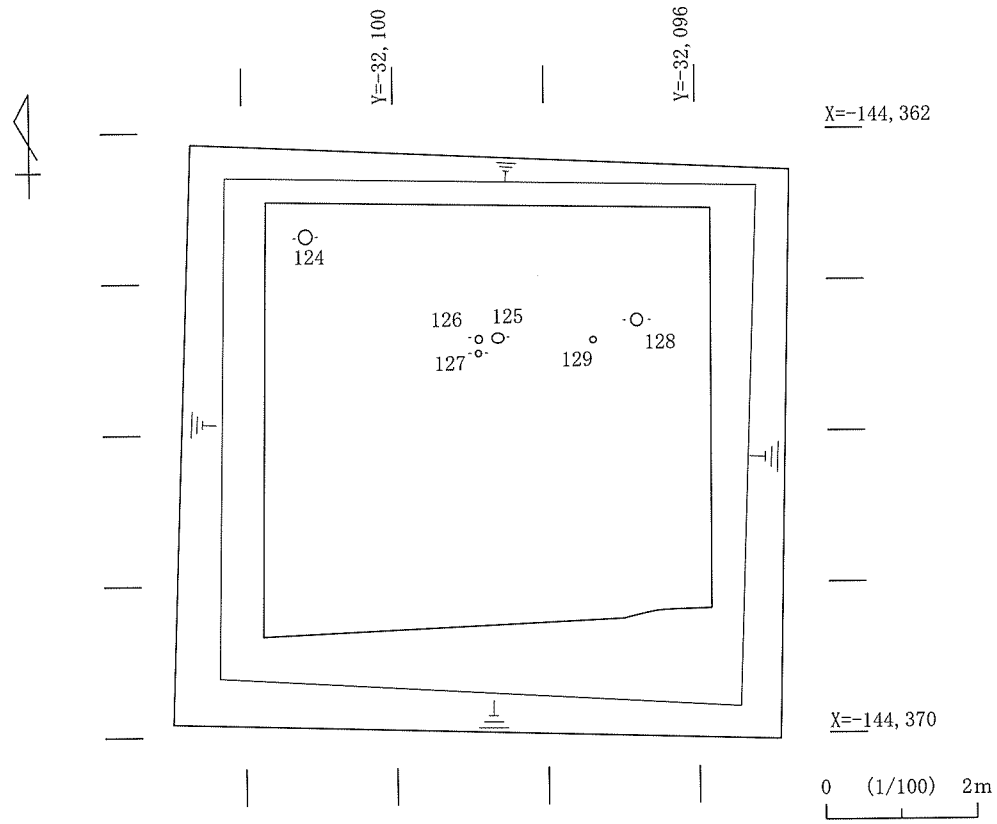
検出した柱穴は北東側と南側に偏在しており掘立柱建物を想定するべきであろう。しかし、明確な柱間を復元できるものはない。

第２面（第８・10 図）

第４層下面を第２面として調査を行った。

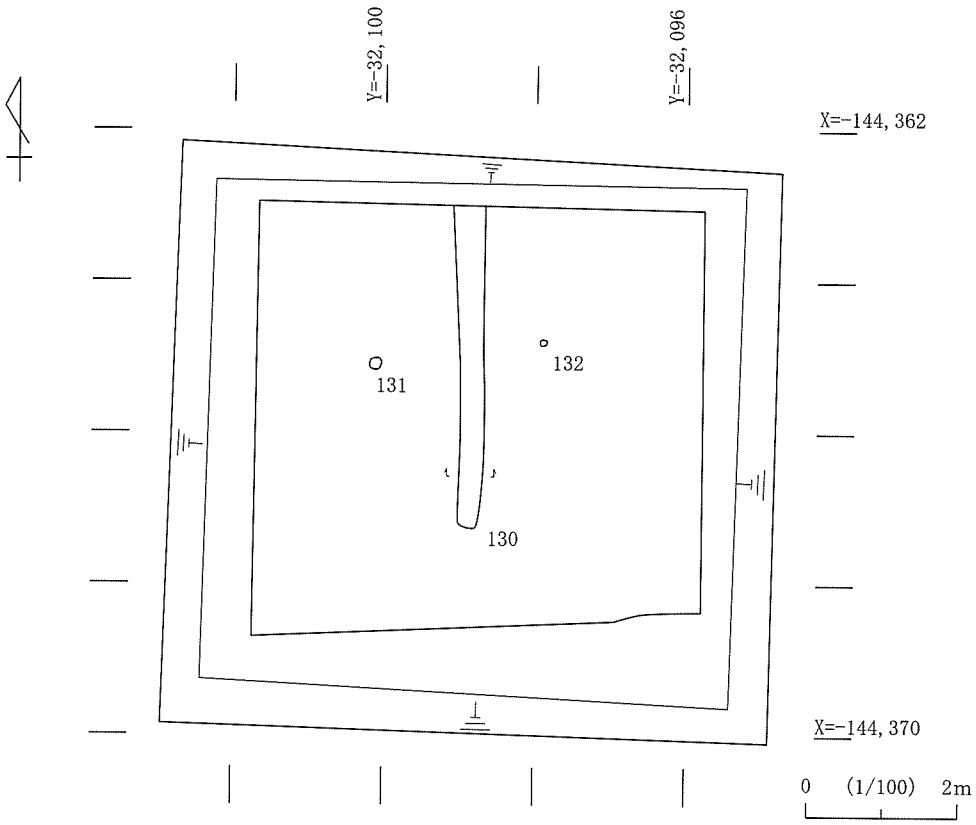


第１面

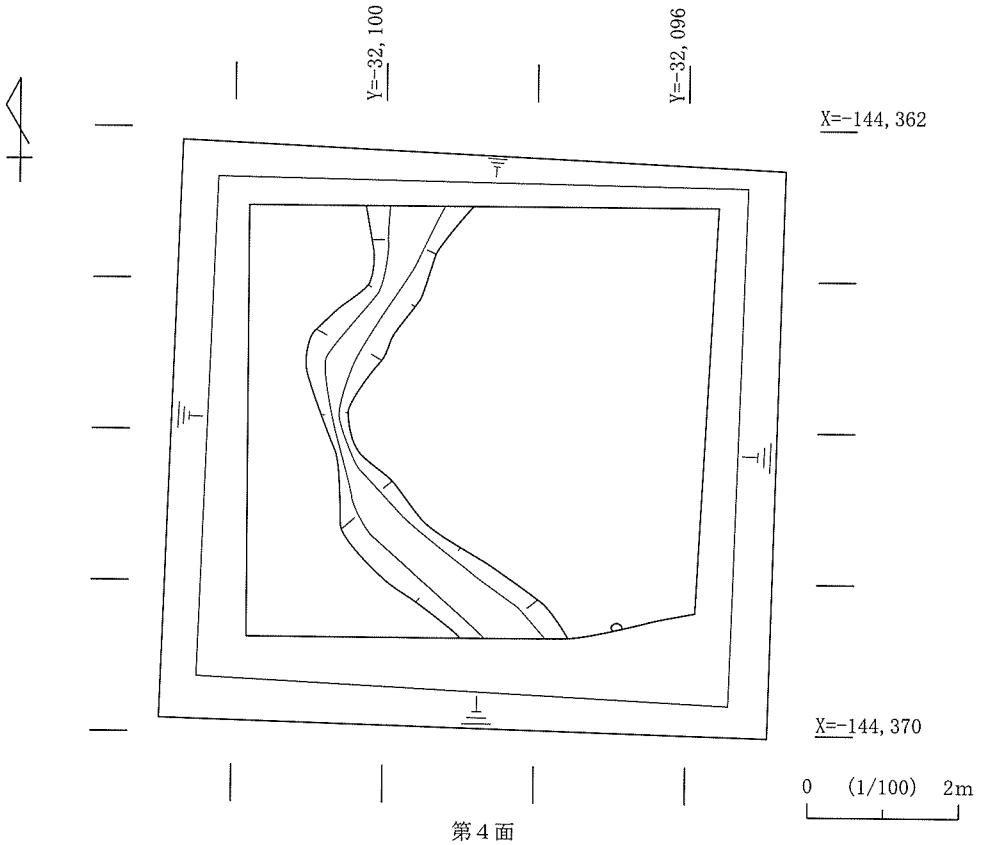


第２面

第８図　調査区２　第１・２面平面図

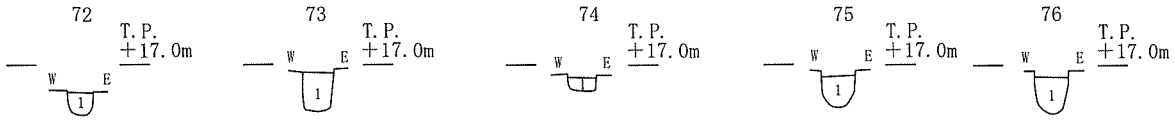


第３面

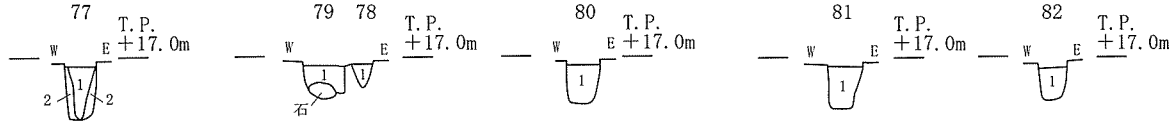


第４面

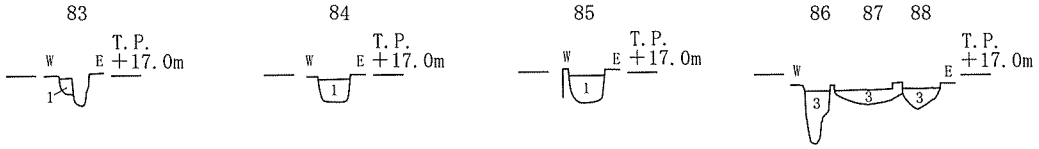
第９図　調査区２　第３・４面平面図



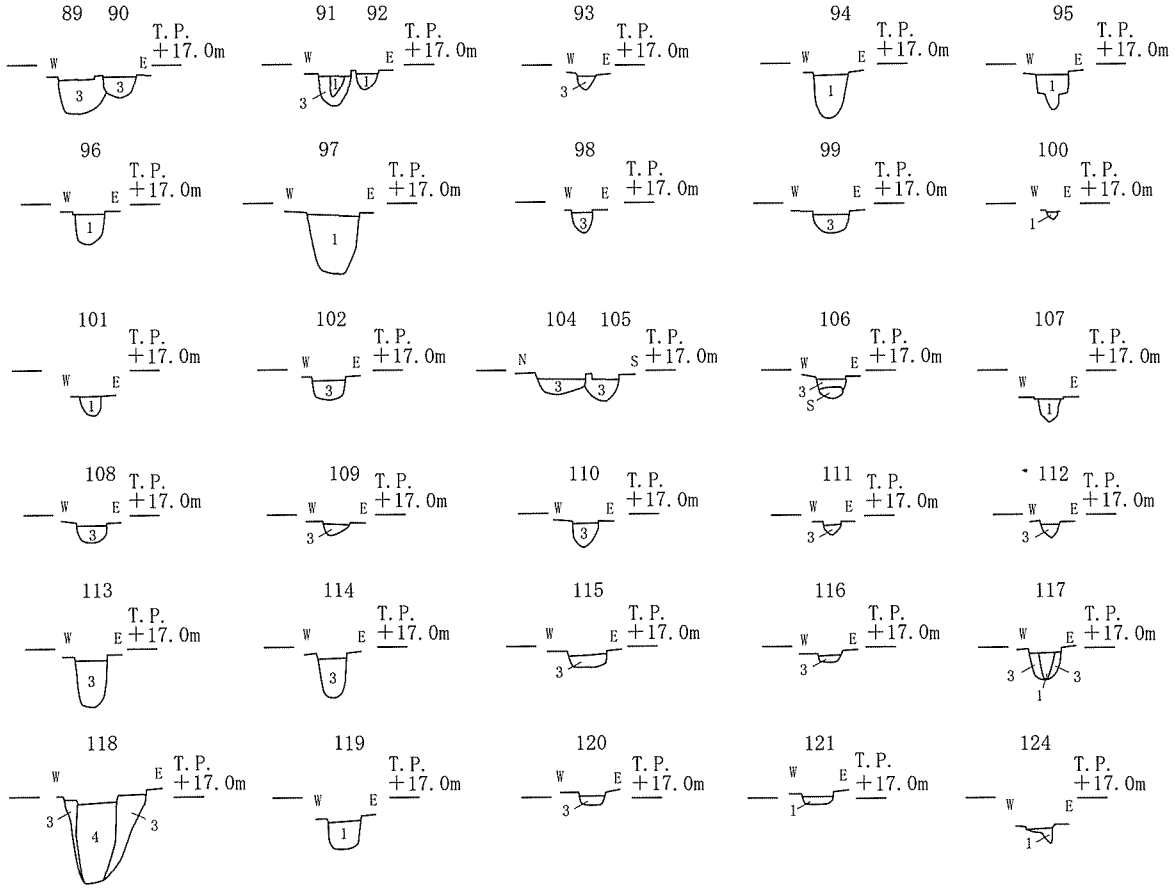
1．黒褐色（7.5YR3/2）粗～細砂混じり砂質シルト



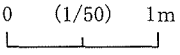
2．黒褐色（7.5YR3/2）砂質シルト

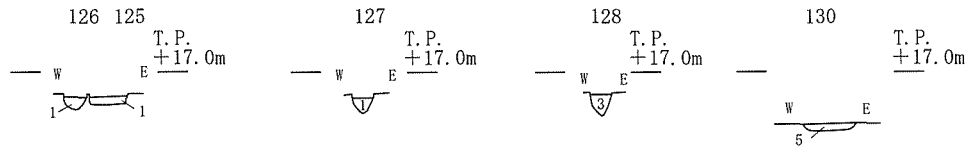


3．灰黄褐色（10YR6/2）粗～細砂混じり砂質シルト



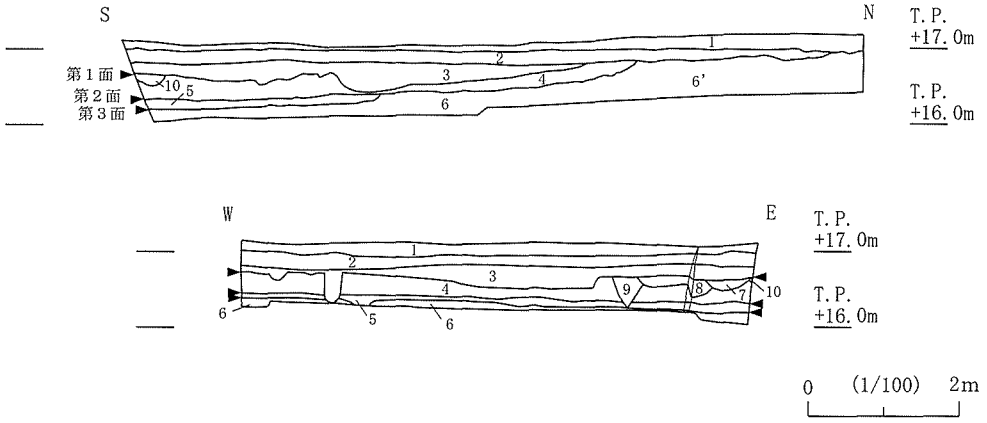
4．灰黄褐色（10YR6/2）細～粗砂混じり砂質シルト
黒褐色 7.5YR3/2 砂質シルトの偽礫含む





5．黒褐色（10YR3/2）粘質シルト

第 10 図　　調査区 2　遺構断面図



1．黄灰色（2.5Y4/1）粗～細砂混じり砂質シルト
2．黄灰色（2.5Y6/1）粗～細砂混じり砂質シルト
3．褐灰色（10YR5/1）粗～細砂混じり砂質シルト
4．灰黄褐色（10YR5/2）粗～細砂混じり砂質シルト
5．黒褐色（10YR3/2）粗～細砂混じり砂質シルト
6．灰白色（2.5Y8/1）砂質シルト
6'．黄色（2.5Y8/6）粗～細砂混じり砂質シルト
7．褐灰色（10YR6/1）砂質シルト
灰黄褐色（10YR5/2）粗～細砂混じり砂質シルト
8．褐灰色（10YR6/1）砂質シルト
灰黄褐色（10YR5/2）粗～細砂混じり砂質シルト
9．褐灰色（10YR6/1）砂質シルト
灰黄褐色（10YR5/2）粗～細砂混じり砂質シルト
10．炭

第11図　調査区３　西側・南側壁断面

124 ～ 129 は柱穴である。いずれも浅く第１面で検出した柱穴の埋土と同じであることから、検出した遺構はいずれも第１面に属するものであろう。129 からは平安時代の土師器杯が出土しているが、遺構の時期を示すものではない。

第３面（第９図）

第５層除去面を第３面として調査を行った。

130 は南北に軸を持つ溝である。非常に浅く耕作に伴う溝であろう。131・132 は小穴である。機能用途については不明である。遺構からの出土遺物はないが、第５層からは８世紀の遺物が出土しており、平安時代の所産である。

第４面（第９図）

第６層を除去して第７層上面を第４面として調査を行った。自然河川を検出した。

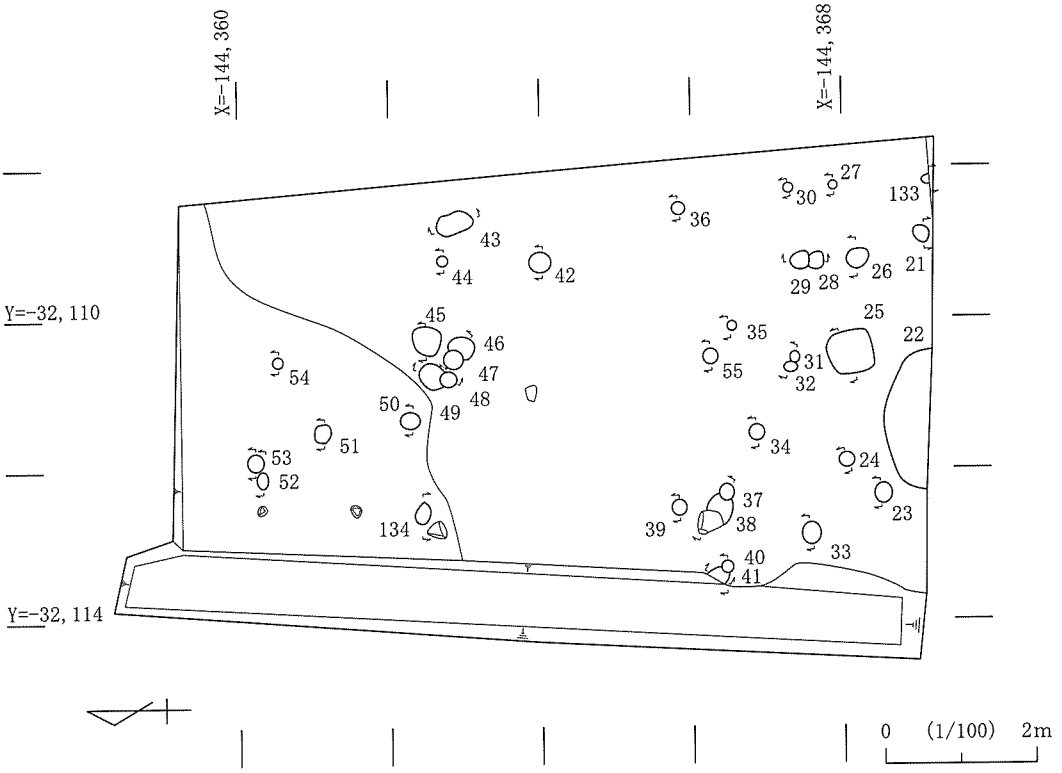
自然河川は地形に沿って北から南へと流れる小さな河川である。出土遺物はなく時期は不明である。第４面は、水溜りの窪みも多数検出しており、検出した河川は雨などの際に水が集積し低位へと流れる水みちとして機能していたものと考えられる。

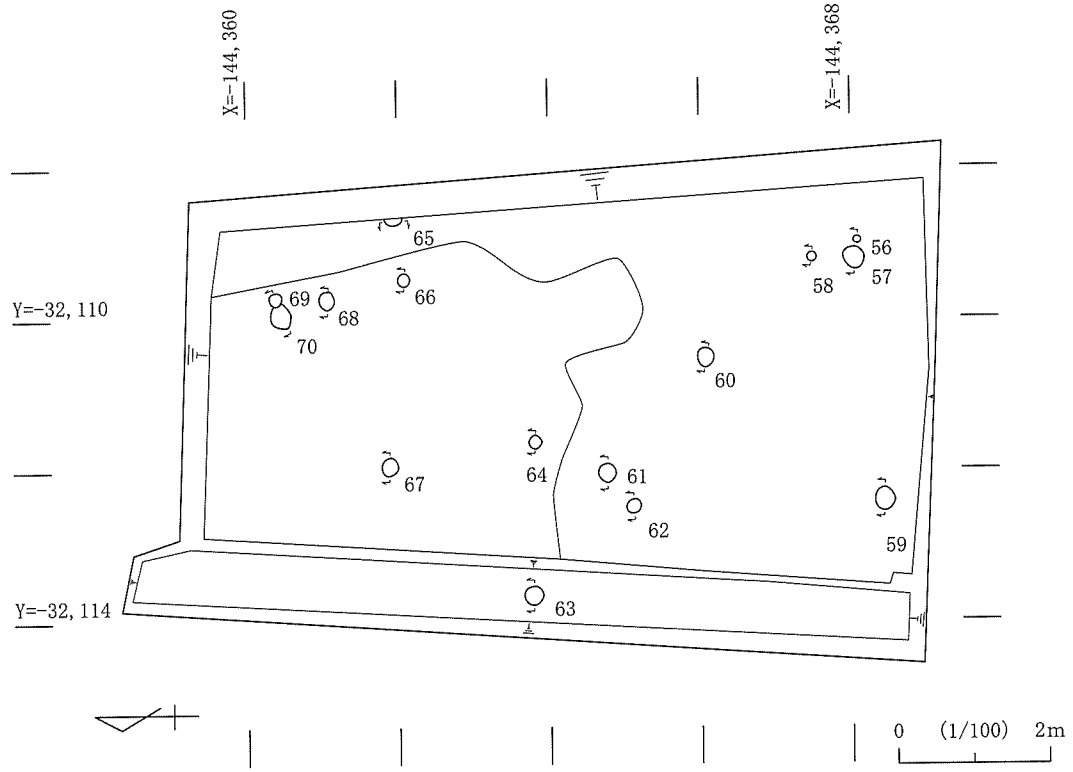
（３）調査区３

層序（第 11 図）

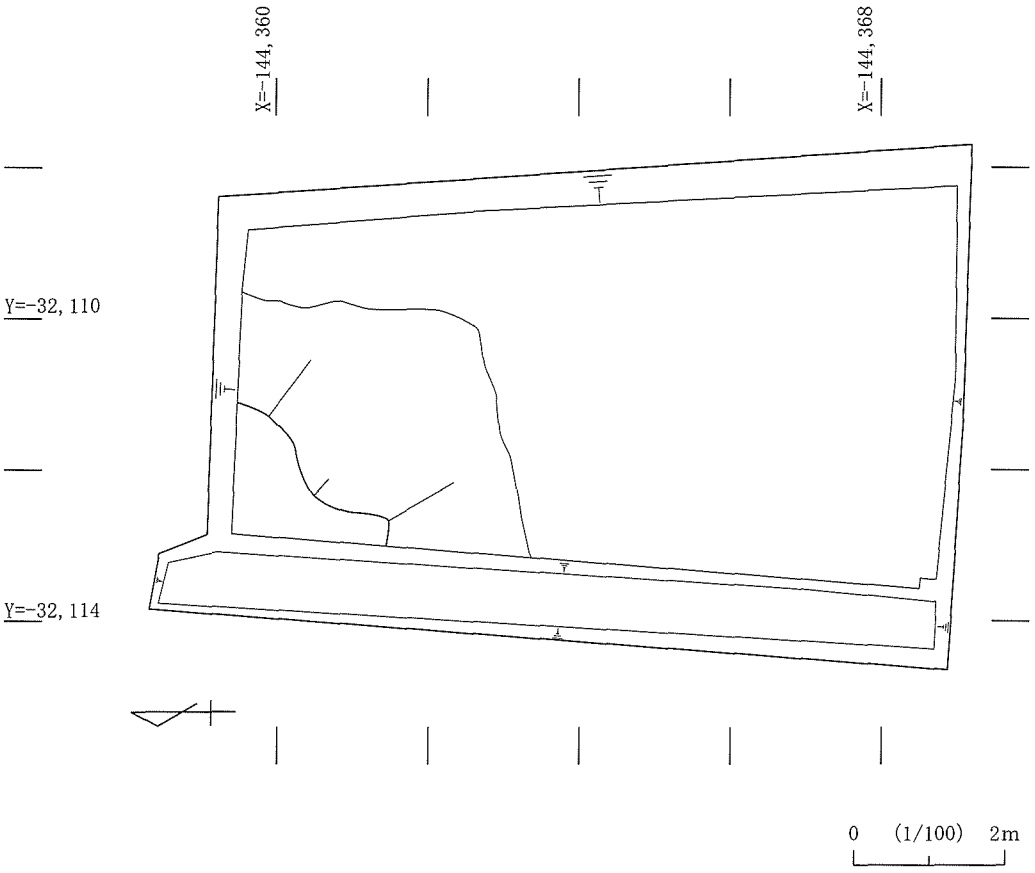
第１層：黄灰色（2.5Y4/1）粗～細砂混じり砂質シルト
第２層：黄灰色（2.5Y6/1）粗～細砂混じり砂質シルト
第３層：褐灰色（10YR5/1）粗～細砂混じり砂質シルト
第４層：灰黄褐色（10YR5/2）粗～細砂混じり砂質シルト
第５層：黒褐色（10YR3/2）粗～細砂混じり砂質シルト
第６層：灰白色（2.5Y8/1）砂質シルト

調査区３では、南に行くにしたがい標高を減じる地形であり、この低い部分に５層の堆積層を確認





第12図　調査区3　第1面　第2面平面図



第13図　調査区３　第３面平面図

した。

第１・２層は、近世から現代にかけての耕作土である。第３層も耕作土である。第３層からは瓦器や東播系須恵器が出土しており、13世紀前半の耕作土である。第４層は上部が盛土、下部が水成堆積層である。調査時には、第４層の上部と下部の境が明瞭ではなく一連の堆積層と認識していた。しかし、改めて断面の検討をした結果、盛土と水成堆積層に分層できるとの結論に至った。まず、上部は炭、焼土、粗砂が卓越しており多くの遺物を包含していた。遺物は８世紀後半のものであり、平安時代以降に形成されたものである。下部は、粗砂であり、低い場所に水によって堆積したものである。第５層も水成堆積層である。砂と泥によって構成されており、有機物の堆積と生物擾乱により黒褐色を呈する。第５層からは８世紀の須恵器と土師器が出土した。第６層は北と南でやや異なる層位である。北側の高い部分は、調査区１第６層と同じで、南側は調査区２第７層と同様である。

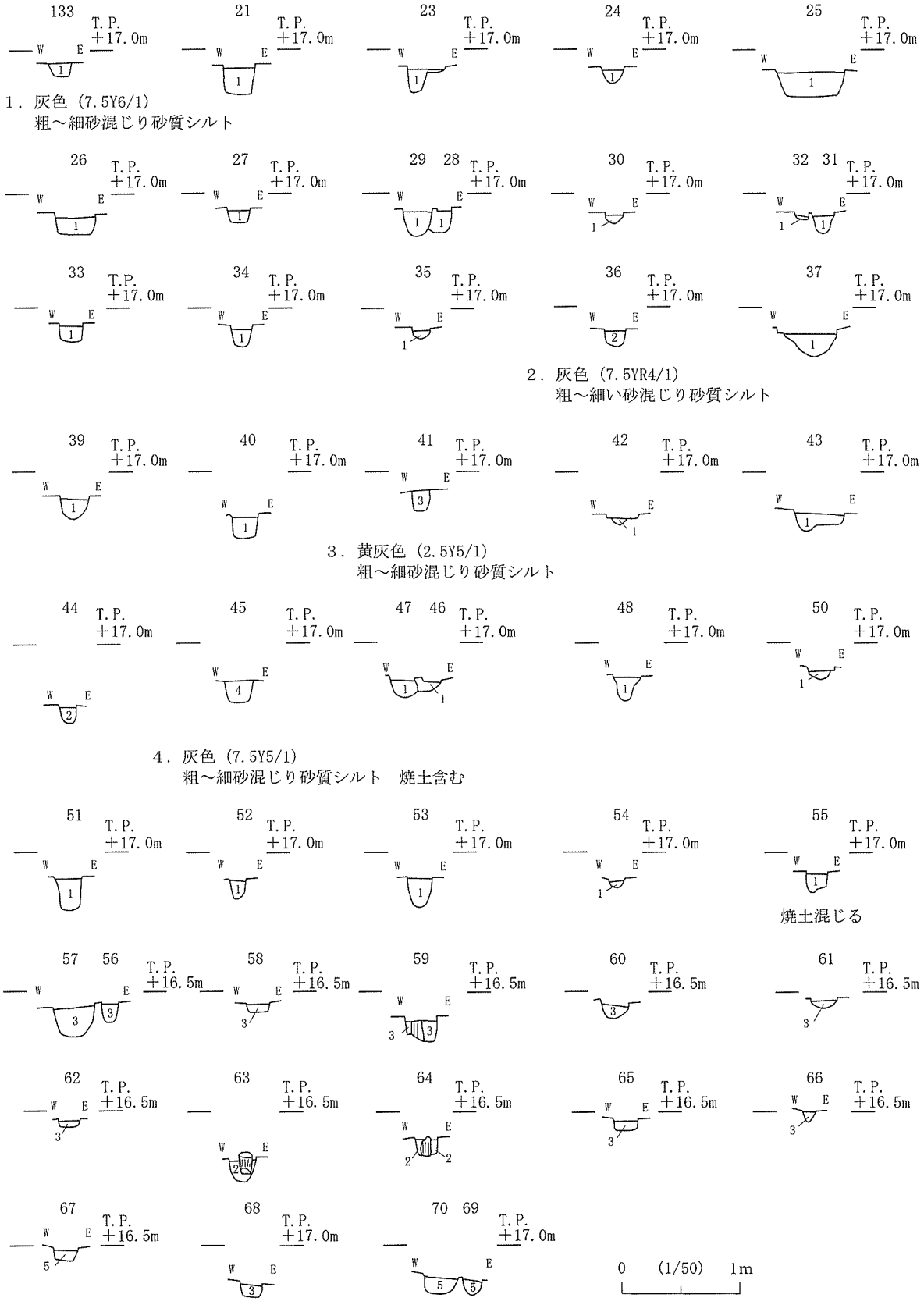
遺構

第１面（第12・14図）

第３層下面を第１面として調査を行った。調査区２第１面と同様に盛土上面での検出である。多数の柱穴と22土坑を検出した。柱穴は掘立柱建物に関する遺構と考えられる。28・39・42・47柱穴からは中世に属する遺物が出土しており、その他の柱穴も中世の所産と考えられる。134からは天目茶碗（96）が出土しており、14世紀後半である。

第２面（第12・14図）

第５層上面を第２面として調査を行った。この面では柱穴を検出した。いずれも第１面に属する遺



第 14 図　　調査区３　遺構断面図

構と考えられる。

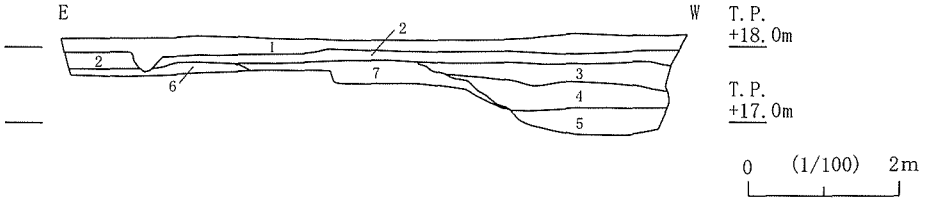
第３面（第 13 図）

第６層上面を第３面として調査を行った。遺構は検出できなかったが、南へと低くなる傾斜面を検出した。

傾斜面は谷地形の一部である。北側は近世の耕作による削平に伴って水平な地形となっているが本来は、緩やかな傾斜面が連続しており、この斜面地に砂や泥が堆積して第５・６層が形成された。南側の低い場所ではかなり凸凹した地形であり、調査区２第４面と同様に水溜りや水みちが形成されている。

（４）確認調査№.４（第 15 図）

確認調査№.４において自然河川を検出した。北西から南東に走行し深さ１ｍを測る。出土遺物がなく時期は不明である。堆積物は粗砂である。近世から現在の耕作土直下にあり、第３層が調査区２第３層と類似している。中世から近世にかけてのものであろうか。掘削の痕跡など人為的な痕跡は見られなかったが、調査範囲が狭く人工的な流路の可能性がある。



1．黄灰色（2.5Y4/1）粗～細砂
2．黄灰色（2.5Y6/1）シルト質砂
3．黒褐色（10YR3/2）粗～細砂混じりシルト質砂
4．青灰色（5B6/1）粗砂
5．青灰色（5B6/1）細砂
6．灰白色（5Y7/1）粘質シルト
7．黒褐色（10YR3/2）粗～細砂混じり砂質シルト

第 15 図　確認調査№.４　南壁断面図

（５）遺物

調査区１　第３層

１～３は須恵器杯蓋、４は須恵器杯、５・６は土師器皿、７は土師器甕、８は須恵器捏鉢、９は瓦質土器捏鉢、10 は陶器甕、11 は砥石である。

５はヨコナデにより口縁部と体部に稜を有する。底面にはユビオサエがのこる。12 世紀代。７は内傾気味に立ち上がり外反する口縁部をもつ。口縁端部をわずかに肥厚さ、肩は張り外面にヨコミガキが施される。10 は常滑焼で内傾する口縁部に貼り付け口縁を持つ。11 は側面が欠損しているが砥石である。凝灰岩製で擦痕が残る。１～４は８世紀後半、５～９は 13 世紀前半の所産である。10 は 15 世紀前半である。

調査区１　第４層

12・13 は須恵器杯蓋、14・15 は須恵器杯、16 は土師器杯である。12 ～ 16 は８世紀前半。

調査区１　第５層

17 は弥生土器壺の底部である。外面は磨滅によって調整は不明である。弥生時代後期前半の所産であろう。

調査区１　遺構

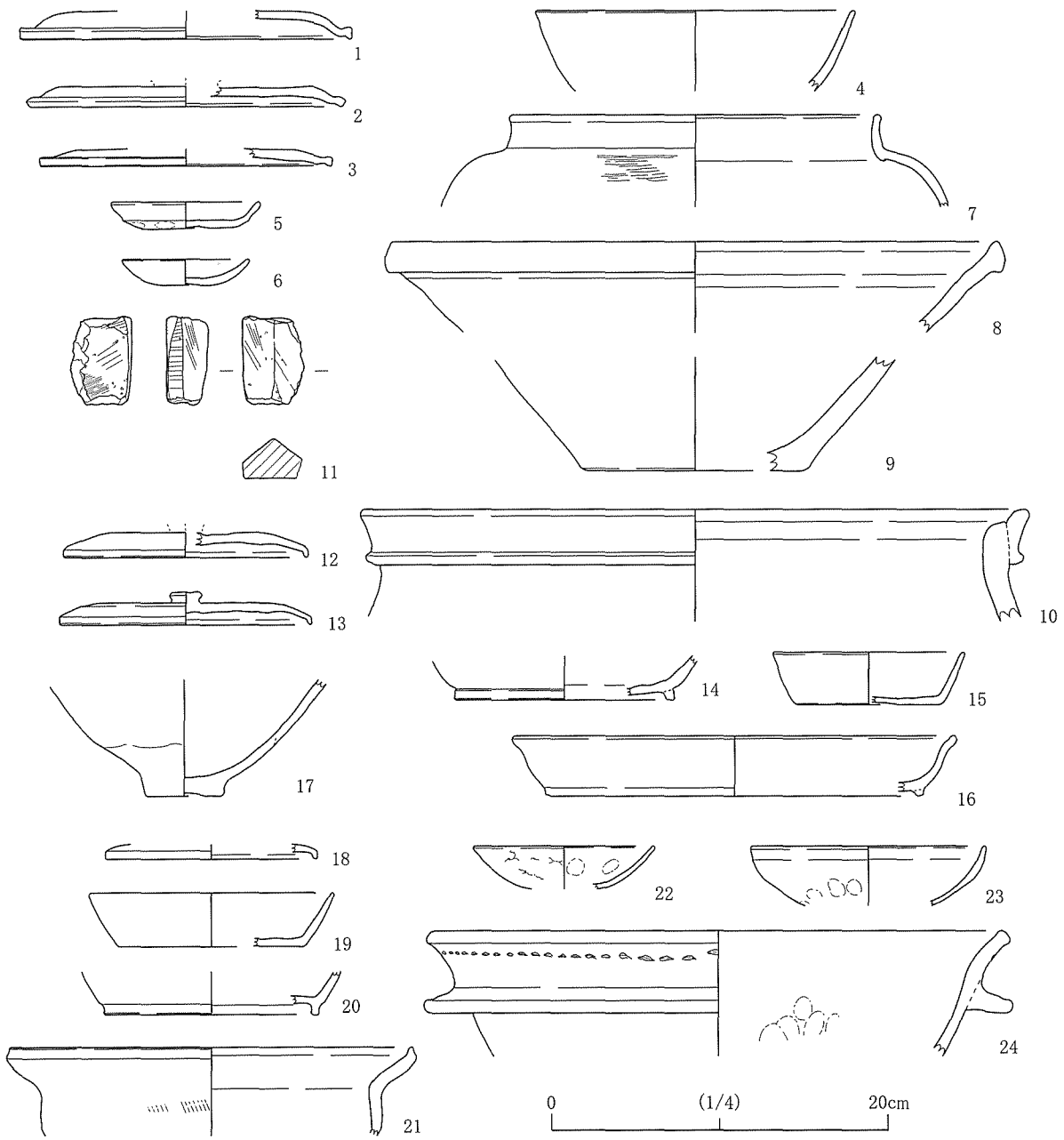
18 は須恵器杯蓋である。８世紀前半であろう。19・20 は須恵器杯、21 は土師器鍋である。いずれ

も８世紀後半の所産であろう。22・23は土師器杯、24は土師器羽釜である。22・23は８世紀後半～９世紀であろうか。24は９世紀後半である。

18は01溝、19・20は04土坑、22～24は17柱穴からの出土である。

調査区２　第５層

25は製塩土器である。製塩土器は内面に明瞭なヨコナデを施し、外面はユビオサエがみられる。26は須恵器杯である。底部に文字が書かれた墨書土器である。「讃岐□〔大カ〕」と記されている(1)。25・26は８世紀後半。27は須恵器鉢であろうか。口縁端部は内側へと肥厚させ面をもたせる。外面に区画の沈線とその間に櫛描波状文がめぐる。内外面ともに自然釉がかかる。８世紀後半であろうか。



第16図　調査区１　第３・４・５層、遺構出土遺物

調査区２　第６層

28 は須恵器杯蓋、29 は須恵器杯、30 は土師器杯、31 は土師器甕である。いずれも８世紀後半の所産である。

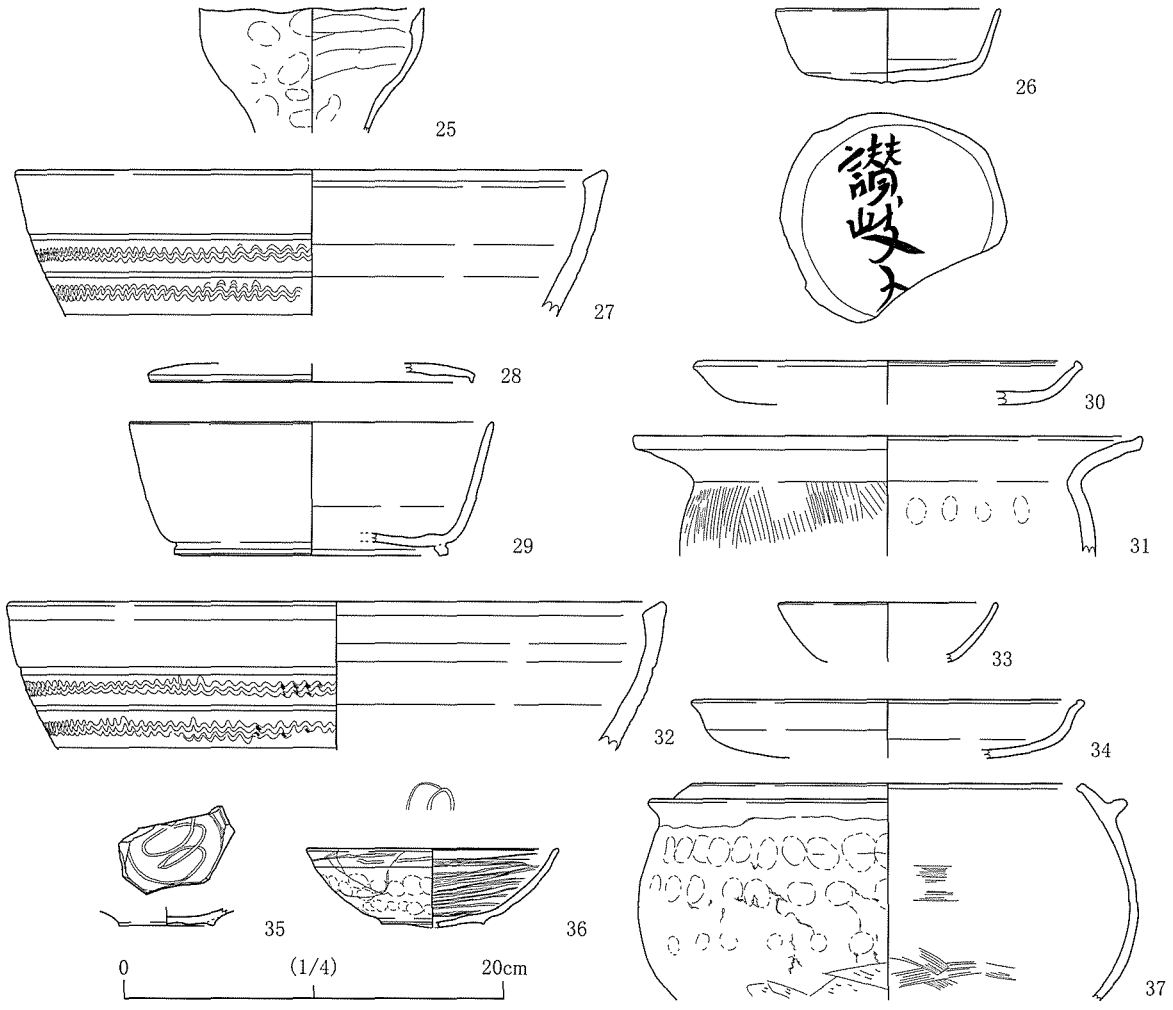
調査区２　遺構

32 は須恵器鉢である。27 と同様のものである。33・34 は土師器杯である。34 は外反する口縁部をもち、端部は内側へと肥厚させ段を有する。８世紀後半。35・36 は瓦器椀である。35 は見込みに圏線のミガキが施され、高台は断面三角形の小さなものが張り付けられる。大和型。12 世紀後半。36 は口縁部外面にわずかにヘラミガキがあり、内面はミガキが省略され間隔がやや広い。大和型。12 世紀後半。37 は瓦質土器羽釜である。半球状を呈し、鍔部は上方へと突出する。外面はユビオサエがのこり、下部にケズリが施される。内面はハケメ調整である。12 世紀後半。

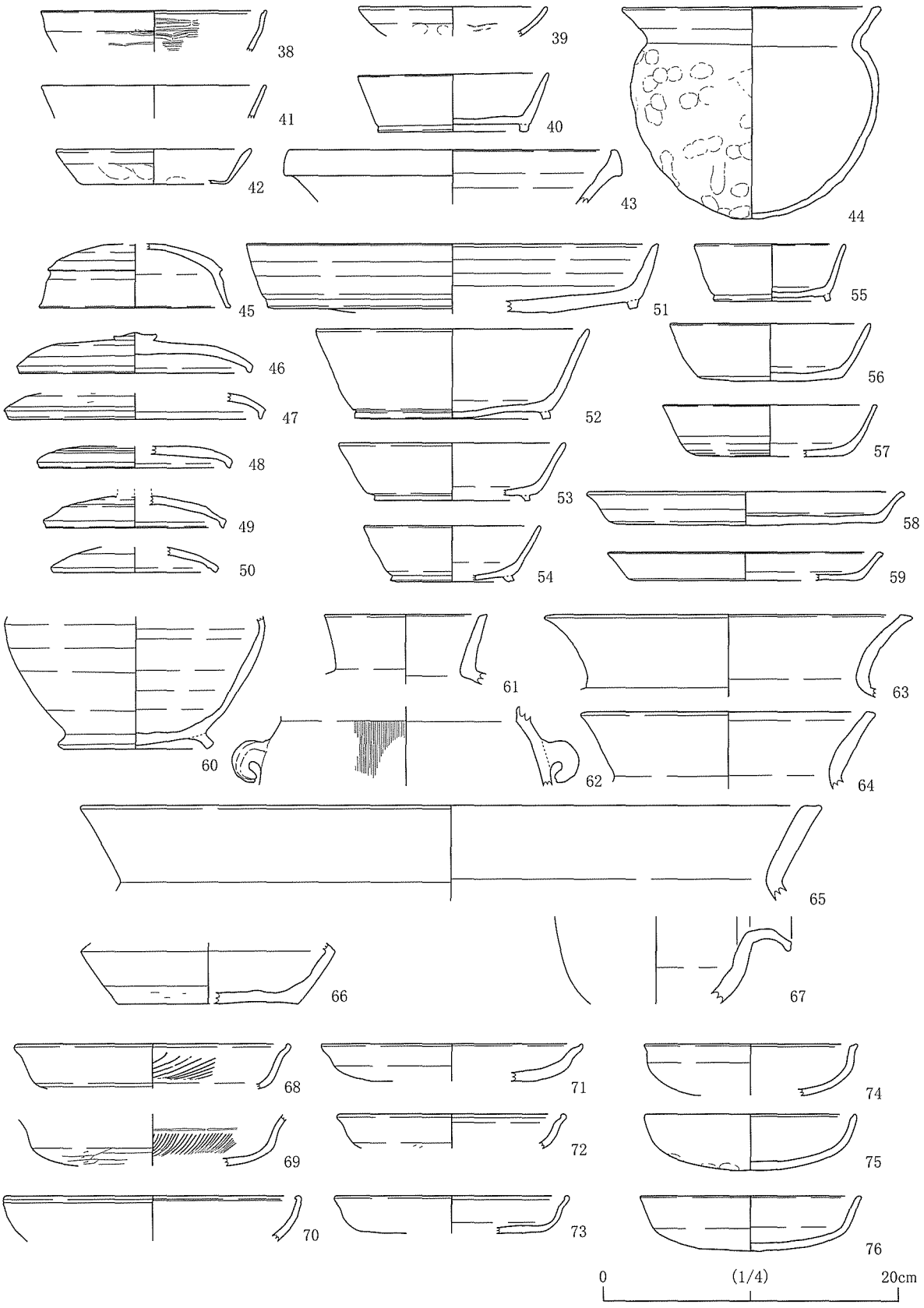
32 は 71 溝、33 は 80 柱穴、34 は 129 柱穴、35 は 113 柱穴、36・37 は 103 土坑からの出土である。

調査区３　第３層

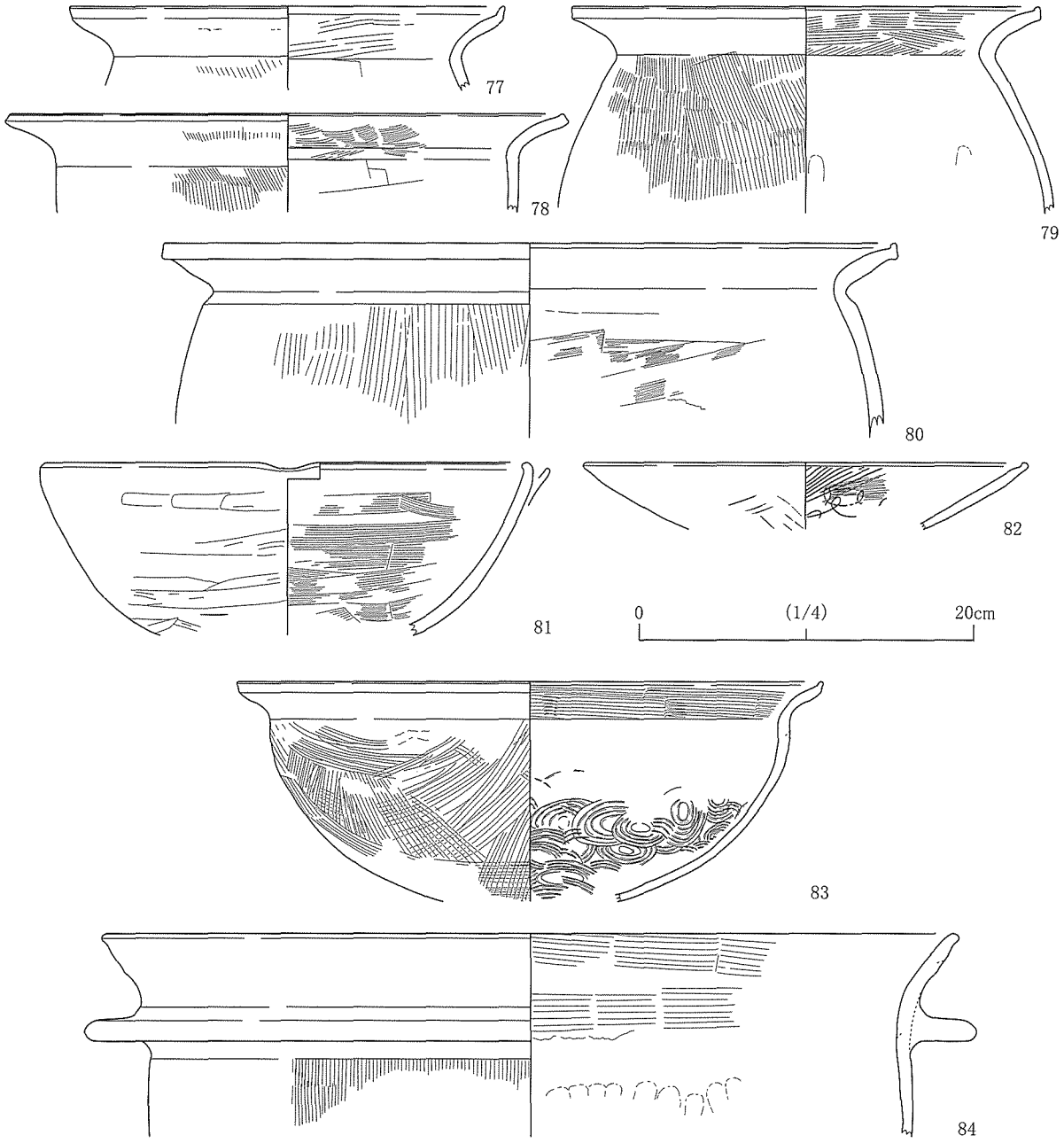
38・39 は瓦器椀である。38 は口縁部に段をもち、内外面にヘラミガキが施される。大和型。12 世紀後半。39 は内面にわずかにヘラミガキが施される。13 世紀後半。40 は須恵器杯である。９世紀前半である。41・42 は土師器杯である。42 は口縁部をヨコナデし、体部から底部にかけてはユビオサ



第 17 図　調査区２　第５・６層、遺構出土遺物



第18図　調査区３　第３・４層出土遺物



第 19 図　調査区３　第４層出土遺物

エがのこる。12 世紀後半。43 は須恵器捏鉢である。13 世紀前半。44 は土師器甕である。口縁端部を水平に整え、外面にはユビオサエが残る。８世紀後半～９世紀にかけての所産であろう。

調査区３　第４層

45 ～ 50 は須恵器杯蓋である。45 は口縁部と体部の境に稜をもち、天井部に回転ヘラケズリが残る。TK47 型式。46 ～ 50 は８世紀前半の所産である。51 ～ 57 は須恵器杯、58・59 は須恵器皿、60・61 は須恵器壺である。62 は把手を持つ壺であろう。63 ～ 65 は須恵器甕、66 は須恵器提瓶である。67 は須恵器壺の可能性もあるが、壺であるなら肩部となる部分が厚くなりこの時期にみられる壺の形態とは異なる。特異な器形であろう。

68 ～ 76 は土師器杯である。68・69 は内面に放射状の暗文が施される。77 ～ 79 は土師器甕である。いずれも口縁部を外反させ端部をつまみ上げる。外面には幅の広いハケ目を施す。81 は土師器鉢で

ある。外面にケズリが施され、内面はヨコハケである。82は土師器盤である。内面に放射状の暗文とらせん状の暗文が施される。83は土師器鍋である。外面に粗いハケ目が施され、底部内面には青海波が残る。84は土師器羽釜である。調査区３第４層から出土した土師器はいずれも８世紀前半の所産である。

85は砥石である。凝灰岩製で上下は欠損しているが、側面には擦痕が残る。86は鞴の羽口である。外面は一部炭化しており使用していたことがわかる。85は西側側溝からの出土であり、第４・５層を掘削した際に出土した。

調査区３　遺構

87～90は瓦器皿、91・95は土師器皿、93・94・99は土師器杯、96は天目茶碗、97は瓦器椀、92は土師器羽釜、98は須恵器杯である。

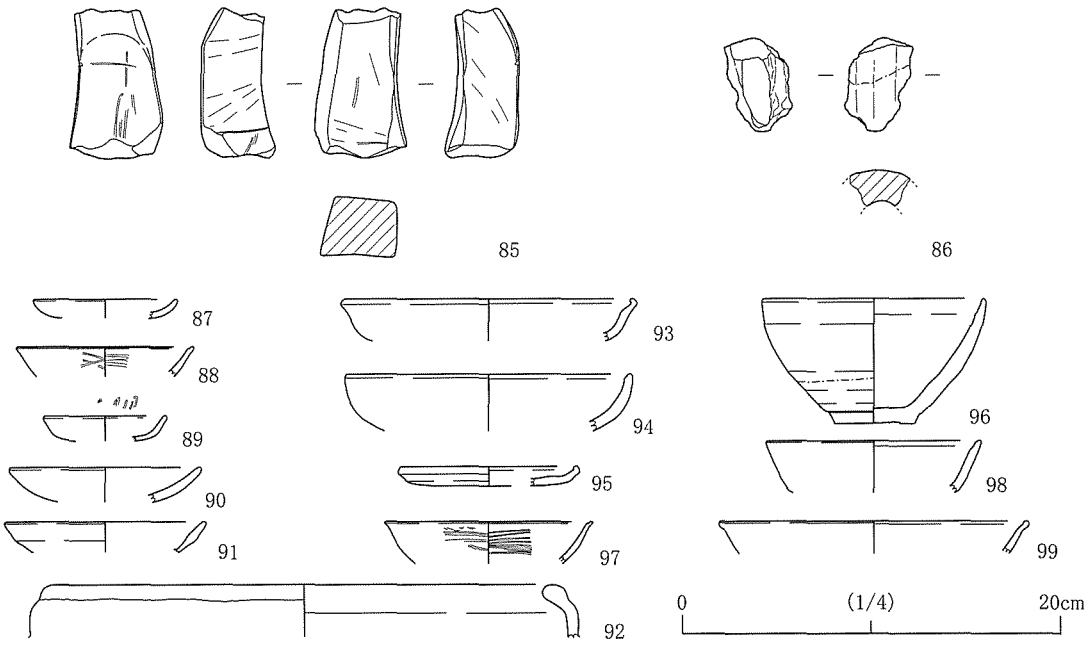
瓦器皿・瓦器椀・土師器皿は13世紀前半、天目茶碗は14世紀後半、土師器杯と須恵器杯は８世紀後半であろう。

87は28柱穴、88は39柱穴、89は42柱穴、90は43柱穴、91・92は47柱穴、93は48柱穴、94・95は51柱穴、96は134柱穴、97は57柱穴、98は59柱穴、99は63柱穴からの出土である。

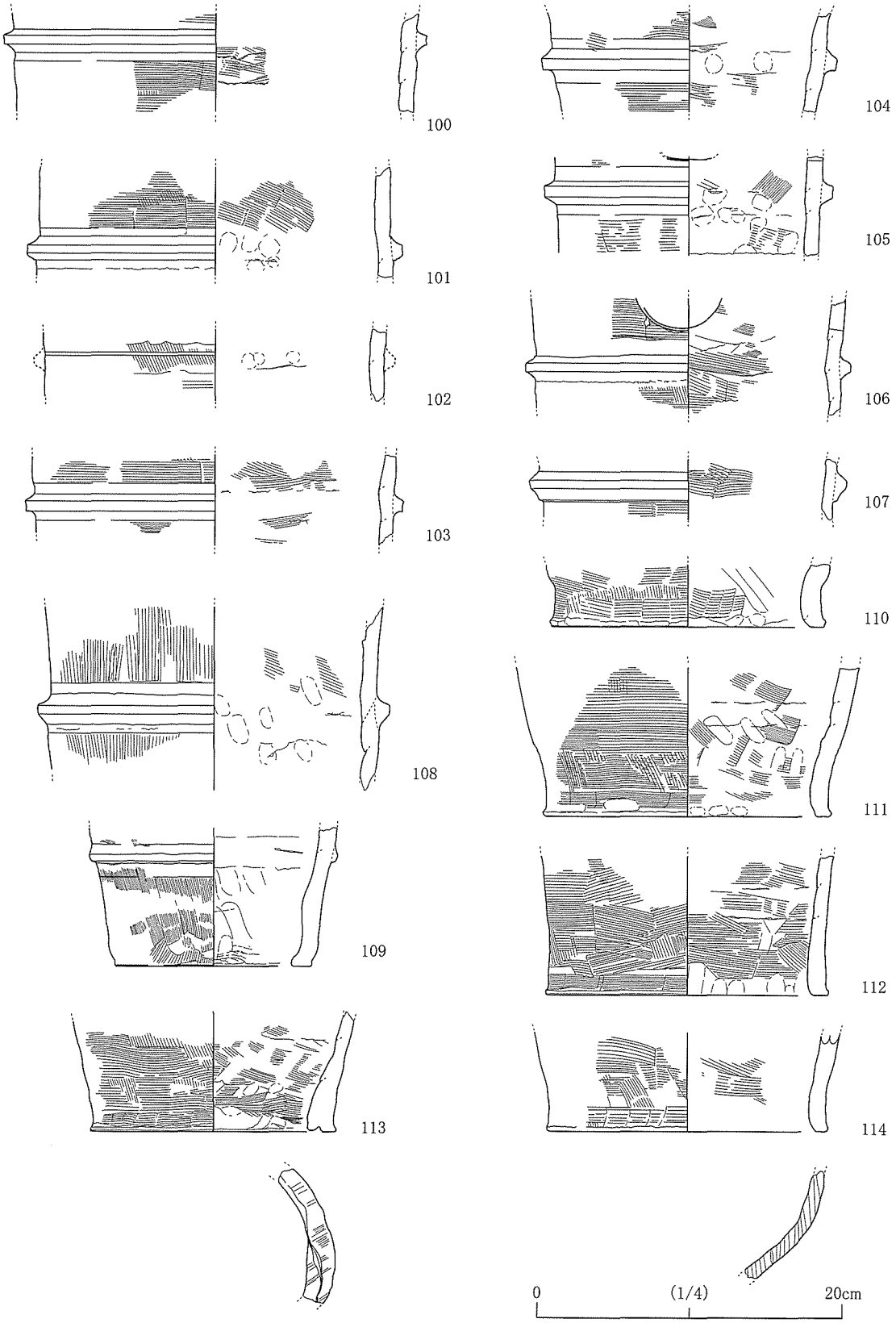
各調査区出土埴輪（第21図）

調査区２と調査区３から埴輪の破片が多く出土した（100～114）。ここで一括して報告する。

胴部には外面２次調整Bc種ヨコハケを施す。108と109は１次調整タテハケのみである。突帯は断面台形状を呈する。102の突帯剥離面に一条の凹線が廻る。また101・106の突帯上部にはＬ字状圧痕が残ることから、凹線技法による突帯間隔の設定が行われている。２段以上の突帯が残存するものがなく、突帯間隔は不明である。底部高は109で、7.3cmを測る。透孔は円形である。基底部の接合には、底面を正面にみてＺ字形に接合する個体がある（113）。113・114の底面には平行する圧痕が残る。これは製作時の成形台に由来するものである。いずれの個体も黒斑は有していない。108以



第20図　調査区３　第３・４層、遺構出土遺物



第 21 図　善根寺遺跡第 5 次調査出土埴輪

外は硬質に焼成されており、須恵質といえる。108は外面に朱が施され、ハケ目の間隔が他に比べやや広い。形象埴輪の一部と考えられる。それ以外の個体は普通円筒埴輪または朝顔形埴輪の一部と考える。

以上の特徴から、今回出土した埴輪は川西編年Ⅳ期に属するものであり、埴輪検討会のⅣ－２段階に相当する。

第５次調査

４）調査の経過

平成27年４月、東大阪市善根寺町一丁目652番13において、個人住宅建設に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された（第１図）。当該建物の基礎工事は、柱状改良工事を含むもので、埋蔵文化財への影響が懸念されたため、事前の確認調査が必要な旨を届出者に通知した。その後、平成27年４月14日に埋蔵文化財の確認調査を実施した。調査の結果、GL-1.8mから-2.0mの間で奈良時代の須恵器・瓦が出土した。この結果に基づき協議代理者と取り扱いについて協議を行い、平成27年４月21・22日にトレンチを設定して調査を行った。調査面積は8.5㎡である（第22図）。

５）調査の概要

層序（第23図）

盛土

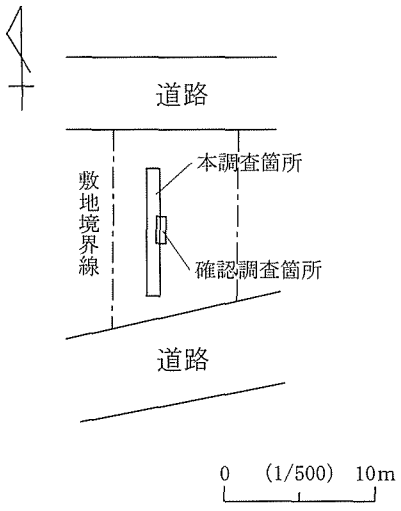
第１層：旧耕作土

第２層：褐灰色（7.5Y6/1）粗砂混じり砂質シルト

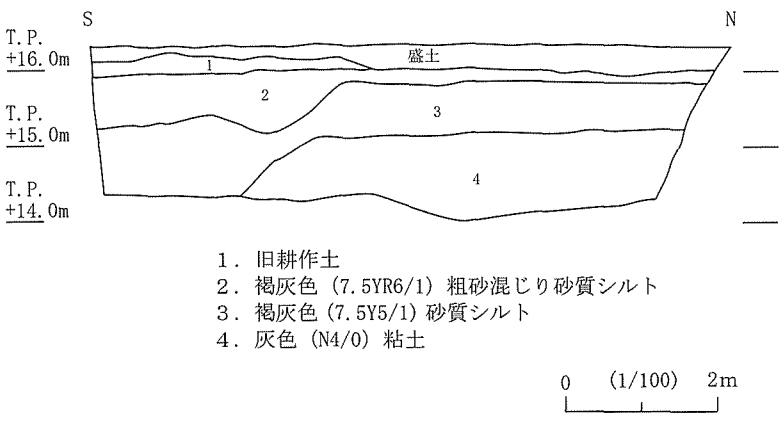
第３層：褐灰色（7.5Y5/1）粗砂混じり砂質シルト

第４層：灰色（N4/0）粘土

第１層は近現代の耕作土である。第２層は窪地にたまる水成堆積層である。河川が堆積した後に窪地となって砂や泥が堆積したものと考える。第３・４層は河川堆積物である。第３層と第４層の時期差は不明であるが、第４層の葉理構造を第３層が浸食していることから北から南へと河川が側方へと移動している。第３層は北側では上部は土壌化した部分がみられ、第４層の下部にはかなりの植物遺



第22図　調査トレンチ位置図



第23図　調査区壁断面図

体が遺存していた。

第３層から平安時代の遺物が出土しており、平安時代に機能していたと考える。第４層からは縄文土器が出土したが二次的な堆積である。

自然河川の中を調査しており、遺構は検出できなかった。

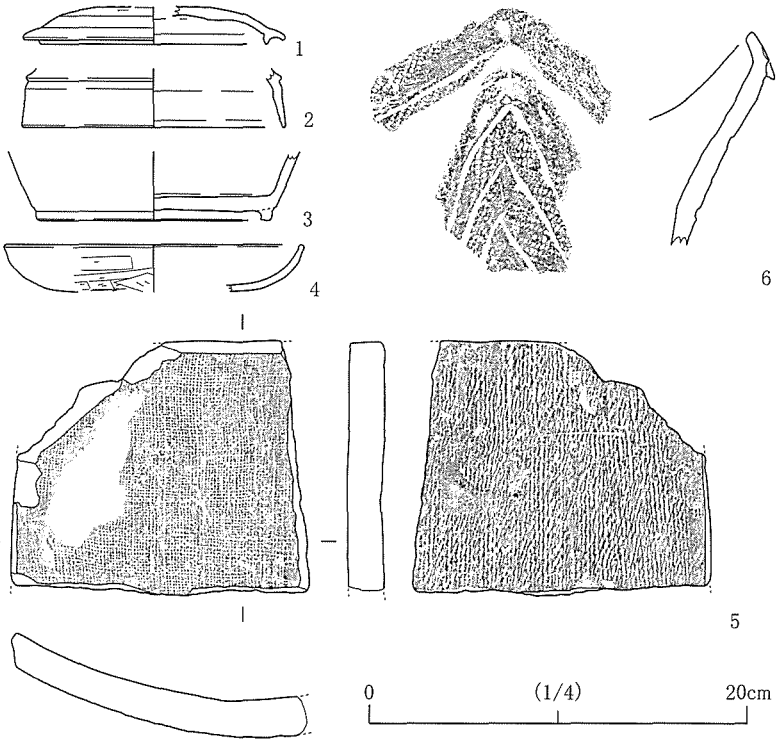
６）出土遺物

第３・４層（第 24 図）

１・２は須恵器杯蓋、３は須恵器杯である。１は TK217 型式、２は TK10 型式、３は８世紀後半。４は土師器杯である。外面にケズリが残る。８世紀後半。５は平瓦である。凹面には布目痕、凸面には縄蔽痕が残る。平安時代の所産であろう。

第４層

６は縄文土器深鉢である。波状口縁で口縁部に方形の区画文を持ち縄文を施す。また、頸部に多重の沈線を施す。北白川Ｃ式１期[(2)]。



第 24 図　善根寺遺跡第５次調査出土遺物

７）まとめ

善根寺遺跡第１次調査では、主に奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物が多数検出されたことから、河内国河内郡の末端官衙としての性格を指摘していた。今回の調査では、第１次調査の西側に隣接する場所での調査であったため、さらなる遺構の広がりを期待していたが、結果としては中世以降の耕作による削平が著しく平安時代の明確な遺構は検出できなかった。

官衙としての遺構は明確ではなかったが、奈良時代から平安時代にかけての遺物は多量に出土した。出土した土器の時期は第１次調査で出土した土器と同じ時代のものであり、西側にも官衙が広がっていたことを示唆する。また、墨書土器が出土したことは官衙としての機能を有していたことを裏付ける資料となろう。

第５次調査において西方へと流れる自然河川を検出した。平安時代にまでさかのぼる可能性があるこの河川は、官衙の南を区切る役割を担っていたものと考えられる。

当該地の西には東高野街道が走り、南に日下之直越道が走っていたと推測されている（足利 1989）。いずれの街道からもやや離れた高台に位置し、古代の交通の要衝を望む立地である。

今回の調査において最も成果があったのは、鎌倉時代の遺構を検出したことである。多くの柱穴から掘立柱建物を復元することはできなかったが、12 世紀後半から 13 世紀にかけての集落と考えられる。盛土と整地を大規模に行ってから集落を形成しており、丘陵上に立地することを考えると中世城館跡の可能性を指摘しておきたい。14 世紀には大規模に耕作が行われており、室町時代に風景は耕

作地へと変貌したものと推測される。

第１次調査の際にも出土していた埴輪が今回も多数出土した。第１次調査で出土した埴輪と特徴は同じであり、川西編年Ⅳ期の埴輪である。古墳の墳丘は平安時代以降の大規模な造成により残されていないと推測される。これまで、本市では植附古墳群及び瓜生堂古墳群が当該時期の古墳として周知されている。これからは、善根寺地域においても古墳時代中期後半の古墳を想定して古墳時代を考察する必要がある。

第５次調査で出土した縄文時代中期末の土器は、かつて都出比呂志氏によって採取された縄文土器と同時期のものと考えられる(第 25 図)。この時採取された場所を現在は善根寺山遺跡としているが、当遺跡から見て北東 350 mに位置し距離がある。縄文時代に関しては不明な点が多くさらなる調査の進展が必要である。ちなみに（枚岡市史編纂委員会 1966）に掲載されている石器は、縄文時代早期中葉～後半にかけての凹基式石鏃である。

註

１．釈文については、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所都城発掘部史料研究室よりご教示いただいた。３文字目の「大」は「太」の可能性もある。人名が想定できるが、判断材料に乏しく詳細は不明である。また、図版 11・26 俯瞰写真は同所中村一郎氏に撮影していただいた。

２．縄文土器は、小泉翔太（京都大学大学院文学研究科）よりご教示いただき、石器は、上峯篤史（京都大学白眉研究センター）よりご教示いただいた。

【参考文献】

足利健亮 1989「生馬直道と日下直越」『奈良街道』歴史の道調査報告書第四集、大阪府教育委員会

大阪府立近つ飛鳥博物館 2006『年代のものさし - 陶邑の須恵器 - 』

泉　拓良 1985「中期末縄文土器の分析」『京都大学埋蔵文化財調査報告』Ⅲ、京都大学埋蔵文化財研究センター

川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第 64 巻、第２号

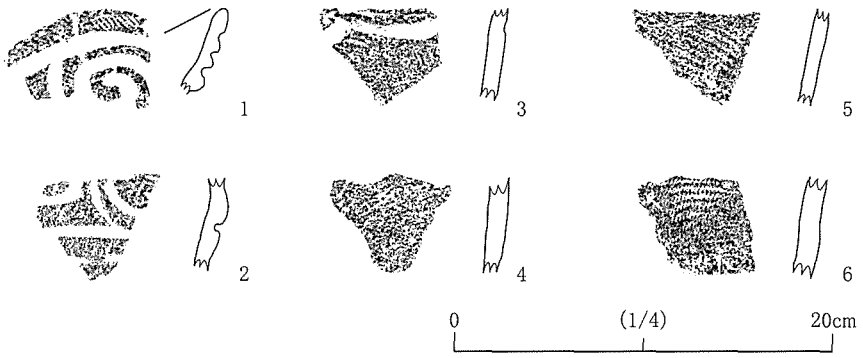
古代の土器研究会編 1992『古代の土器１　都城の土器集成』

埴輪検討会 2003『埴輪論叢』第４号

東大阪市教育委員会 2003『善根寺遺跡第１次発掘調査概要報告』

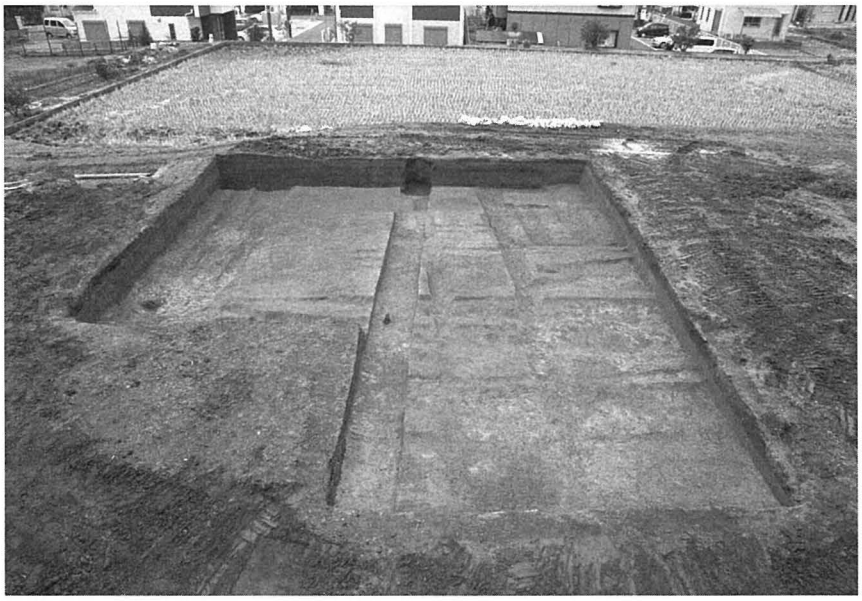
枚岡市史編纂委員会 1966『枚岡市史』第三巻　資料編（一）

藤沢良祐 1998「瀬戸・美濃の天目について」『茶の湯の銘碗 - 和物茶碗 - 』茶道資料館



第 25 図　枚岡市史掲載善根寺山遺跡出土縄文土器

図版１　善根寺遺跡第４次発掘調査　遺構

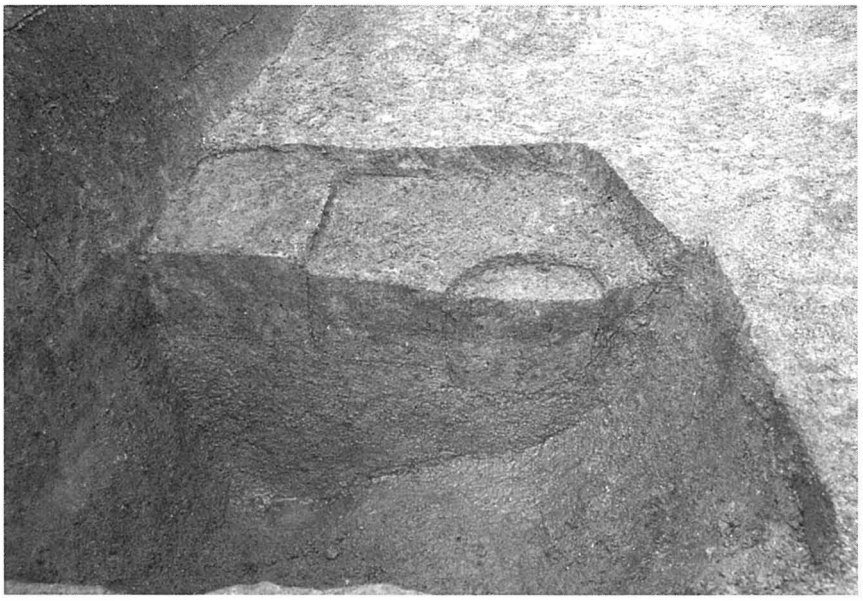


１．調査区１
第１面全景
（東より）

２．調査区１
第２面全景
（北より）

３．調査区１
第３面全景
（北より）

図版2　善根寺遺跡第4次発掘調査　遺構

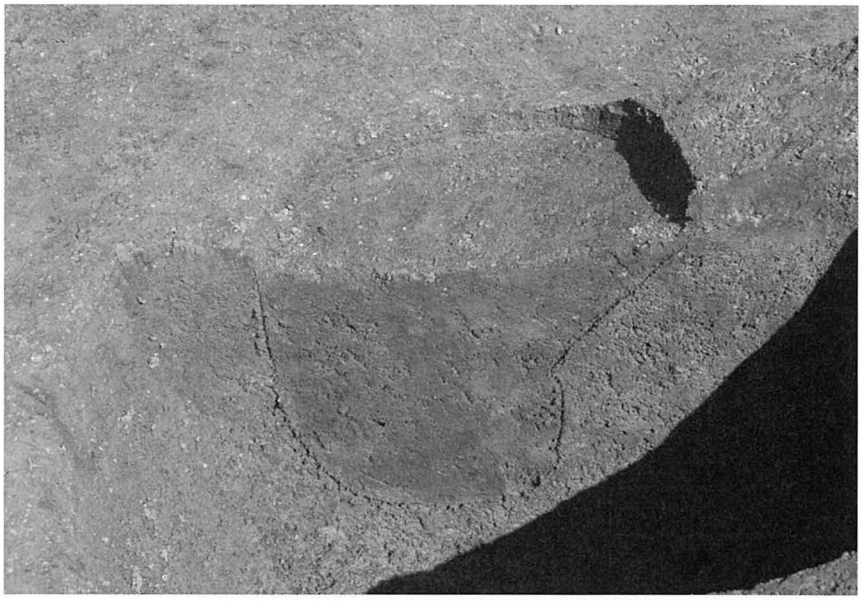


1．調査区1
04 土坑・09 柱穴
（南より）

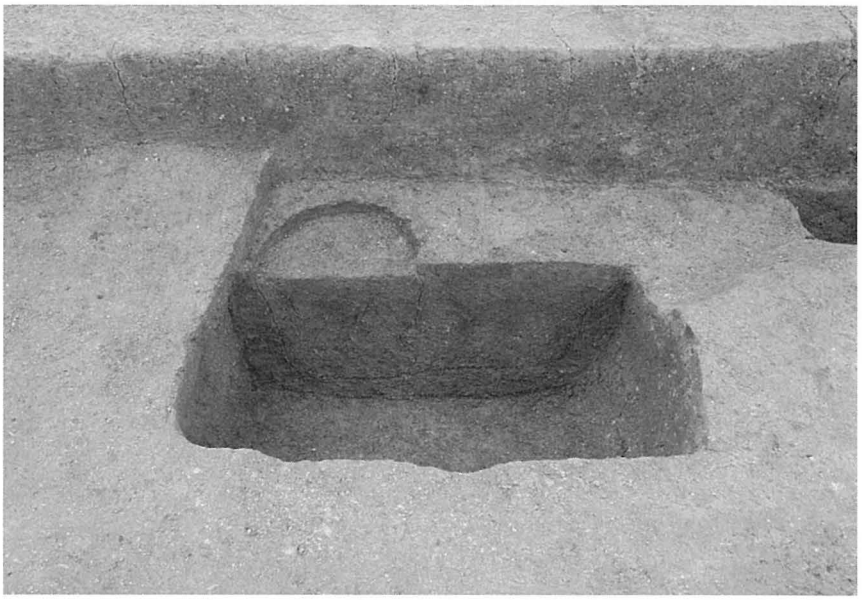
2．調査区1
06 柱穴
（南より）

3．調査区1
07 柱穴
（南より）

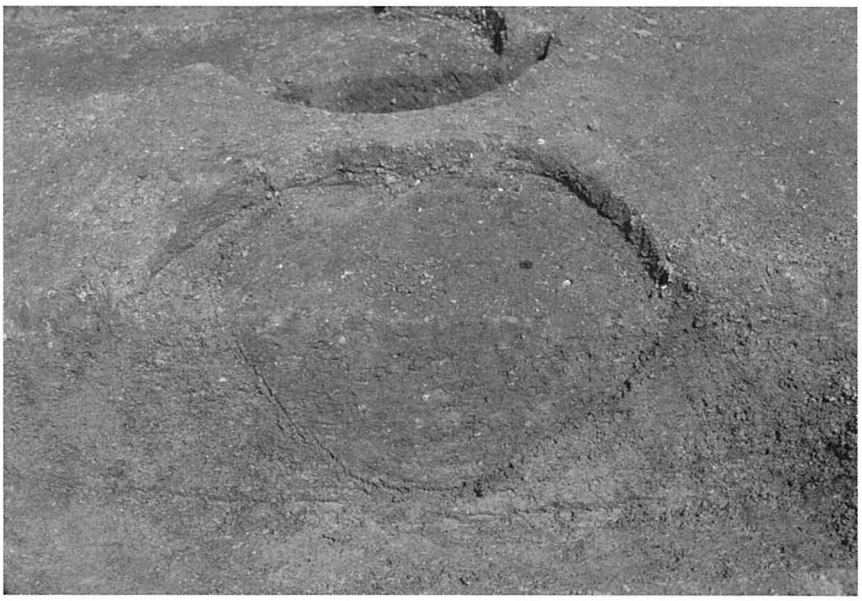
図版３　善根寺遺跡第４次発掘調査　遺構



１．調査区１
08 柱穴
（南より）

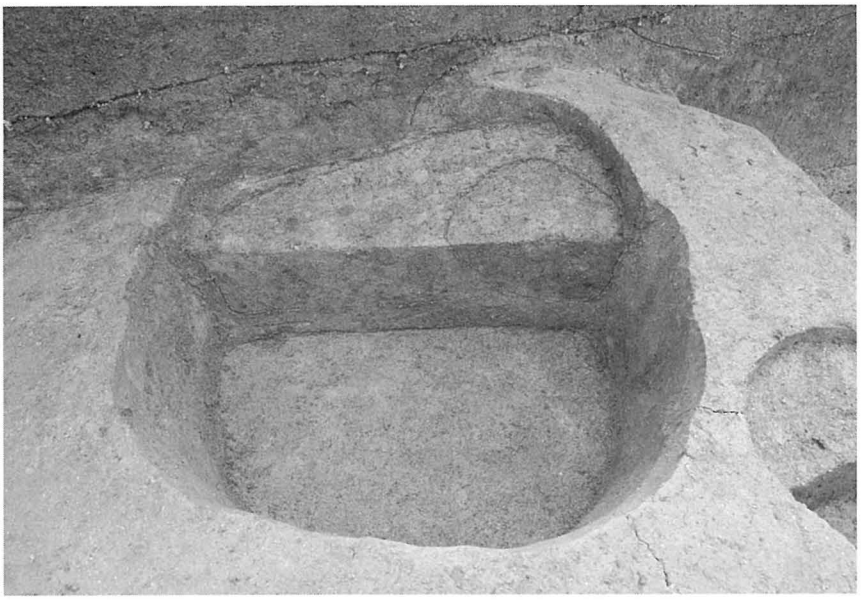


２．調査区１
10 柱穴
（北より）

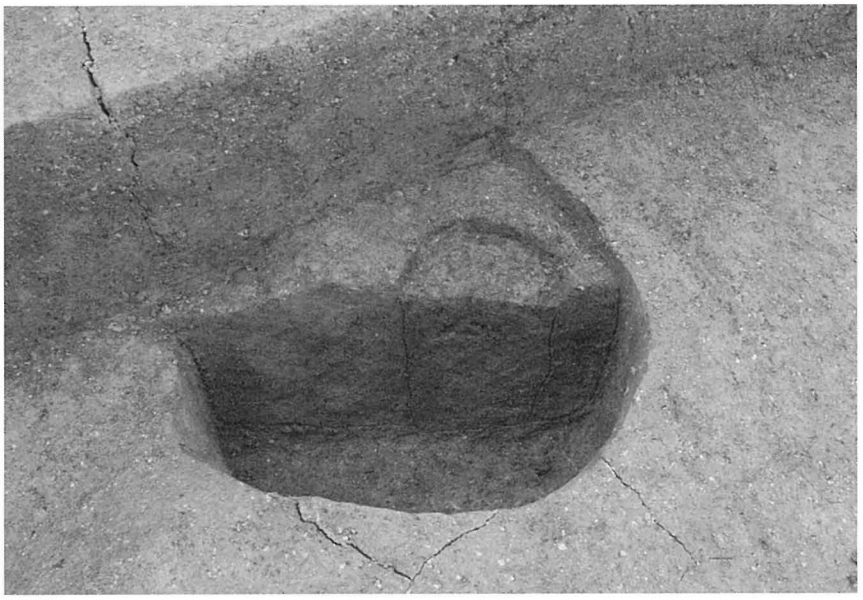


３．調査区１
13 柱穴
（南より）

図版4　善根寺遺跡第4次発掘調査　遺構



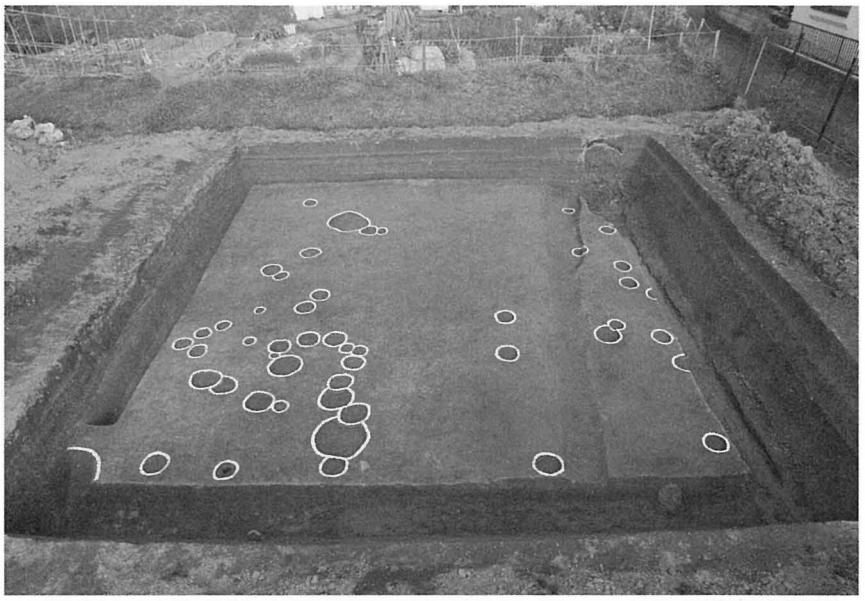
1．調査区1
18柱穴
（北より）



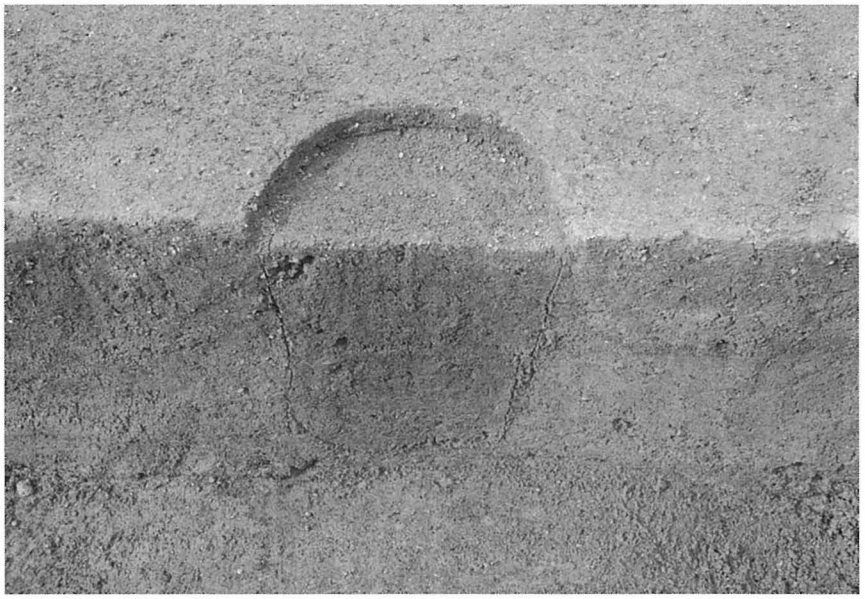
2．調査区1
19柱穴
（北より）

3．調査区1
南壁断面
（北より）

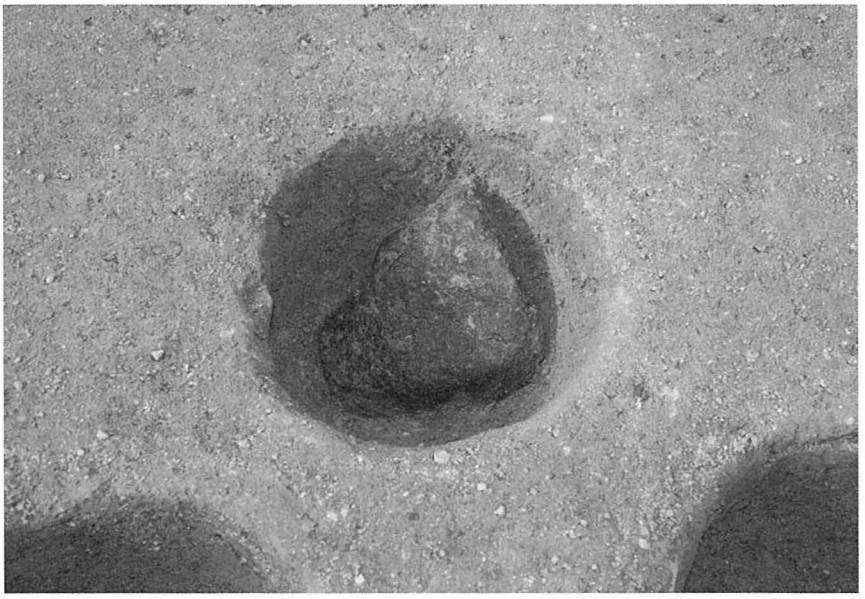
図版５　善根寺遺跡第４次発掘調査　遺構



１．調査区２
第１面全景
（西より）



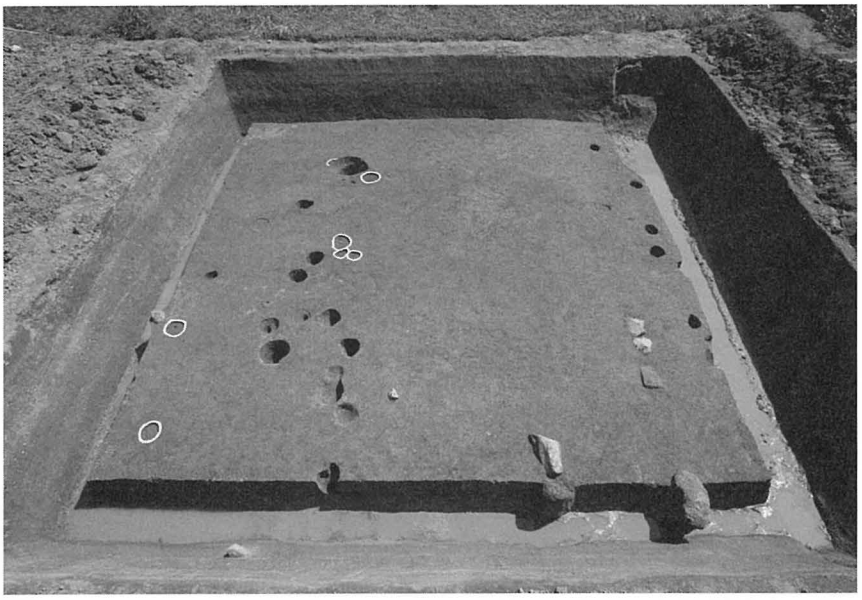
２．調査区２
77 柱穴
（南より）



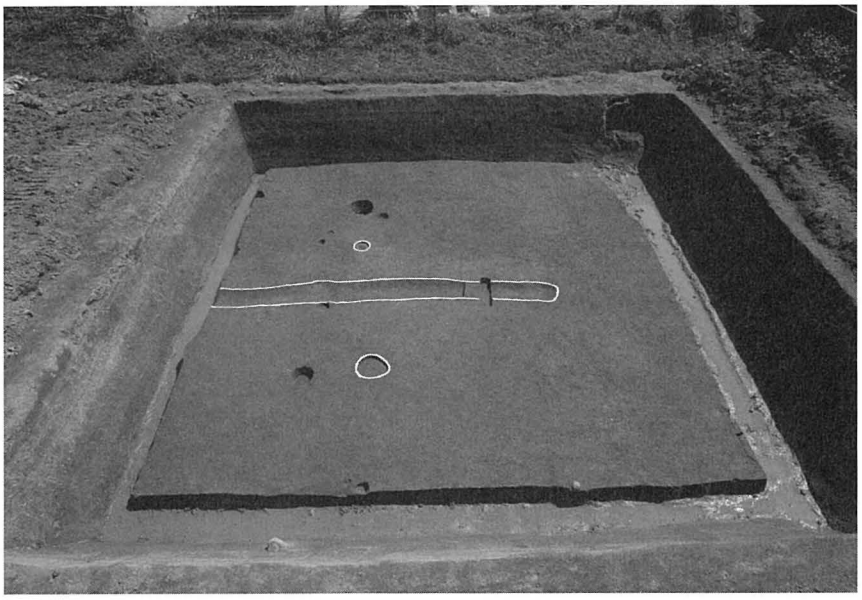
３．調査区２
106 柱穴
（北より）

図版6　善根寺遺跡第4次発掘調査　遺構

1．調査区2
122 柱穴
（南より）



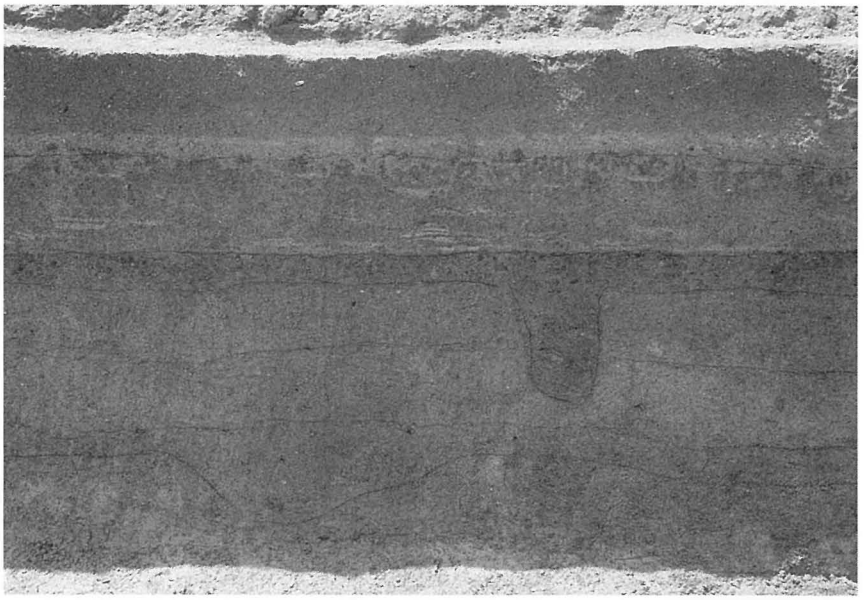
2．調査区2
第2面全景
（西より）



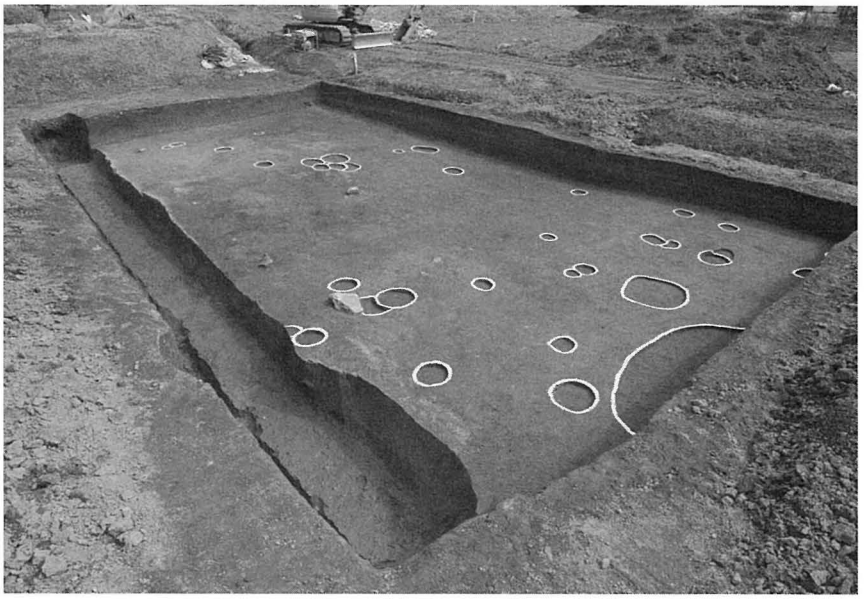
3．調査区2
第3面全景
（西より）

図版7　善根寺遺跡第4次発掘調査　遺構

1．調査区2
第4面全景
（西より）

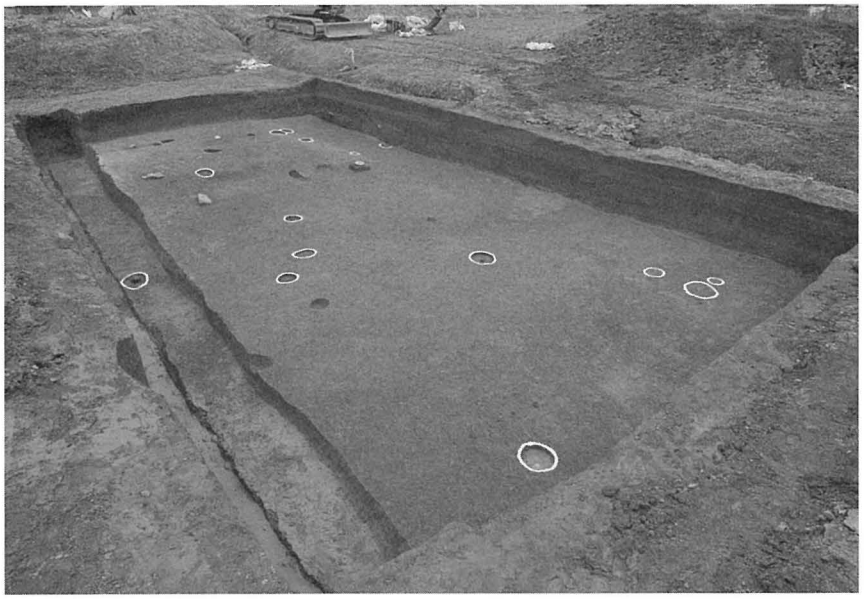


2．調査区2
南壁断面
（北より）



3．調査区3
第1面全景
（南西より）

図版8　善根寺遺跡第4次発掘調査　遺構



1．調査区3
第2面全景
（南西より）

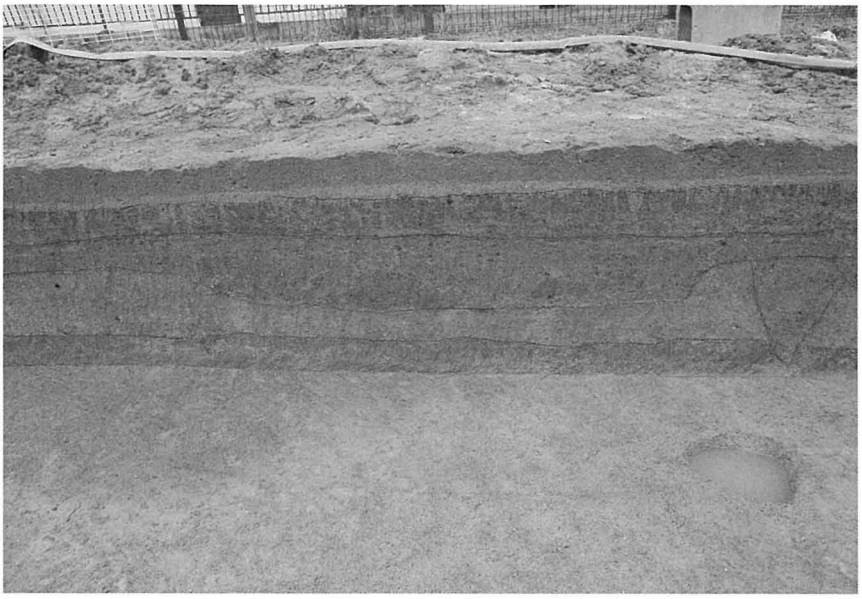
2．調査区3
57柱穴
（南より）

3．調査区3
63柱穴
（南より）

図版９　善根寺遺跡第４次発掘調査　遺構

１．調査区３
64 柱穴
（南より）

２．調査区３
第３面全景
（南西より）



３．調査区３
南壁中央部
（北より）

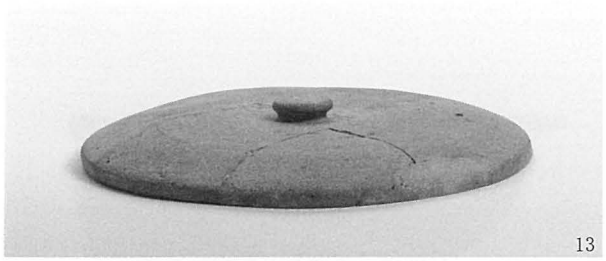
図版10　善根寺遺跡第4・5次発掘調査　遺構

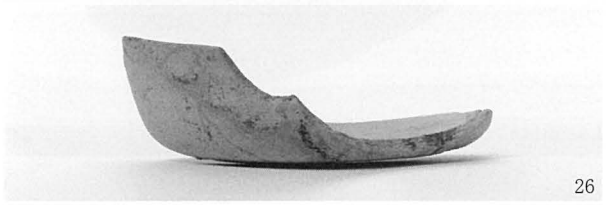
1．調査区3
南壁東部
（北より）

2．第5次調査
南壁南部
（東より）

3．第5次調査
南壁西部
（東より）

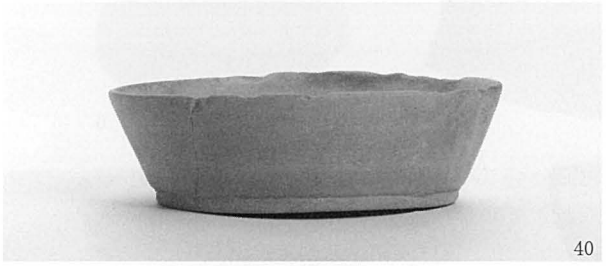
図版11　善根寺遺跡第４次発掘調査　遺物


13


26

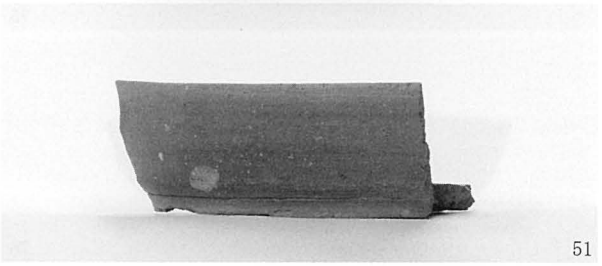
26'

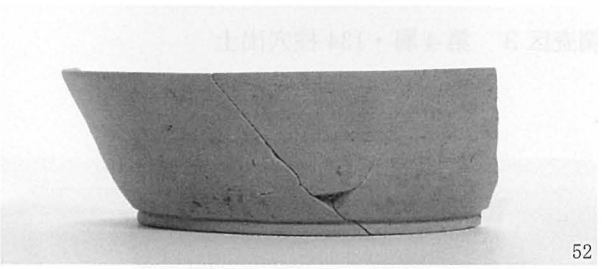
37

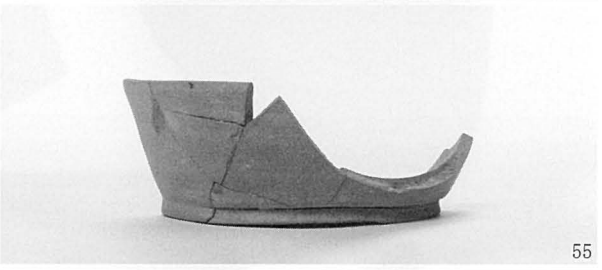

40

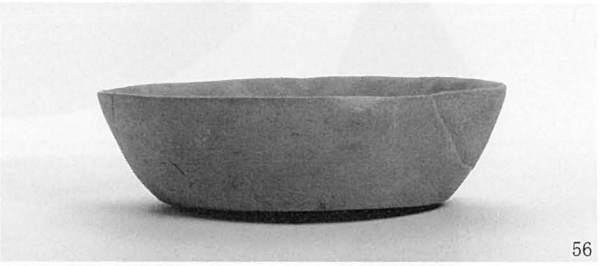
46

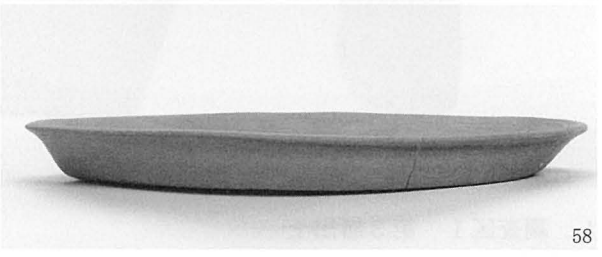
44


51


52


55

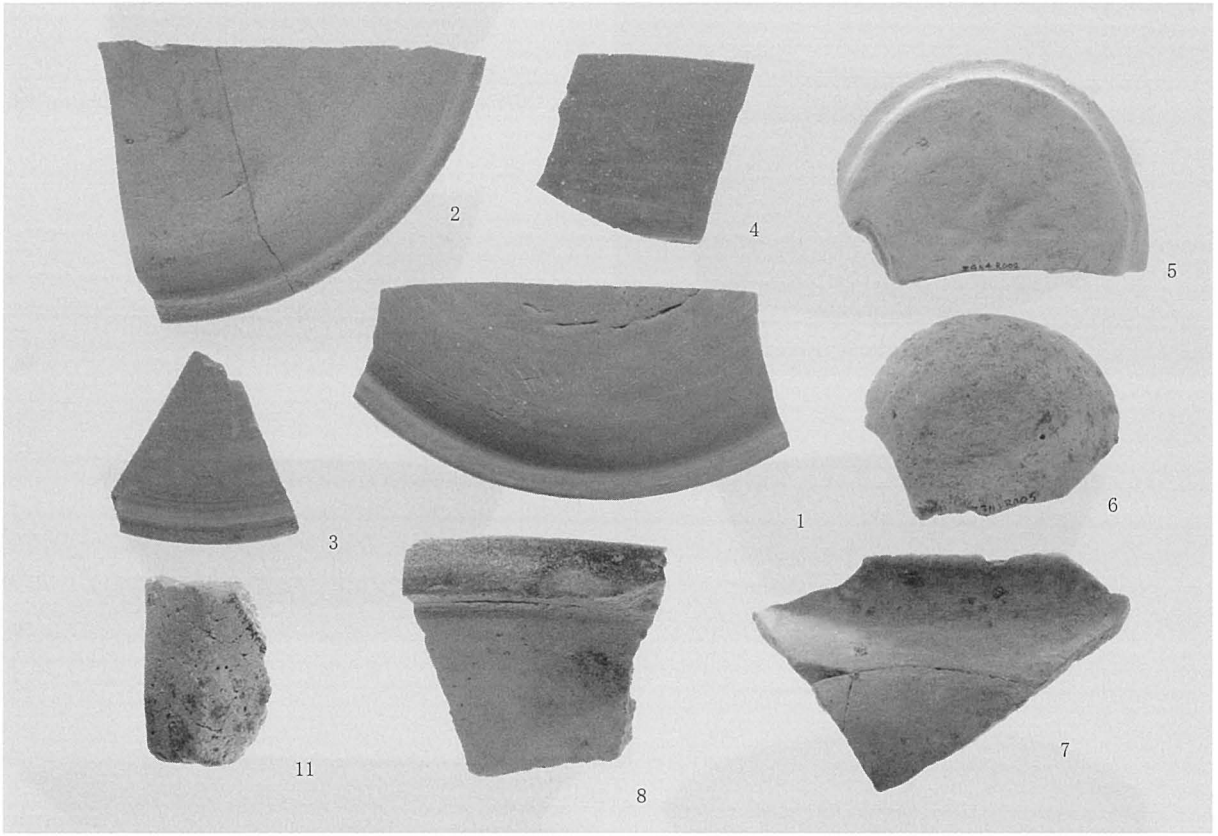

56


58

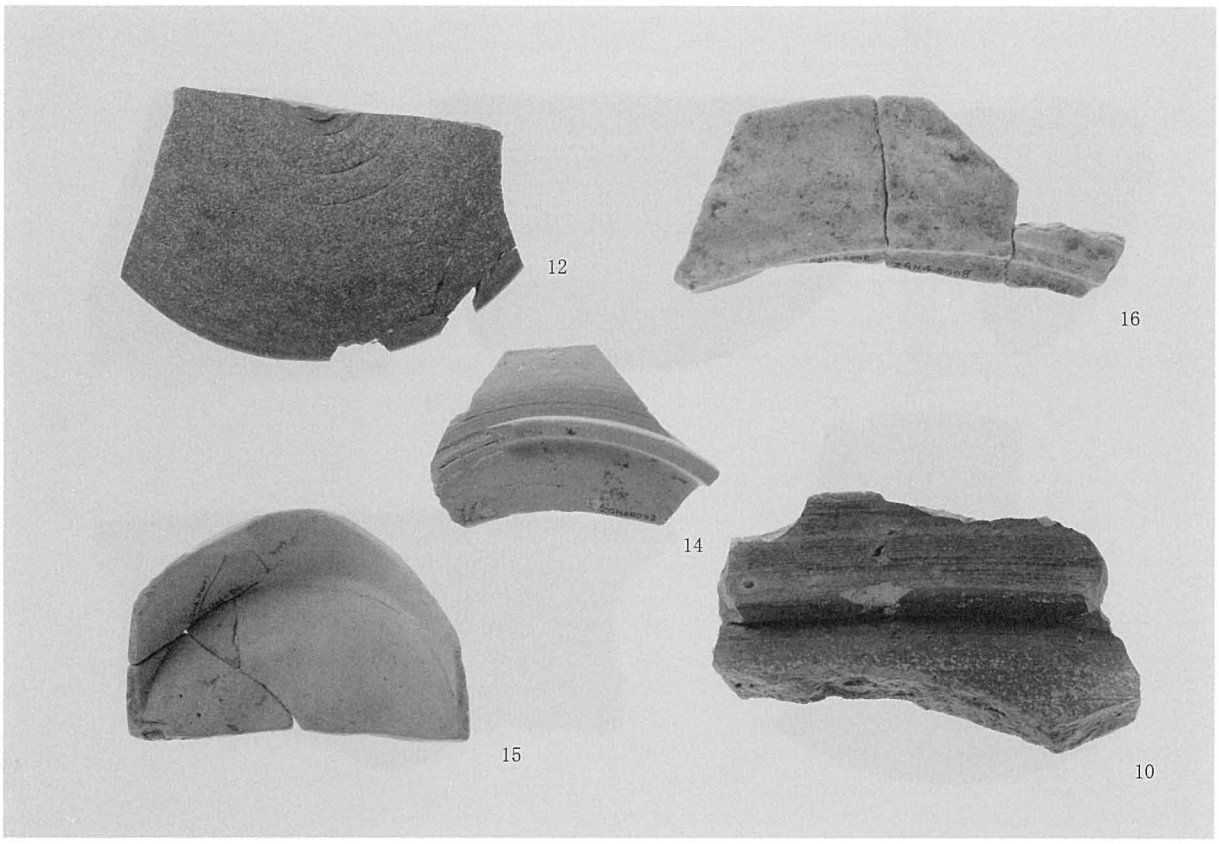
調査区１　第３層、調査区２　第５層・103 土坑、調査区３　第３・４層出土

図版12　善根寺遺跡第４次発掘調査　遺物

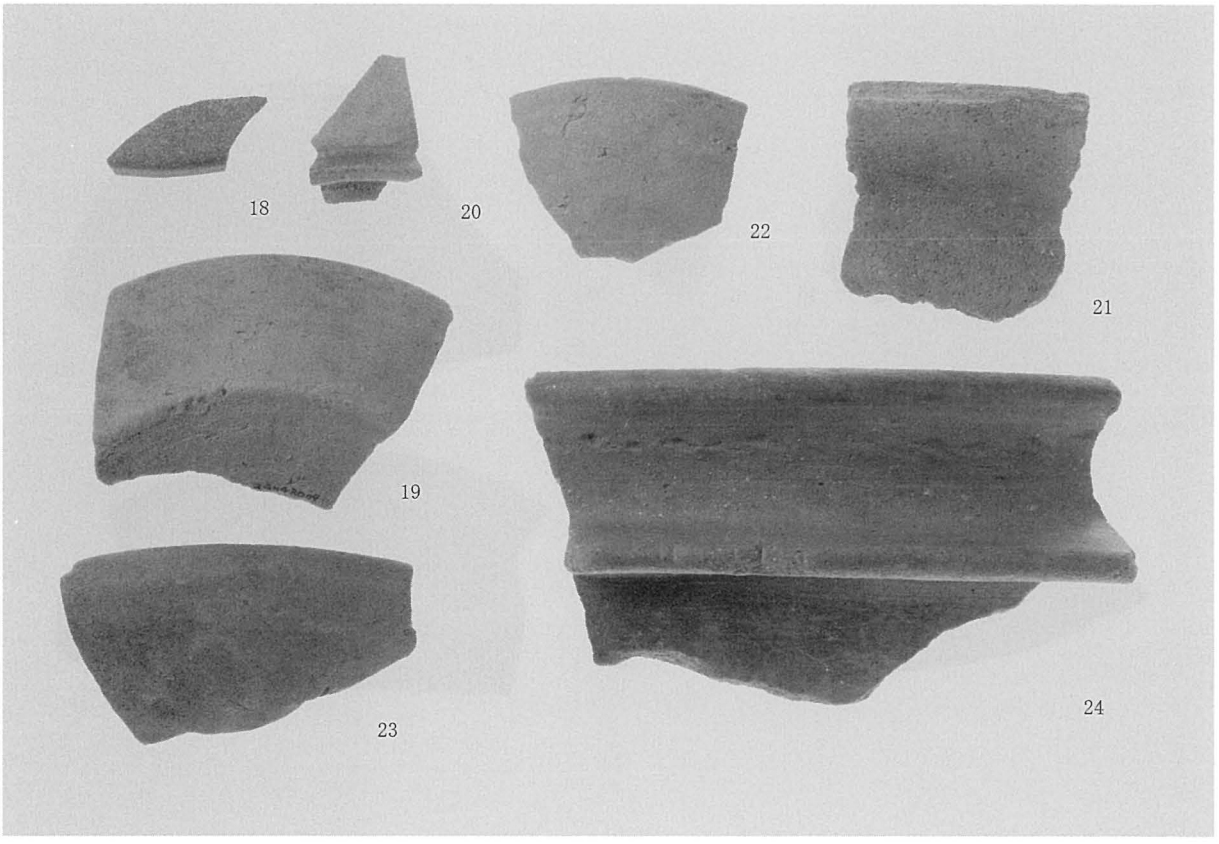
調査区３　第４層・134 柱穴出土



１．調査区１　第３層出土

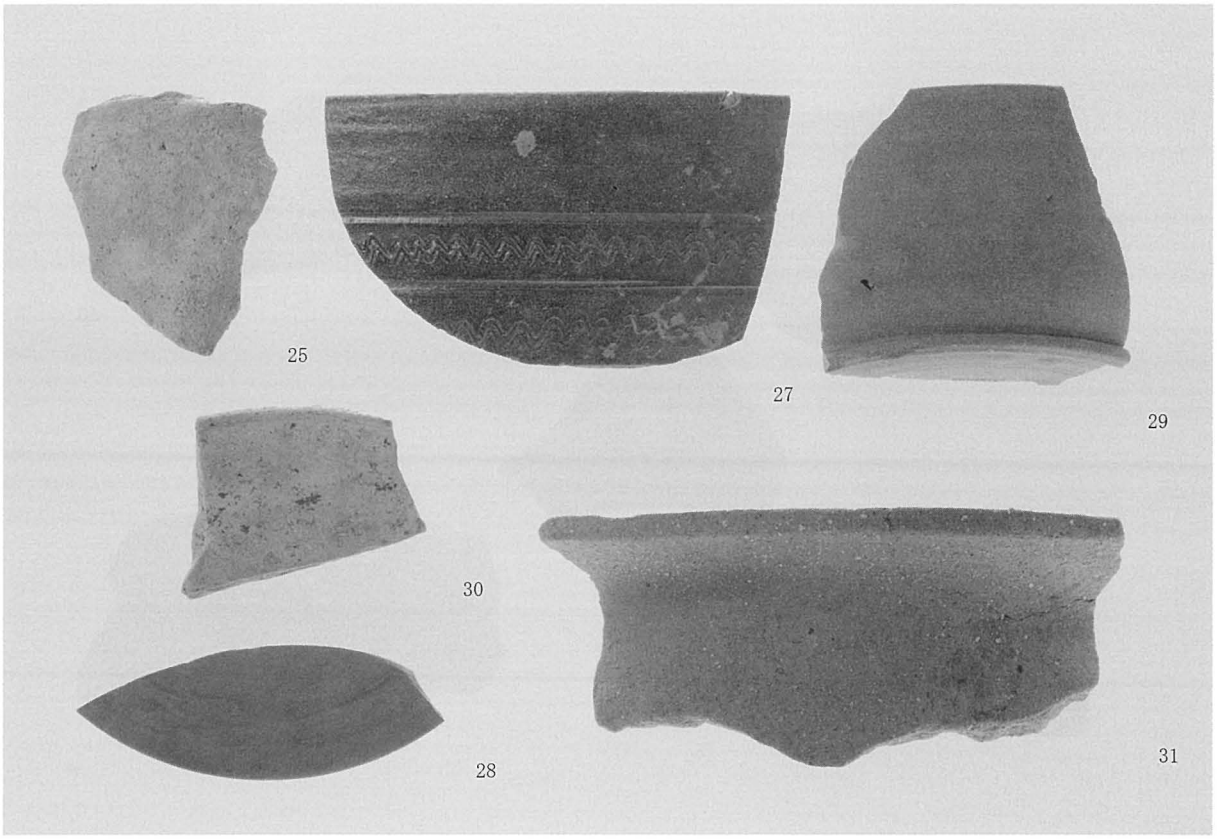


１．調査区１　第３・４層出土

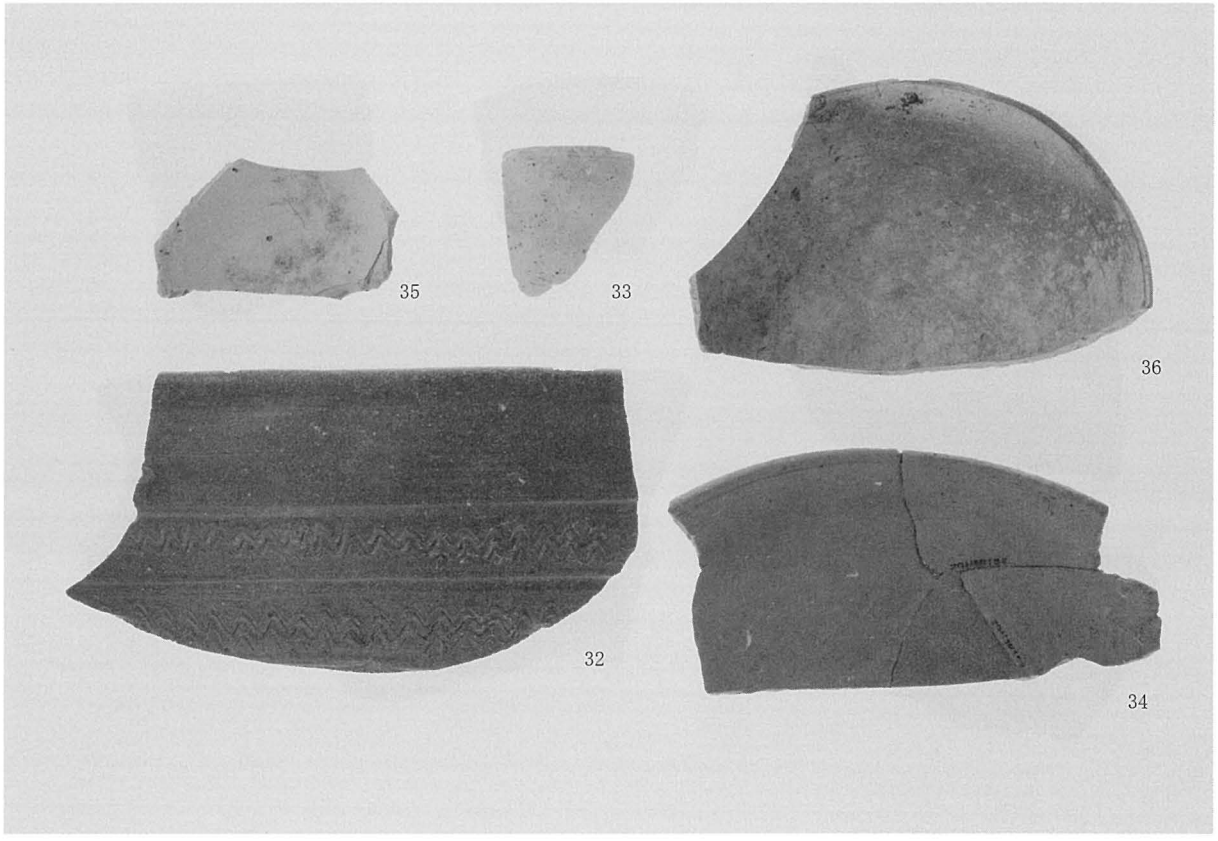


２．調査区１　各遺構出土

図版14　善根寺遺跡第４次発掘調査　遺物

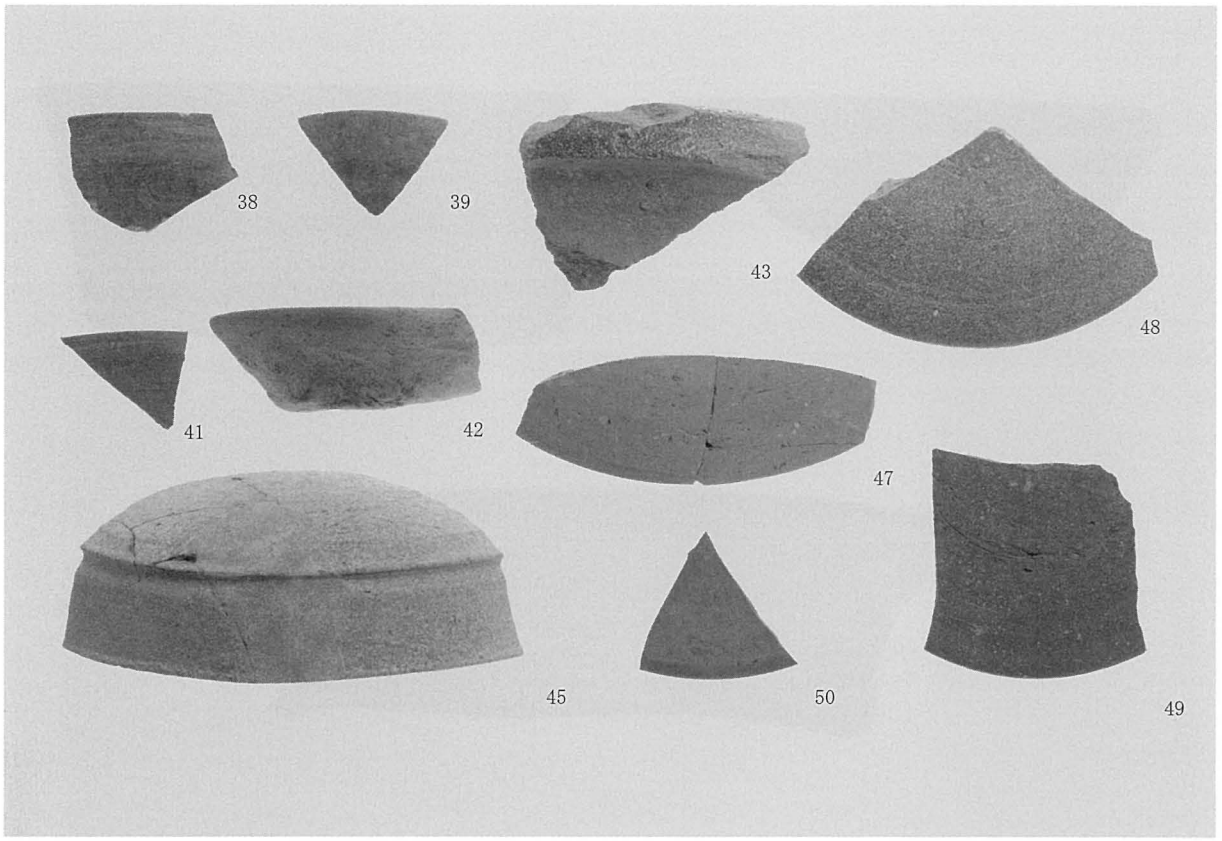


１．調査区２　第５・６層出土

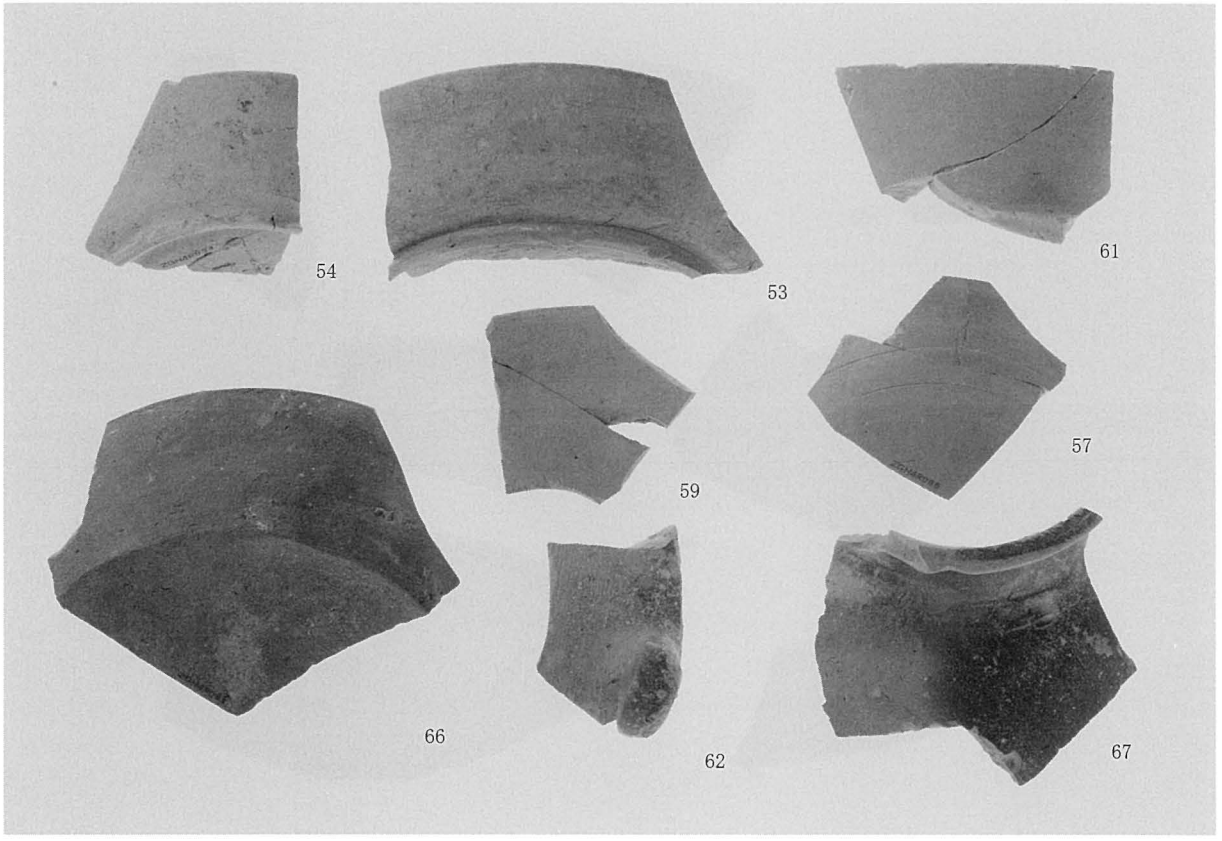


２．調査区２　各遺構出土

図版15　善根寺遺跡第４次発掘調査　遺物

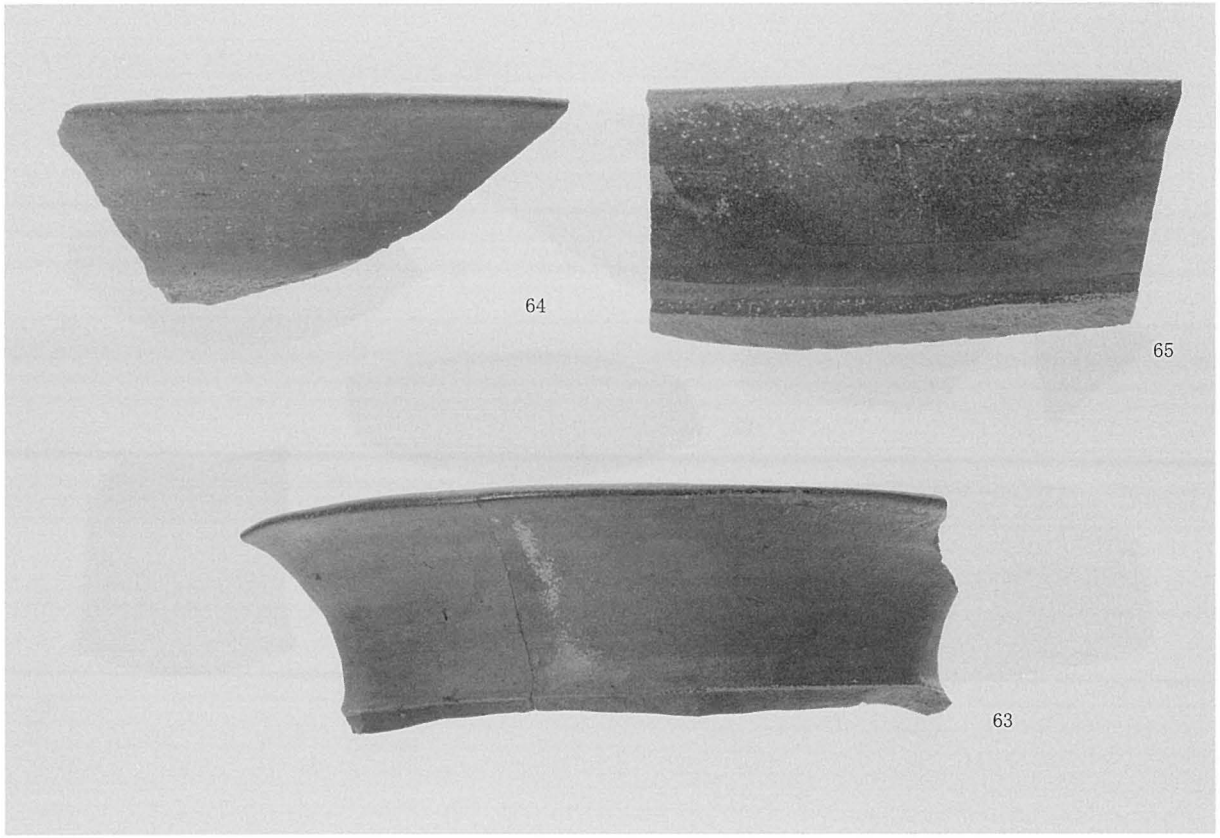


１．調査区３　第３層出土

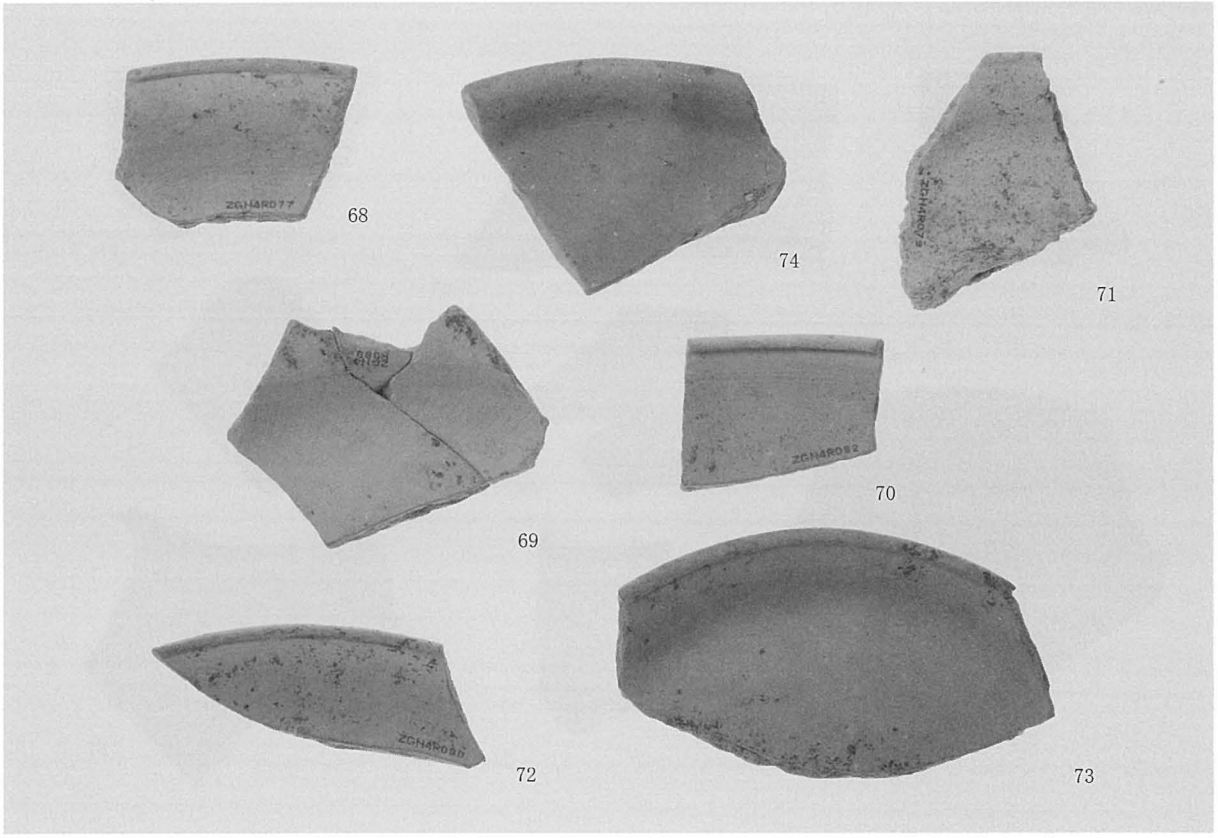


２．調査区３　第４層出土

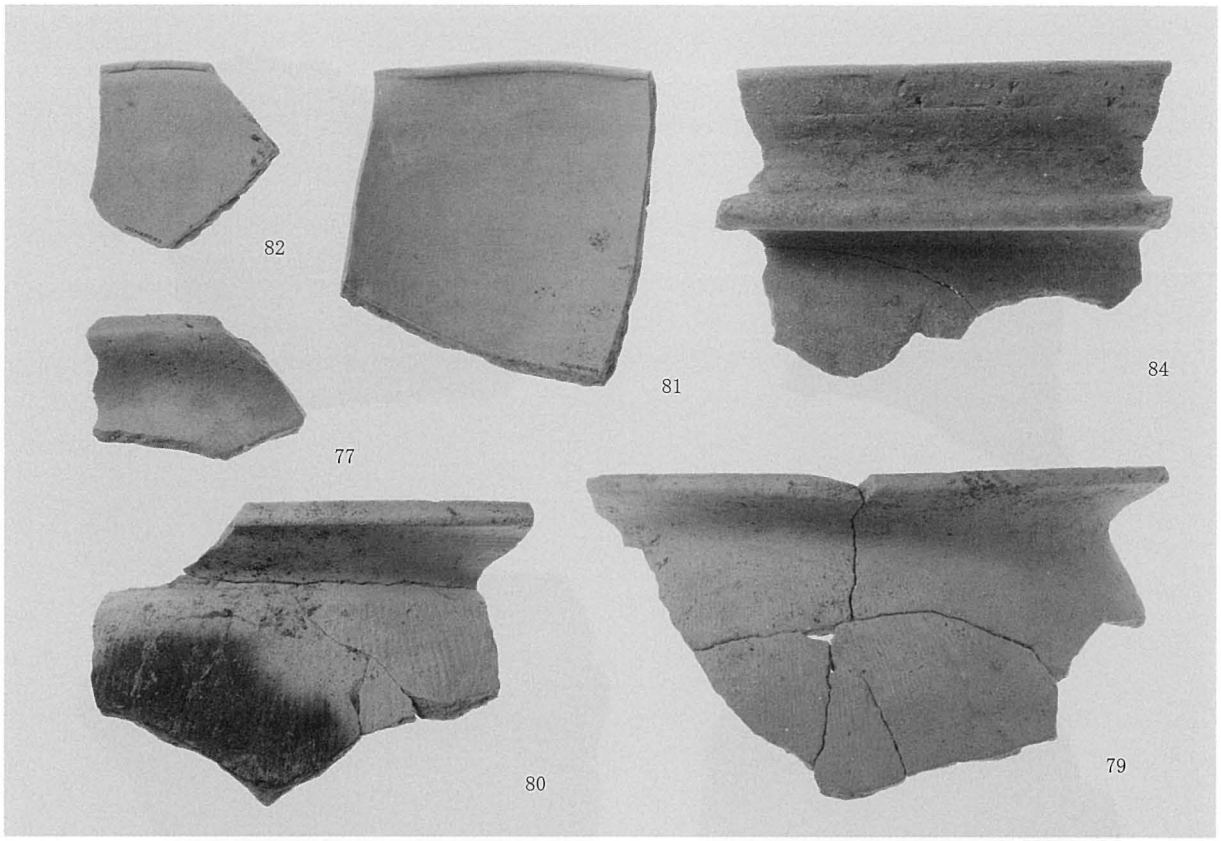
図版16　善根寺遺跡第４次発掘調査　遺物



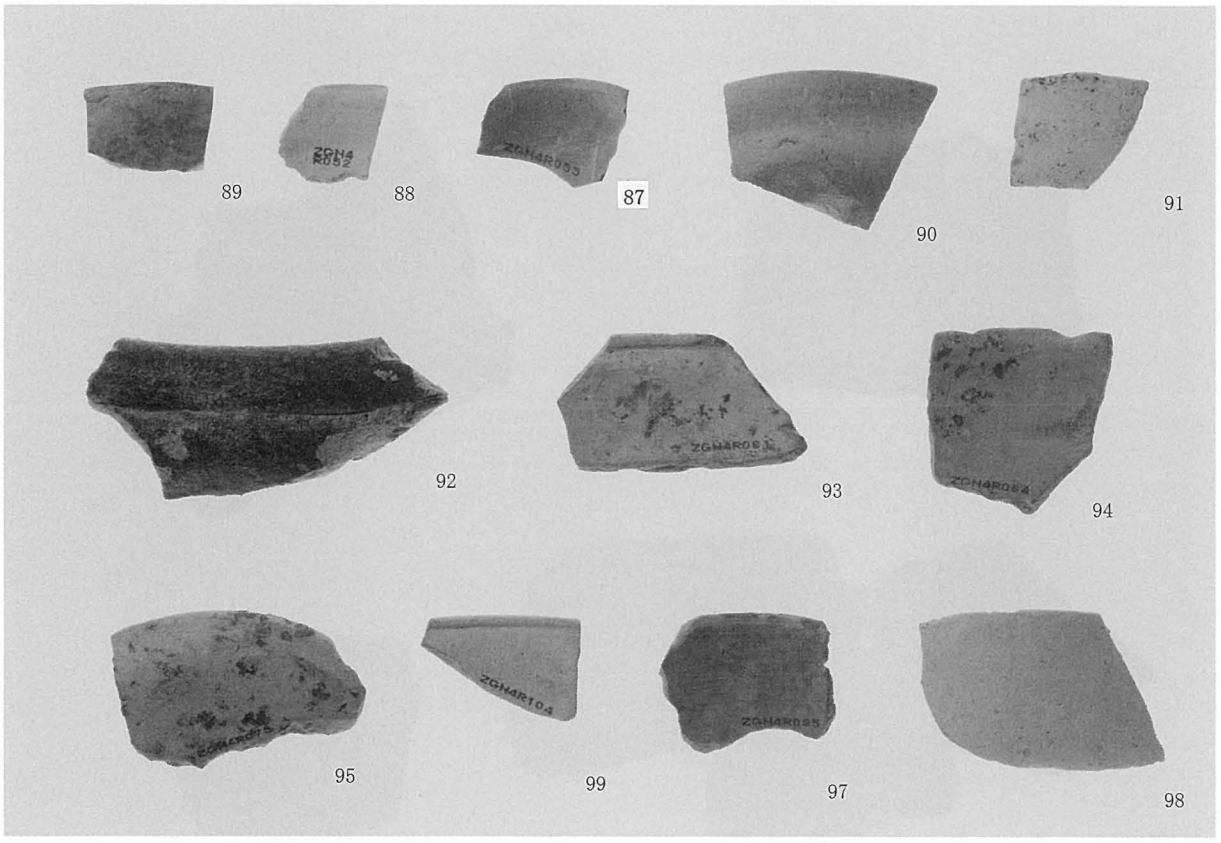
１．調査区３　第４層出土



２．調査区３　第４層出土

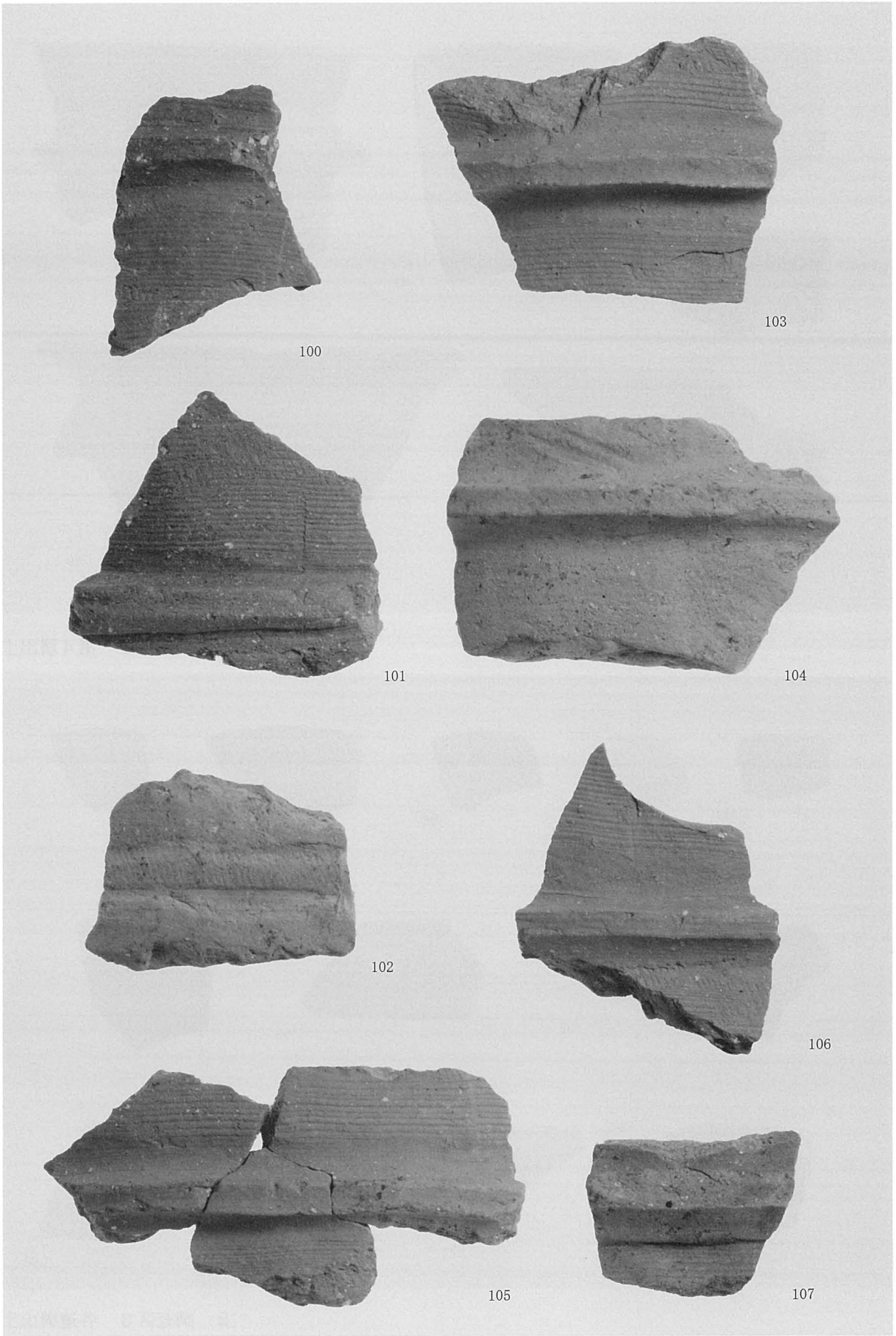


１．調査区３　第４層出土



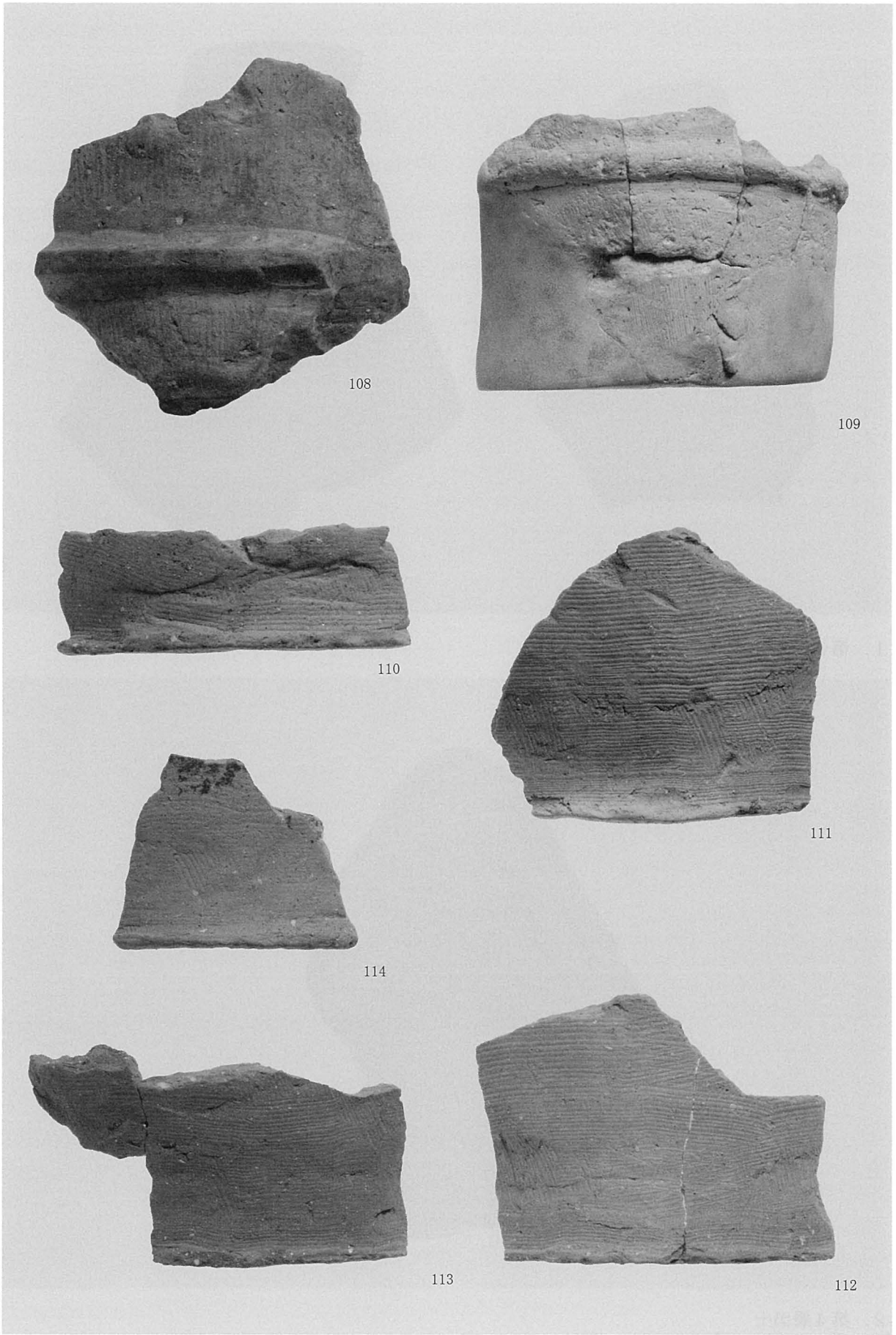
２．調査区３　各遺構出土

図版18　善根寺遺跡第4次発掘調査　遺物



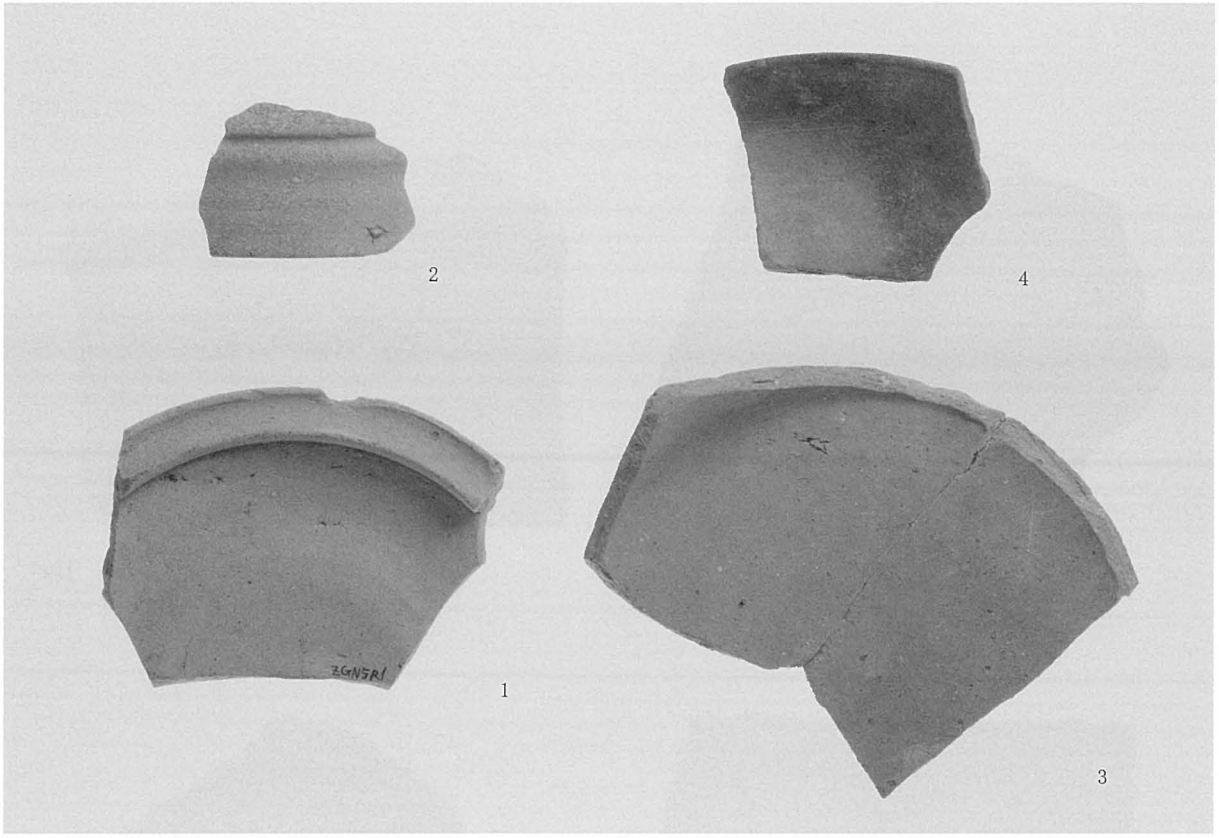
各調査区出土　埴輪

図版19　善根寺遺跡第4次発掘調査　遺物

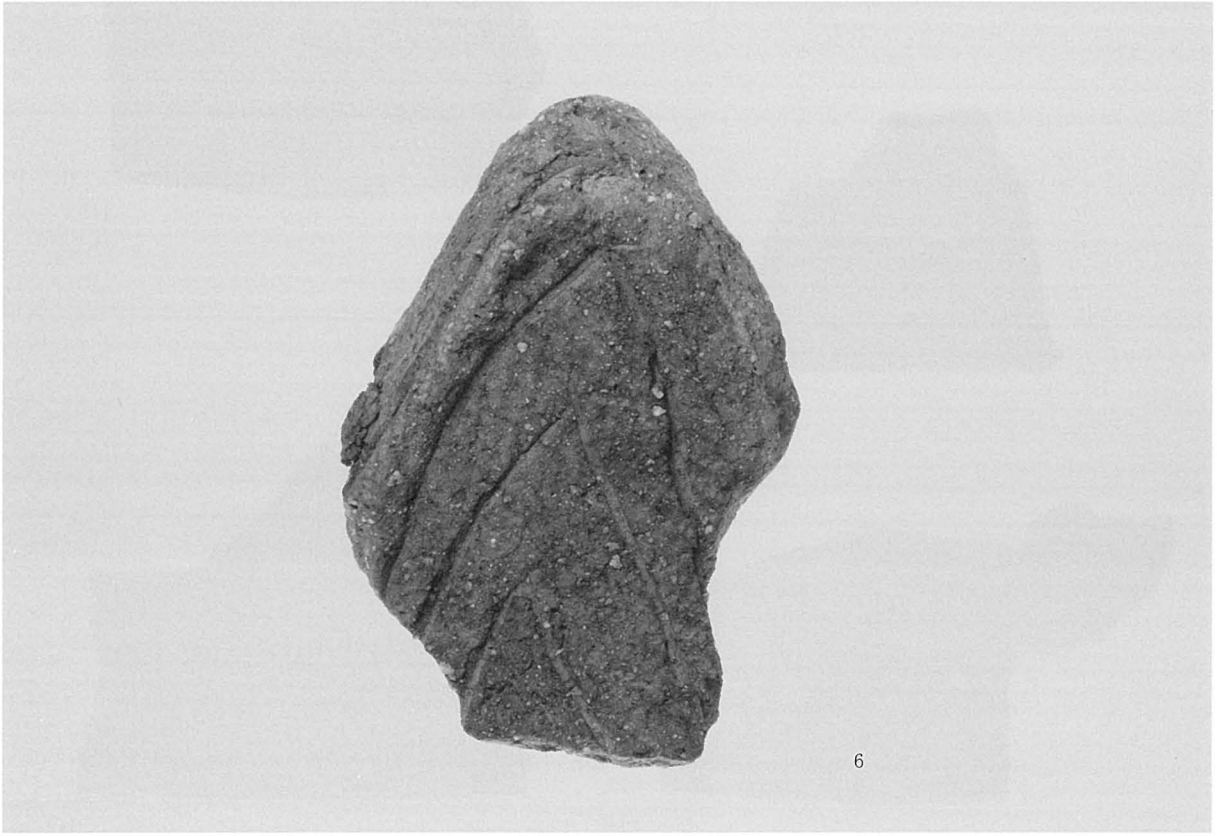


各調査区出土　埴輪

図版20　善根寺遺跡第5次発掘調査　遺物



1．第３・４層出土



2．第４層出土

第５章　市尻遺跡第２次発掘調査

１）はじめに

市尻遺跡は、東大阪市瓢箪山町、神田町、四条町及び御幸町に位置する弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。遺跡の西方には江戸時代から昭和初期にかけて辻占で栄えた瓢箪山稲荷神社が位置し、その西方には山畑古墳群が位置する。

遺跡は昭和62年のマンション建設に伴う確認調査により周知の埋蔵文化財包蔵地として周知されることとなった。その後行われた第１次発掘調査では、古墳時代後期前半の建物群や溝、奈良時代の道、平安時代から鎌倉時代にかけての遺構が確認された。

市尻遺跡内でのこれまでの調査履歴は、第１次調査のみとなっている。平成18年には、遺跡の周辺での排水設備工事に伴う立会調査を実施したところ、土器が出土したことにより遺跡の範囲が拡大された。今回の調査地区は同立会調査にて拡大された遺跡範囲に位置する。

２）調査に至る経過

平成27年２月20日、蔵総合建設株式会社より埋蔵文化財発掘の届出が提出された。届出は擁壁打設時の地盤改良工事を伴う宅地造成工事で、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため文化財課では事前の確認調査が必要な旨の指示を行い、平成27年２月24日に確認調査を行った。確認調査は２ヶ所のトレンチを設定した。各トレンチより古墳時代の土器を含む遺物包含層を検出したため、協議代理者との協議を経て、埋蔵文化財の発掘調査を平成27年３月10日から同13日まで実施した。

確認調査の概要

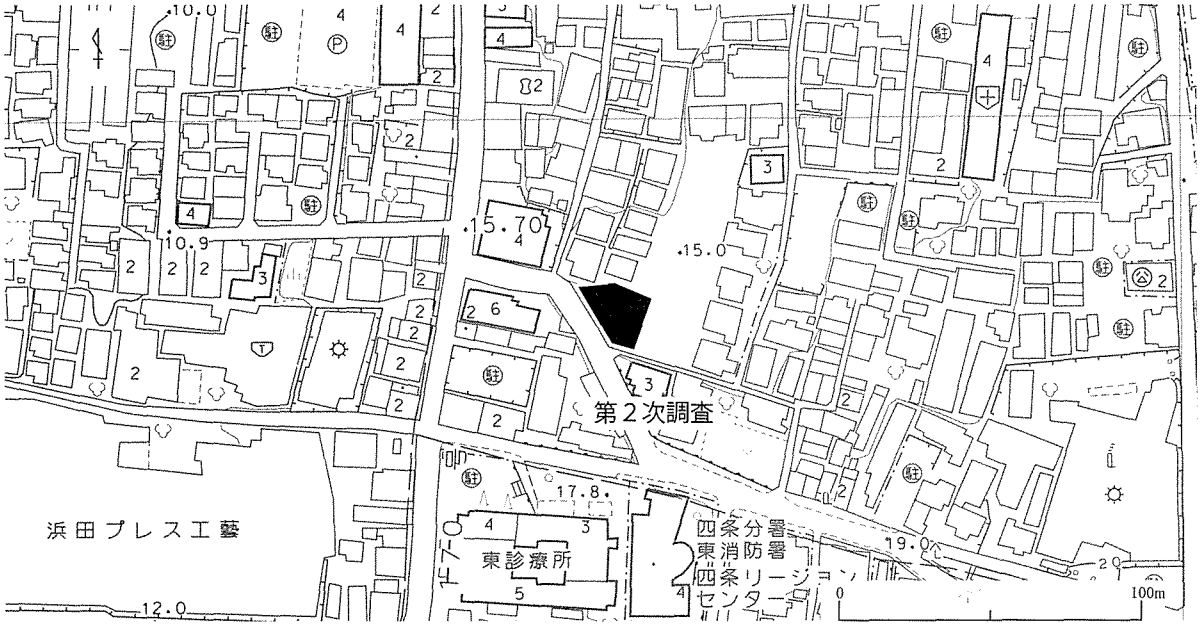
確認調査は２ヶ所のトレンチで実施した。各トレンチの堆積状況は以下のとおりである。

確認調査トレンチ１

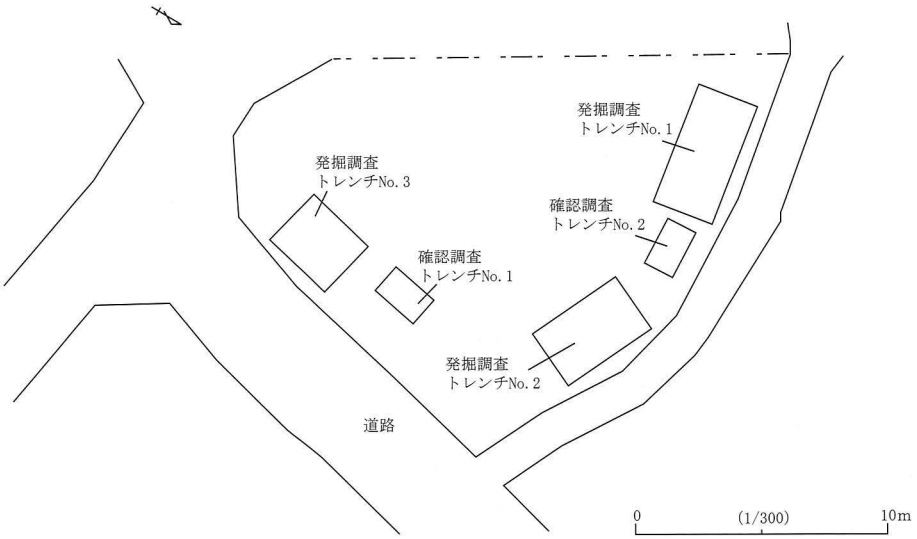
第１層　にぶい黄褐色 (10YR4/3) 中～細砂混じりシルト。

第２層　暗青灰色 (5BG4/1) 中～細砂混じり粘土質シルト。

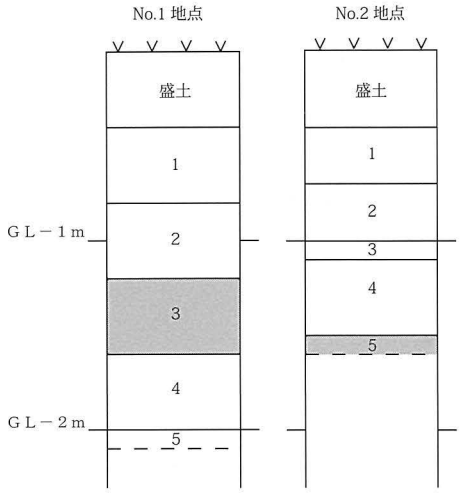
第３層　黒色 (2.5Y2/1) 細礫～細砂混じり粘土質シルト。土師器・須恵器・製塩土器含む。



第１図　調査位置図



第２図　調査トレンチ配置図



No.1地点
1.にぶい黄褐色(10YR4/3) 中～細砂混じりシルト 2.暗青灰色(5BG4/1) 中～細砂混じり粘土質シルト
3.黒色(2.5Y2/1) 細礫～細砂混じり粘土質シルト 4.黒色(2.5Y2/1) 粘土 5.緑灰色(10G5/1) 粘土質シルト
No.2地点
1.灰黄褐色(10YR4/2) 粘土質細砂 2.にぶい黄褐色(10YR4/3) 中～細砂混じりシルト
3.暗灰黄色(2.5Y4/2) 細砂混じり粘土質シルト 4.暗灰黄色(2.5Y4/2) 細砂混じり粘土質シルト
5.黒色(2.5Y2/1) 細礫～細砂混じり粘土質シルト

第３図　確認調査トレンチ柱状図

第４層　黒色 (2.5Y2/1) 粘土。
第５層　緑灰色 (10G5/1) 粘土質シルト。
確認調査トレンチ２
第１層　灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質細砂。
第２層　にぶい黄褐色 (10YR4/3) 中～細砂混じりシルト。No. 1 地点第１層と同じ。
第３層　暗灰黄色 (2.5Y4/2) 細砂混じり粘土質シルト。
第４層　灰色 (7.5Y4/1) 粗砂。
第５層　黒色 (2.5Y2/1) 細礫～細砂混じり粘土質シルト。
確認調査の結果、トレンチ１の第３層及びトレンチ２の第５層が古墳時代後期の遺物包含層であることが分かった。

４）発掘調査の概要

発掘調査は調査地で３箇所のトレンチを設定した。それぞれ発掘調査トレンチ No. １、No. ２及び No. ３とした。

発掘調査トレンチ No. 1
第０層　盛土
第１層　灰黄褐色 (10YR5/2) 中砂混じりシルト。
第２層　にぶい黄褐色 (10YR5/3) 中～細砂混じり粘土質シルト。
第３層　灰黄褐色 (10YR6/2) 中～細砂混じり粘土質シルト。

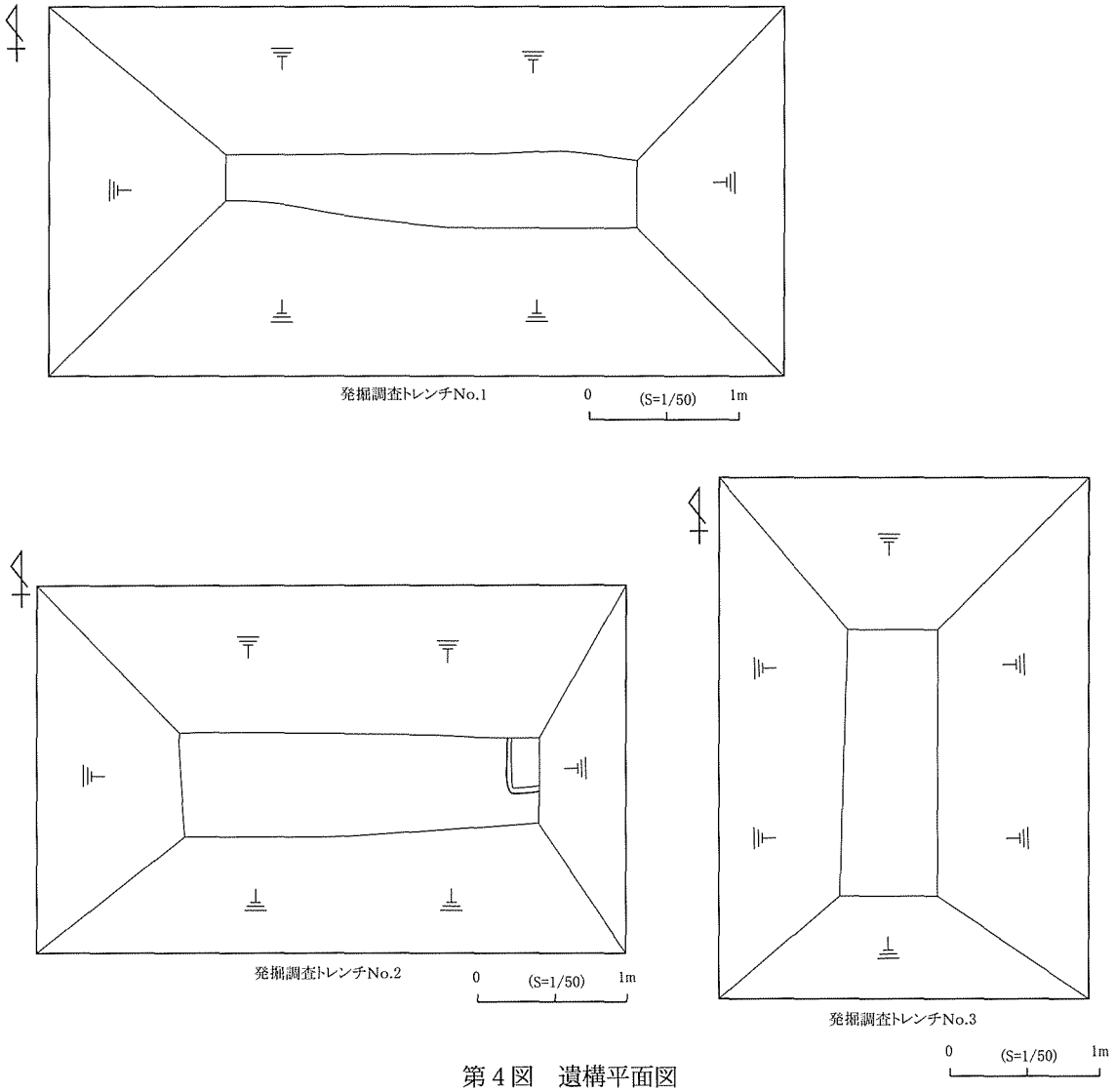
第４層　褐灰色 (10YR6/1) 中砂～粗砂。
第５層　灰黄色 (2.5Y6/2) 細砂混じりシルト。
第６層　黄灰色 (2.5Y6/1) 細砂混じり粘土質シルト。
第７層　黄灰色 (2.5Y5/1) 中～粗砂。近世の遺物包含層。
第８層　黒色 (2.5Y2/1) 細砂混じり粘土質シルト。土器・炭化物を含む遺物包含層。
第９層　黄灰色 (2.5YR4/1) 細砂混じり粘土質シルト。炭化物を含む。
第 10 層　黄灰色 (2.5YR4/1) 細砂混じり粘土質シルト。
第 11 層　灰オリーブ色 (5Y5/2) 細砂混じり粘土質シルト。

トレンチ No.1 の面積は、12.5㎡ (2.5m × 5 m) である。遺物包含層上面までを機械掘削で行い、それ以下を人力で掘削した。第７層は須恵器高坏・甕、土師器羽釜、瓦質土器、近世の陶磁器を含む遺物包含層である。第７層は調査区全体で確認できた近世の整地層である。中世の遺物を含むことから、中世段階の整地層を再整地した可能性も考えられる。第８層は確認調査トレンチで確認した古墳時代後期の遺物包含層である。第８層は、壁断面で下層の 11 層を切り込むピット状の遺構を検出した。周辺及び平面を精査したが、それ以外の遺構は検出できなかった。

発掘調査トレンチ No. 2
第０層　盛土
第１層　灰色 (7.5Y5/1) 中～粗砂。
第２層　灰黄褐色 (10YR5/2) 中砂混じりシルト。
第３層　にぶい黄褐色 (10YR5/3) 中～細砂混じり粘土質シルト。
第４層　灰黄褐色 (10YR6/2) シルト混じり細砂～粗砂。
第５層　黄灰色 (2.5Y6/1) 細砂混じり粘土質シルト。発掘調査トレンチ No.1 第６層と同じ。
第６層　灰色 (5Y5/1) 粘土質シルト。
第７層　黄灰色 (2.5Y5/1) 中～粗砂。発掘調査トレンチ No.1 第７層と同じ。
第８層　灰色 (5Y6/1) シルト混じり細砂。
第９層　灰色 (5Y4/1) 細砂混じり粘土質シルト。炭化物・遺物を含む。
第 10 層　黒色 (2.5Y2/1) 細砂混じり粘土質シルト。炭化物・遺物を含む。
第 11 層　オリーブ黒色 (5Y3/2) 細砂混じり粘土質シルト。炭化物・礫を含む。
第 12 層　黒色 (2.5Y2/1) 細砂混じり粘土質シルト。炭化物・遺物含む。発掘調査トレンチ No.1 第８層と同じ。
第 13 層　灰オリーブ (5Y4/2) 細砂混じり粘土質シルト。

トレンチ No.2 の面積は、10㎡（2.5 m× 4 m）で設定した。遺物包含層上面までを機械掘削した。堆積状況としては、トレンチ No. 1 と同様に近世の整地層とその下層の古墳時代後期の堆積層を検出した。トレンチ No. 2 で検出した第 13 層は古墳時代の堆積層である。壁断面で落込み状の遺構を検出した。埋土は第 10・11 層である。遺物は、須恵器甕、土師器甕等が出土している。

発掘調査トレンチ No. 3
第０層　盛土
第１層　灰黄褐色 (10YR5/2) 中砂混じりシルト。発掘調査トレンチ No. 1 第１層と同じ。
第２層　にぶい黄褐色 (10YR5/3) 中～細砂混じり粘土質シルト。発掘調査トレンチ No. 1 第２層と同じ。
第３層　灰色 (5Y5/1) 粘土質シルト。発掘調査トレンチ No. 2 第６層と同じ。



第4図　遺構平面図

第4層　黒色 (2.5Y2/1) 細砂混じり粘土質シルト。炭化物を含む。発掘調査トレンチ No. 1 第8層と同じ。

第5層　黄灰色 (2.5YR4/1) 細砂混じり粘土質シルト。発掘調査トレンチ No. 1 第 11 層と同じ。

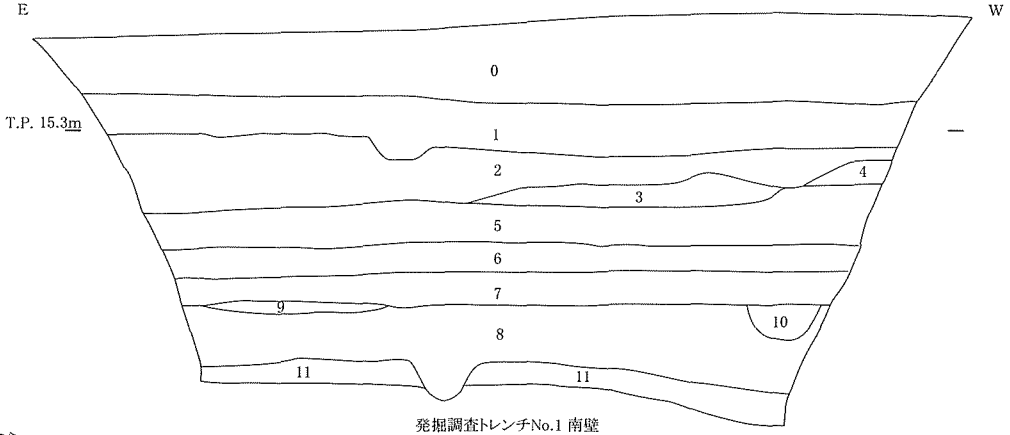
第6層　灰オリーブ (5Y4/2) 細砂混じり粘土質シルト。発掘調査トレンチ No. 1 第 13 層と同じ。

トレンチNo.3を2.5m × 3mで設定した。他のトレンチと同様に遺物包含層までを機械掘削で行い、それ以下を人力で掘削した。近世の整地層である第3層からは、陶磁器及び土師器椀が出土した。第4層からは遺構及び遺物は検出されなかった。

5）出土遺物

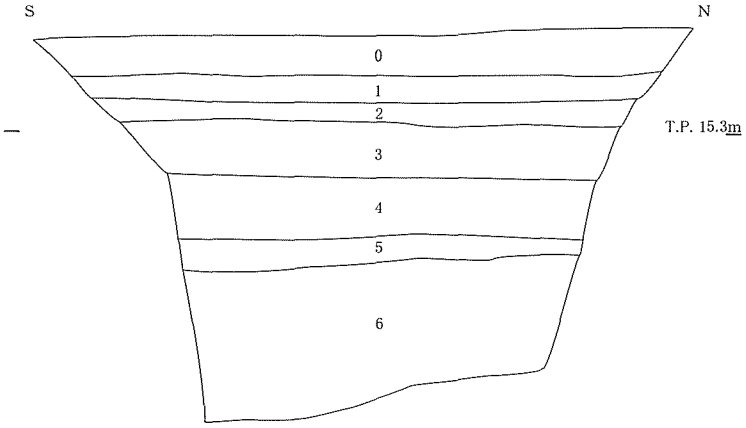
1は土師器坏である。底部は平底を呈する。体部は内弯し、口縁部にかけて肥厚する。体部の調整はユビオサエか。口縁部が肥厚し外上方に伸びる。口縁端部は面をもち内側に巻き込む。口縁部内外面はヨコナデ調整する。外面にはヨコナデ調整による稜線をもつ。6世紀後半～7世紀初めの所産。発掘調査トレンチ No. 3 第4層出土。

2は高坏の脚部である。坏部との接合部が残る。スカシが三か所に入る。坏部との接合面はヨコナデ調整する。脚部はカキ目調整する。6世紀後半～7世紀初めの所産。発掘調査トレンチ No. 1 第8



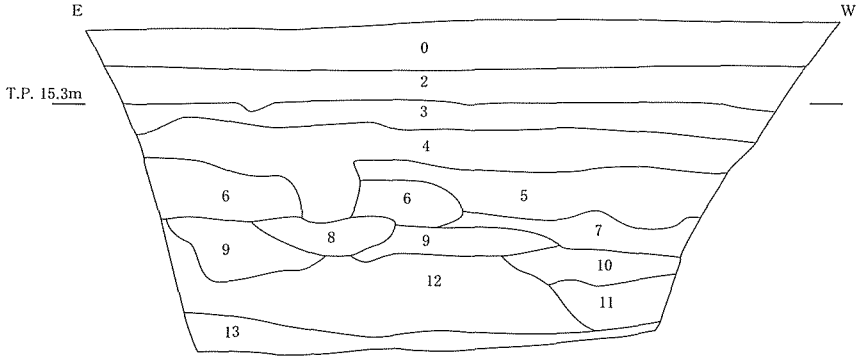
発掘調査トレンチNo.1 南壁

0：盛土 1：灰黄褐色(10YR5/2) 中砂混じりシルト 2：にぶい黄褐色(10YR5/3) 中～細砂じり粘土質シルト
3：灰黄褐色(10YR6/2) 中～細砂混じり粘土質シルト 4：褐灰色(10YR6/1) 中砂混じり粗砂 5：灰黄色(2.5Y6/2) 細砂混じりシルト
6：黄灰色(2.5Y6/1) 細砂混じり粘土質シルト7：黄灰色(2.5Y5/1) 中～粗砂 土器を含む。 8：黒色(2.5Y2/1) 細砂混じり粘土質シルト
9.黄灰色2.5YR4/1 細砂混粘土質シルト(炭を含む) 10.黄灰色2.5YR4/1 細砂混粘土質シルト 11：灰オリーブ色(5Y5/2) 細砂混じり粘土質シルト

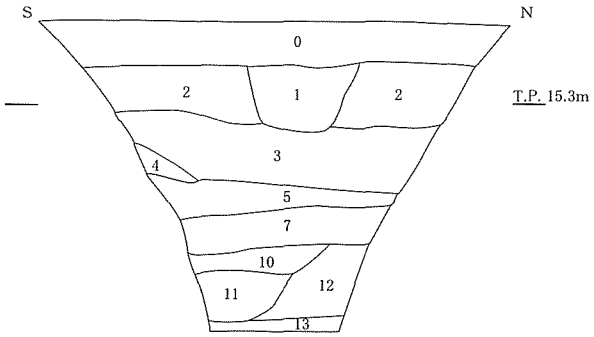


発掘調査トレンチNo.3 東壁

0：盛土
1：灰黄褐色(10YR5/2) 中砂混じりシルト 2：にぶい黄褐色(10YR5/3) 中～細砂混じり粘土質シルト
3：灰色(5Y5/1) 粘土質シルト 4：黒色(2.5Y2/1)細砂混じり粘土質シルト。
5：黄灰色(2.5YR4/1)細砂混じり粘土質シルト。 6：灰オリーブ(5Y4/2) 細砂混じり粘土質シルト



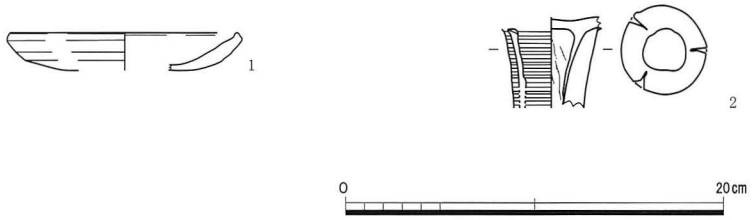
発掘調査トレンチNo.2 南壁



発掘調査トレンチNo.2 西壁

0：盛土 1：灰色(7.5Y5/1) 中～粗砂 2：灰黄褐色(10YR5/2) 中砂混じりシルト 3：にぶい黄褐色(10YR5/3) 中～細砂混じり粘土質シルト 4：灰黄褐色(10YR6/2) シルト混じり細砂～粗砂 5：黄灰色(2.5Y6/1) 細砂混じり粘土質シルト
6：灰色(5Y5/1) 粘土質シルト 7：黄灰色(2.5Y5/1) 中～粗砂8：灰色(5Y6/1) シルト混じり細砂 9：灰色(5Y4/1) 細砂混じり粘土質シルト 炭化物・遺物を含む。 10：黒色(2.5Y2/1) 細砂混じり粘土質シルト 炭化物・遺物含む
11：オリーブ黒色(5Y3/2) 細砂混じり粘土質シルト 炭化物・礫を含む。 12：黒色(2.5Y2/1) 細砂混じり粘土質シルト 炭化物・遺物含む。 No.1第8層と同じ 13：灰オリーブ(5Y4/2) 細砂混じり粘土質シルト

0 (S=1/40) 2m



第６図　遺物実測図（土師器・須恵器）

層出土。

６）まとめ

今回の発掘調査は、古墳時代後期に属すると思われる遺物包含層の調査を主として行ったものである。遺物包含層の性質については以下のとおりである。

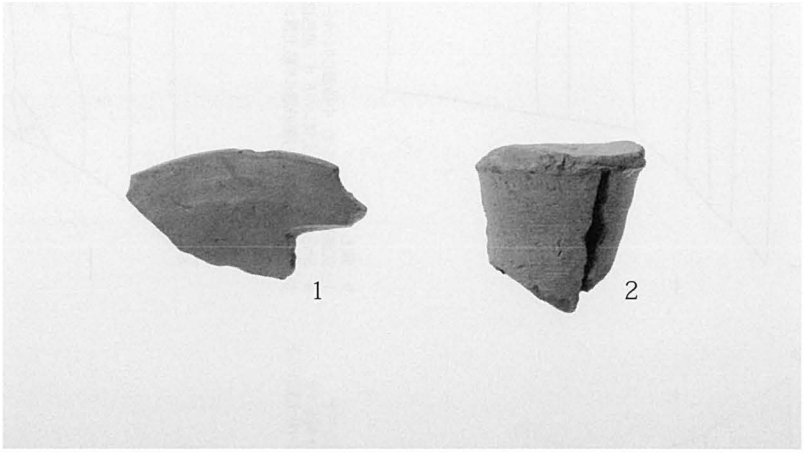


写真　各層位出土土師器・須恵器

まず、遺物包含層上面レベルは、発掘調査トレンチ No. 1 と No. 3 では約 70 ㎝の比高差をもち、南東から北西へと下がっていたことが分かった。また、発掘調査トレンチ No. 1 ではピット状の遺構を、発掘調査トレンチ No. 2 では落込み状の遺構をそれぞれ検出したものの、それぞれ限定的なものであった。

調査地南側には、生駒山麓を東へと伸びる道路がある。この道路はかつて「猪池」（イノイケ。現在の旧東診療所。）と「四条池」（現在の大池公園）を結ぶ、旧谷地形を利用した水路であった。「四条池」をさらに東へと進んだ場所にある東大阪市指定文化財「旧春日神社」付近には「地蔵谷川分水樋」と呼ばれる樋が現在も残っている。この場所で谷筋は二股に分かれ、その一方が「四条池」を経て「猪池」へと流れていた。したがって、今回の調査地は、旧谷地形上又はそれに近い場所に位置する。今回検出した遺物包含層も旧地形の影響を受けた堆積層である能性が考えられ、検出状況からおそらくは、旧谷地形の斜面地のような場所に局所的に堆積したものであろう。調査完了後、調査地北側でも宅地造成に伴う確認調査を実施したが、遺物包含層は一切検出されなかったこともその傍証となる。また、遺物包含層上面では、近世の整地層より中世の遺物を検出したことから、調査区にも中世の遺構が存在したものの、近世段階で撹乱を受けたとも考えられるが、二次的な堆積である可能性も否定できない。

【参考文献】

財団法人　東大阪市文化財協会　1998 『東大阪市文化財協会概報集　－ 1997 年度－』
大阪府立近つ飛鳥博物館　2006 『年代のものさし　－陶邑の須恵器－』

図版1　市尻遺跡第2次発掘調査　遺構

1．調査実施前（南から）

2．機械掘削状況（南東から）

3．トレンチ1南壁（北から）

図版2　市尻遺跡第2次発掘調査　遺構

1．トレンチ1南壁（北から）

2．トレンチ1完掘状況
（東から）

3．トレンチ2南壁（北から）

図版３　市尻遺跡第２次発掘調査　遺構

１．トレンチ２西壁（東から）

２．トレンチ２完掘状況
（東から）

３．トレンチ３東壁（西から）

図版4　市尻遺跡第2次発掘調査　遺構

1．トレンチ３北壁（南から）

2．トレンチ３完掘状況
（南から）

3．調査完了状況（南から）

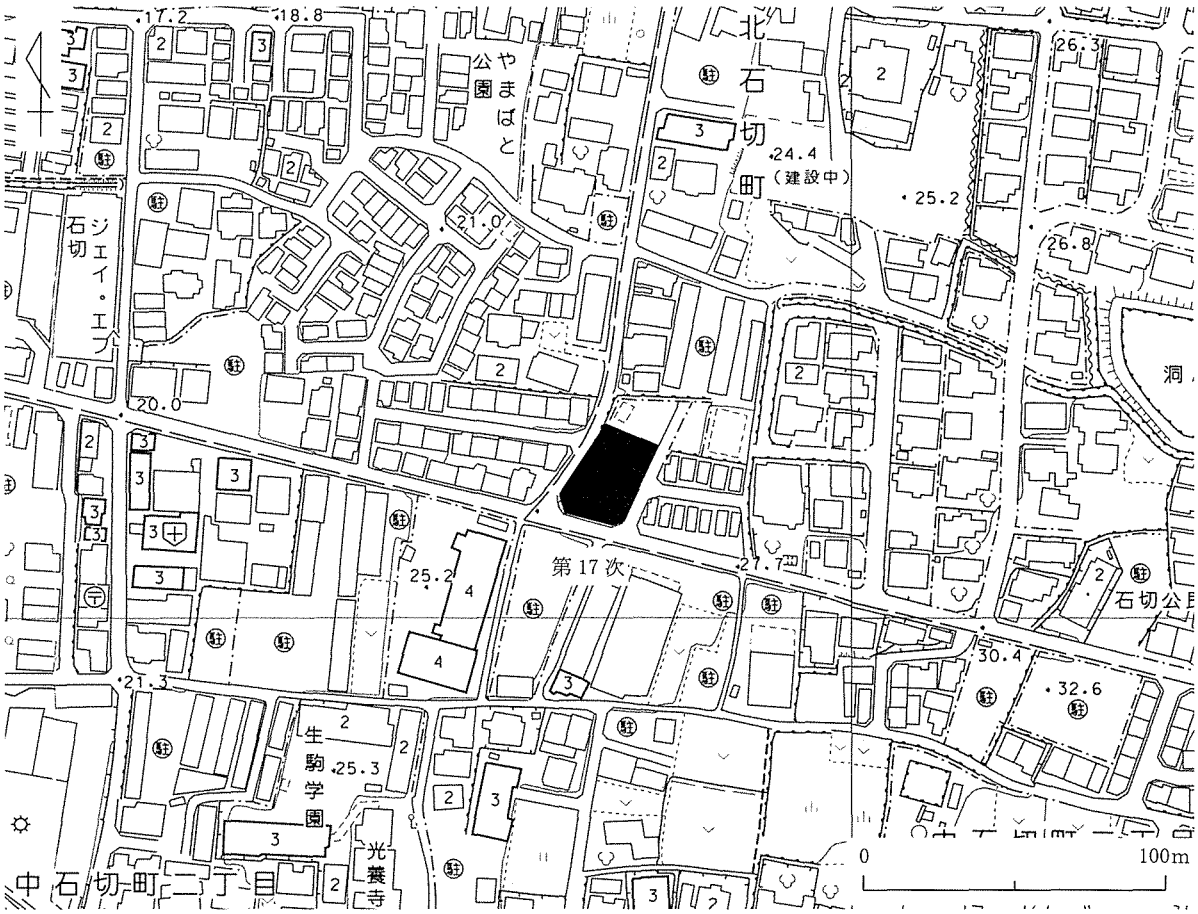
第６章　芝ヶ丘遺跡第 17 次発掘調査

１）はじめに

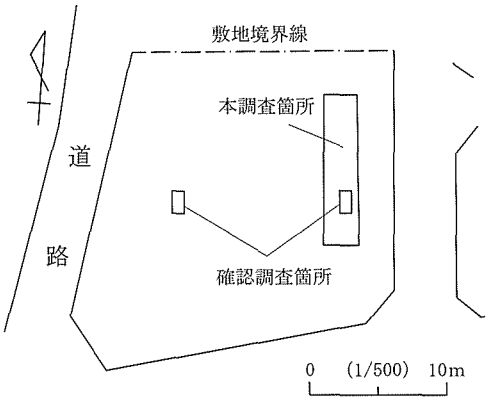
芝ヶ丘遺跡は、東大阪市北石切町・中石切町二・四丁目を中心に一部日下町二～三丁目にわたる縄文時代から近世にかけての複合遺跡である。音川（辻子谷渓）の右岸に位置し、同渓谷が形成する扇状地上に立地する。昭和 34 年北石切町での宅地造営工事の際に弥生土器・土師器が発見され周知の埋蔵文化財包蔵地となった。その後市立石切中学校内施設建設工事、下水管埋設工事、共同住宅等に伴う調査が実施されている。調査の結果、弥生時代後期～古墳時代の土器、中世の耕作に伴う溝などが検出された。

２）調査の経過

平成 27 年５月、東大阪市東石切町 2012 番３、４の各一部、中石切町二丁目 2023 番２において、個人施工による共同住宅建設に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された（第１図）。当該建物の基礎工事は地盤改良工事を含むもので、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、確認調査が必要である旨を届出者に通知した。確認調査を平成 27 年６月 22 日に実施したところ、須恵器、土師器が出土した。この結果に基づき代理者と協議を行い、同年６月 24 日からトレンチを設定して調査を行った（第２図の本調査箇所）。調査面積は合計で 34 ㎡である。



第１図　調査位置図



第２図　調査トレンチ位置図

３）調査の概要

層序（第３図）

盛土

第１層　灰色（5Y4/1）大礫～細砂混じりシルト

第２層　灰色（7.5Y6/1）中礫～細砂混じりシルト

第３層　青灰（10BG6/1）細砂混じり粘質土

第４層　黄灰（2.5Y4/1）中礫～細砂混じりシルト

第５層　灰色（N5/0）粗～細砂

第６層　灰色（N6/0）粗～細砂混じり粘質土

第１層は旧耕作土である。第２層は第１層に伴う床土層である。第５・６層は調査区北側にのみ広がり、ともに出土遺物はないが、近世に相当すると考えられる。第３・４・６層は耕作土である。第３・４層からは古墳時代の須恵器・土師器小片が出土しており、時期は不明確であるが、層順に基づくと中世から近世にかけての耕作土と考えられる。第５層は水成堆積によるものである。

４）遺構（第４図）

第２層上面を第１面として調査を行った。調査区の北東側に撹乱があったため、第２面以下については調査時に南北間の層序関係を把握することができなかった。そのため、調査区の北側と南側では本来の遺構面とは異なった状態での調査となった。

調査の結果、西壁断面において層序の検討を行った。検討の結果、第２面は調査区北側の第２・５層下面である。調査区北側では南側と層序が異なり、第２層を掘り下げると第５・６層となる。第３面は第６層下面である。第４面は調査区南側の第２層下面である。第５面は第４層上面である。なお、図版１―２では、調査区北側は第３面、南側は第４面である。図版２－１では、北側が第４・９層下面、南側が第５面である。

第２面

落ち込み１

調査区北側で検出した。調査区が狭く全形を確認できなかったが、東西に軸をもつものである。

溝１

調査区のほぼ中央部で検出した。溝から北側へと一段下がった地形を呈しており、段々畑として利用されたと考える。いずれの遺構からも出土遺物がないため、時期は不明確であるが層序に基づくと近世のものと考えられる。

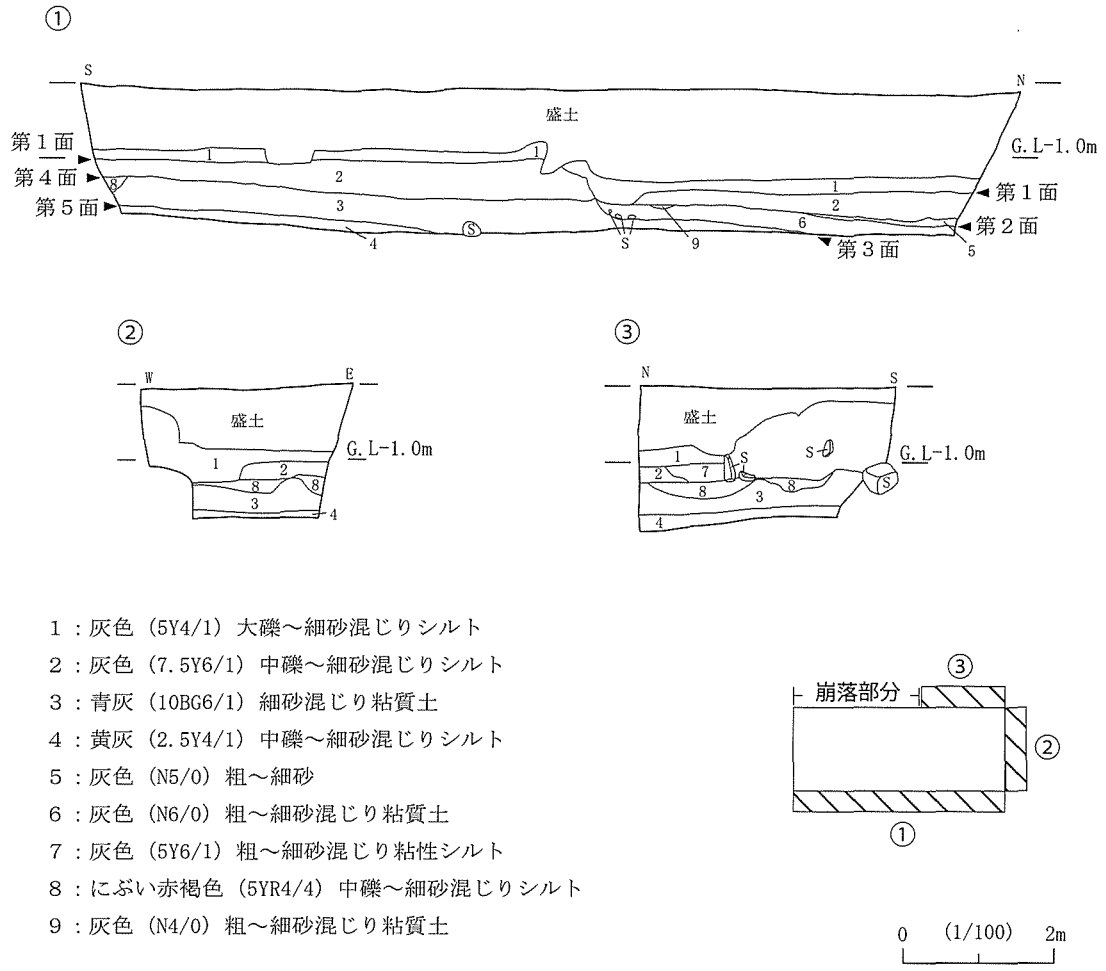
第３面

調査区中央部にて落ち込みを検出した。第２面で検出した落ち込みとほぼ同一の場所にあたるため、この落ち込みもまた段々畑に関わるものと考える。

第４面

溝２～４

調査区南側で溝を３条検出した。南西から北東に軸をもつ。耕作に伴う溝と考えられ、幅 20～70cm、深さ 10～20cm を測る。



１：灰色（5Y4/1）大礫～細砂混じりシルト
２：灰色（7.5Y6/1）中礫～細砂混じりシルト
３：青灰（10BG6/1）細砂混じり粘質土
４：黄灰（2.5Y4/1）中礫～細砂混じりシルト
５：灰色（N5/0）粗～細砂
６：灰色（N6/0）粗～細砂混じり粘質土
７：灰色（5Y6/1）粗～細砂混じり粘性シルト
８：にぶい赤褐色（5YR4/4）中礫～細砂混じりシルト
９：灰色（N4/0）粗～細砂混じり粘質土

0　(1/100)　2m

第３図　調査区断面図

第５面

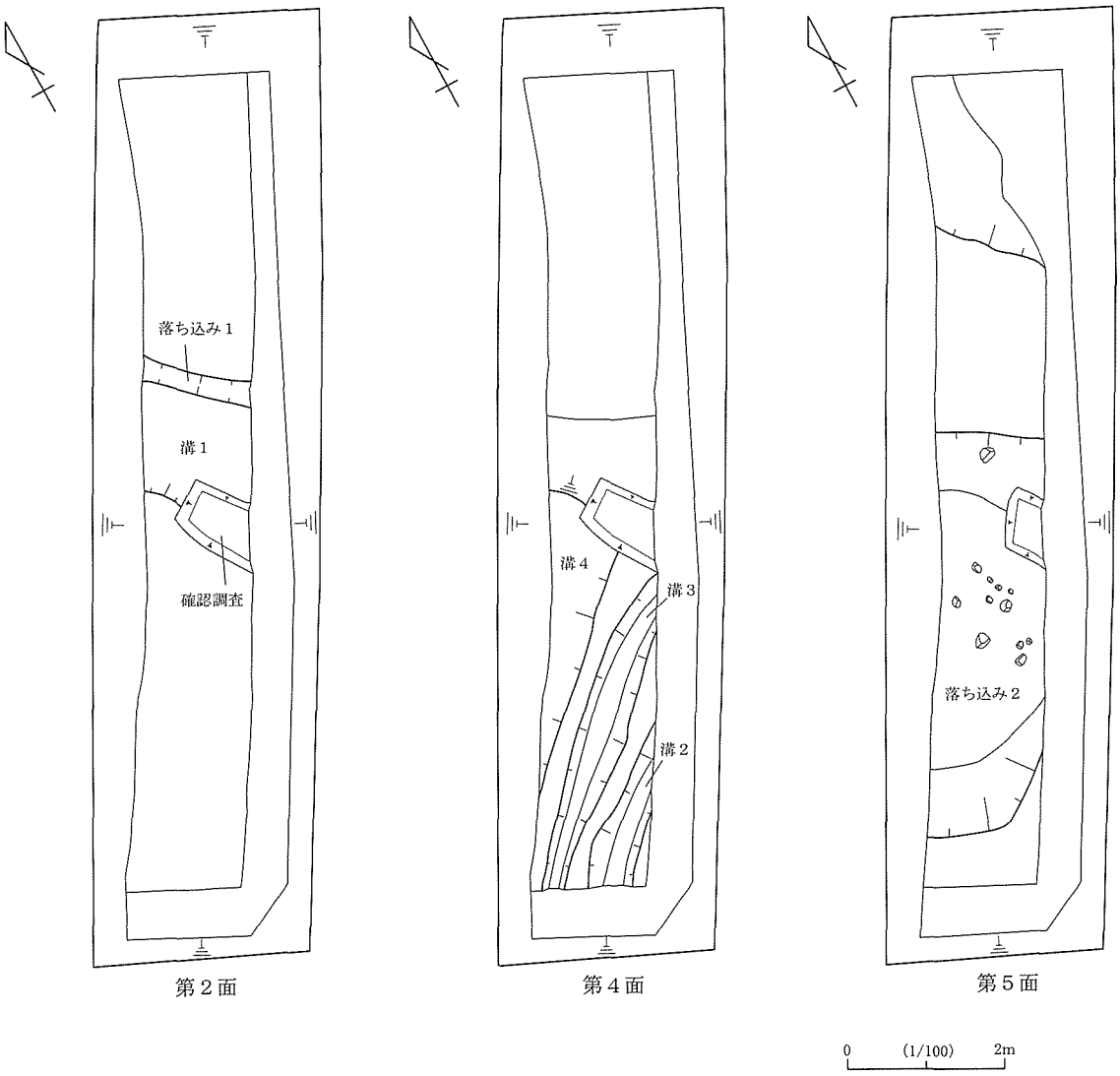
落ち込み２

調査区中央部で検出した。大きさ 10 ～ 15cm 程の石が散在していた。第４層にあたる耕作土を形成する際に、これらの石を利用して落ち込みを埋めたものと考えられる。

５）出土遺物（第５図）

今回の調査では、主に第２層から弥生土器、土師器、須恵器などが出土した。いずれも包含層出土であるため、器種別に報告する。

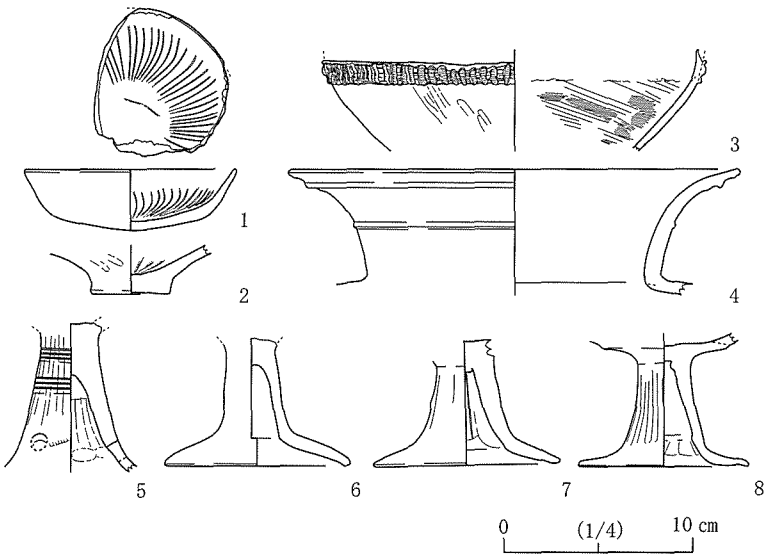
１は土師器坏である。復元口径は 11.0cm、器高は 3.2cm を測る。やや尖り気味の底部から外方に広がる口縁部である。見込み部はナデ後、放射状の暗文を施す。外面はナデ調整を施す。古墳時代中期中頃。２は弥生土器壷の底部である。やや突出した底部で、凹底を呈する。内面はくもの巣状圧痕が見られる。弥生時代後期前葉。３は弥生土器手焙形土器の体部下半である。突帯を貼付け、刻目を施す。内面はハケ調整､外面はヘラミガキを施す。弥生時代後期後半。４は須恵器甕の口縁部である。頸部から口縁にかけておおきく外反する。口縁端部は内外面ともに回転ナデを施す。TK216 ～ TK208



第４図　調査トレンチ遺構平面図

に相当する。古墳時代中期中頃～後半。５～８は弥生土器・土師器高杯の脚部である。いずれも杯部を欠損している。５は脚柱部がハの字を呈し、裾はゆるやかに開く。脚柱部に３条の沈線文が２対みられる。裾部内面にはユビオサエとハケメがみられる。外面はヘラミガキを施し、脚柱部に３方向に円形の透かしを施す。弥生時代後期前葉。６は裾部が屈曲し、裾端部は丸くおさめる。内面にヨコナデを施す。外面は摩滅のため調整は不明である。７は脚柱部がハの字を呈する。脚部が大きく屈曲しており、裾端部は丸くおさめる。内面上半をヨコナデ、外面上半はヘラミガキを施す。脚部下半は摩滅しているため調整は不明である。８はハの字を呈する脚柱部に、裾部から屈曲して外方に広がる。裾端部は丸くおさめる。内面上半をヨコナデ、内面下半にはナデ、屈曲部には連続してユビオサエを施す。６・７・８は古墳時代中期中頃。

１・４・５・７・８は第２層、２・６は第５層、３は側溝より出土した。



第5図　出土遺物

6）まとめ

本調査地は、調査地南側から北側にかけて緩やかに傾斜する地形であった。中世から近世には耕作地化されたようである。近世には段々畑として利用されていた。

須恵器・土師器といった古墳時代の遺物が最も多く出土した。本調査地付近は、古墳時代から奈良時代にかけて集落が営まれたことが既往の調査によって想定されてきた（東大阪市教育委員会 2002、2004）。これらの調査は本調査地から北へ約 100m の地点にあたる。一方、今回の調査では、既往の調査よりも古段階にあたる古墳時代の遺物が多く出土している。これらはさほどローリングを受けておらず、古墳時代中期には本調査地周辺に集落の中心域が存在したと考えられる。本調査によって古墳時代と奈良時代では集落域が変遷した可能性が指摘できよう。集落域を明らかにするためにも今後の継続した調査に期待したい。

【参考文献】

大阪府立近つ飛鳥博物館 2006『年代のものさし―陶邑の須恵器―』

財団法人東大阪市文化財協会 1985『芝ヶ丘遺跡発掘調査概報―石切中学校校舎増築工事に伴う第 4 次調査―』

田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

辻　美紀 1999「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学―大阪大学考古学研究室 10 周年記念論集―』大阪大学考古学研究室

寺沢　薫・森岡秀人編 1989『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅰ』木耳社

東大阪市教育委員会 2002『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報―平成１３年度―』

東大阪市教育委員会 2004『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報―平成１５年度―』

図版1　芝ヶ丘遺跡第17次発掘調査　遺構

1．調査前全景
（北より）

2．本調査箇所
第1面　溝
（南より）

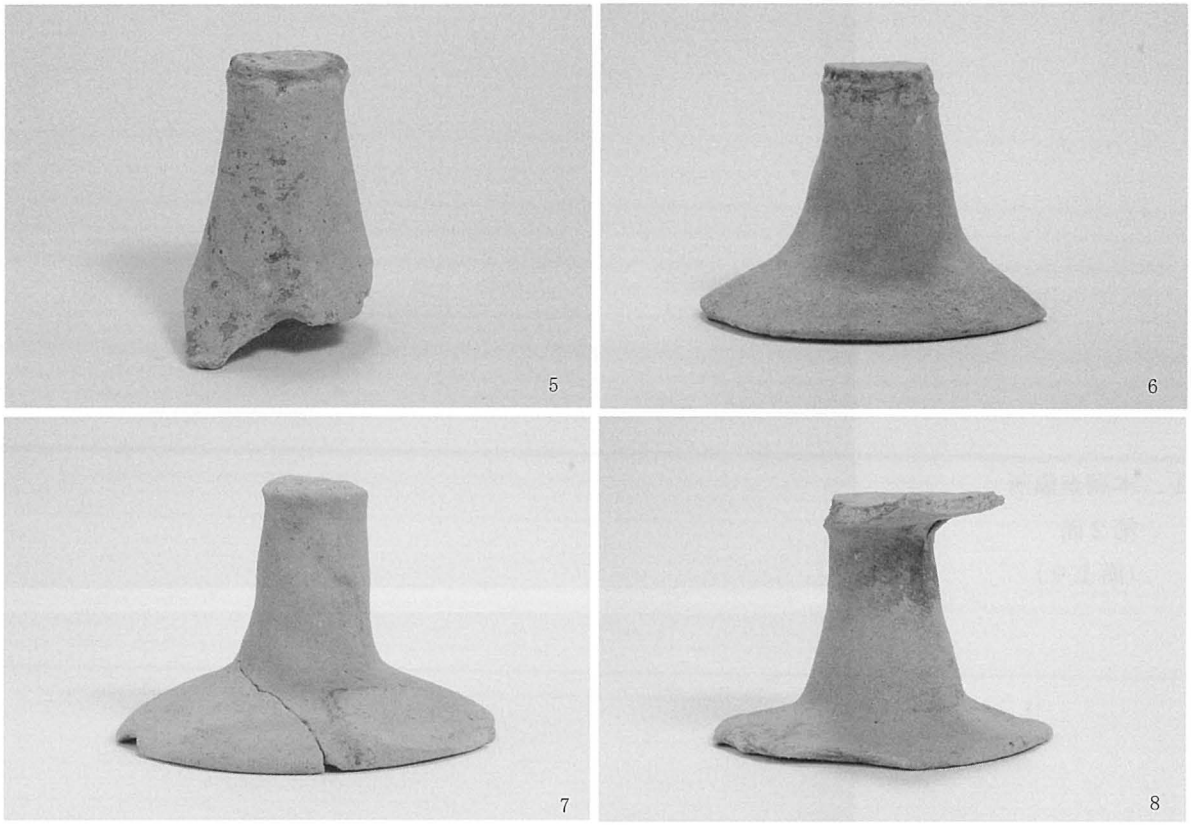
3．本調査箇所
調査風景
（南より）

図版2　芝ケ丘遺跡第17次発掘調査　遺構

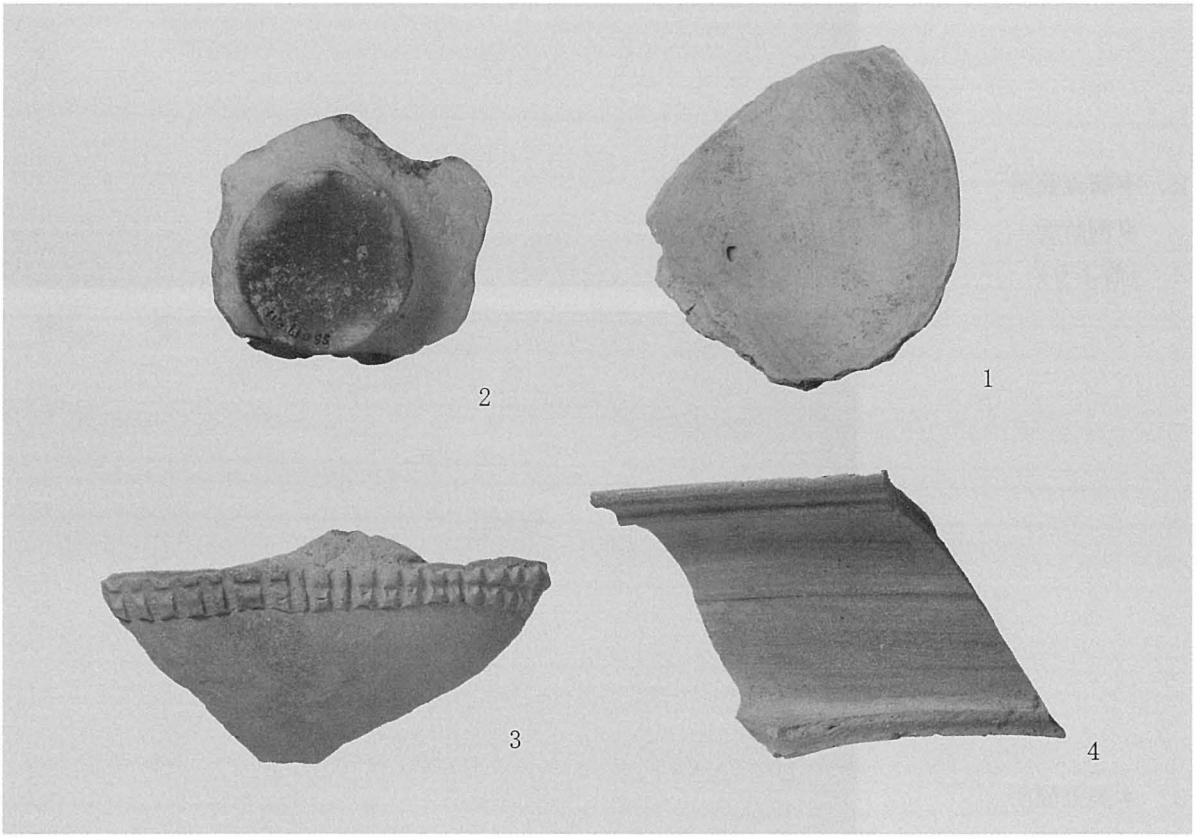
1．本調査箇所
第２面
（南より）

2．本調査箇所
東側断面
（西より）

3．本調査箇所
西側断面
（東より）



1．第17次　出土遺物1



2．第17次　出土遺物2

第７章　慈光寺僧坊跡第１次発掘調査

１）はじめに

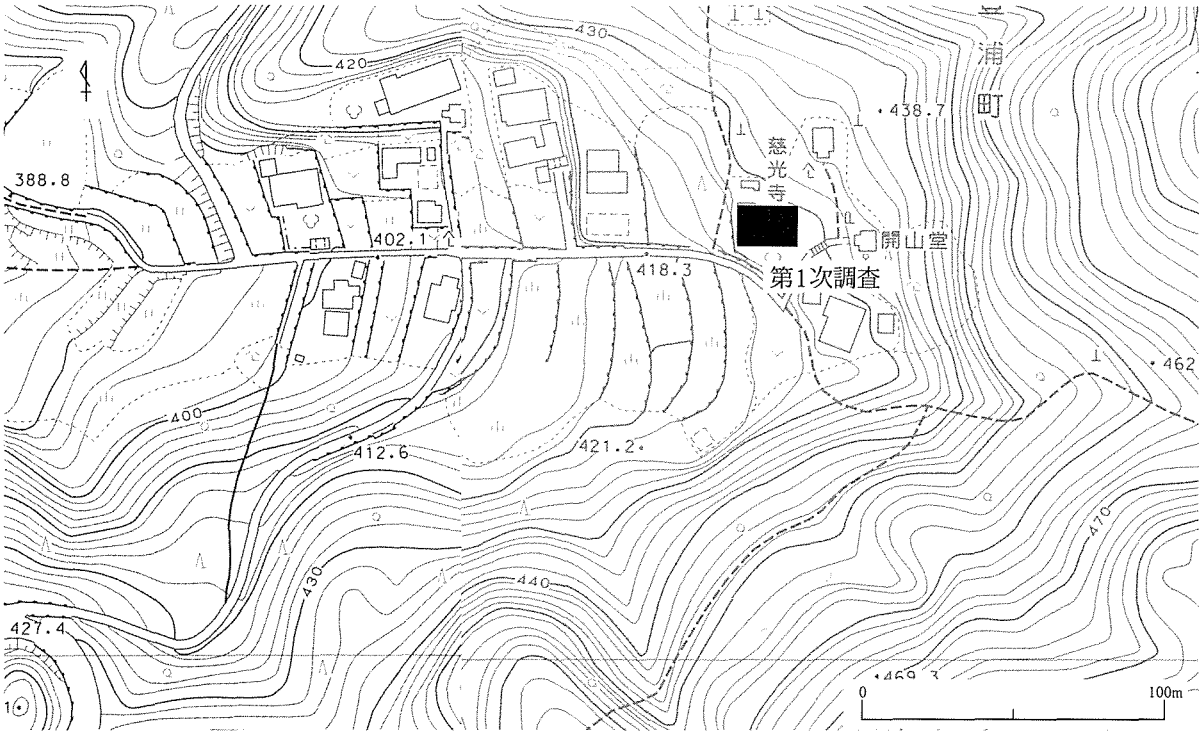
慈光寺は、暗峠北方の標高約 400 mに位置し、「髪切」と呼ばれる一帯にある真言宗の寺院である。この寺の開基は役行者によると伝えられ、修験道場として著名である。葛城山脈の北方に位置することから、平安時代には「葛木北峰」と呼ばれた。寺には正応５年（1292）に鋳造された大阪府指定文化財の銅鐘が残り、その銘文により、同寺は承保２年 (1075) の段階で鐘楼を持つ寺院であったことが知られている。境内には、天正 19 年 (1591) の銘が残る花崗岩製十三仏板碑が残り、寺伝によれば天正年間に兵火に遭い堂宇が焼失したとされる。その後寛文６年 (1666) に再興された。江戸時代後期になると『河内名所図会』に描かれるようなホトトギスの名所となった。

また、指定文化財としては、境内が大阪府の名勝に、板絵著色千手観音図が市の有形文化財に、そして境内を含む髪切一帯のホトトギスが「髪切のホトトギス」として市の天然記念物にそれぞれ指定を受けている。

慈光寺が以上のような歴史的変遷をもつことから、慈光寺僧坊跡は埋蔵文化財包蔵地として周知されてきたものである。ただしこれまで境内を含め一度の発掘調査も行われておらず、現在の寺域が形成される以前の遺構の状況はよく分かっていない。

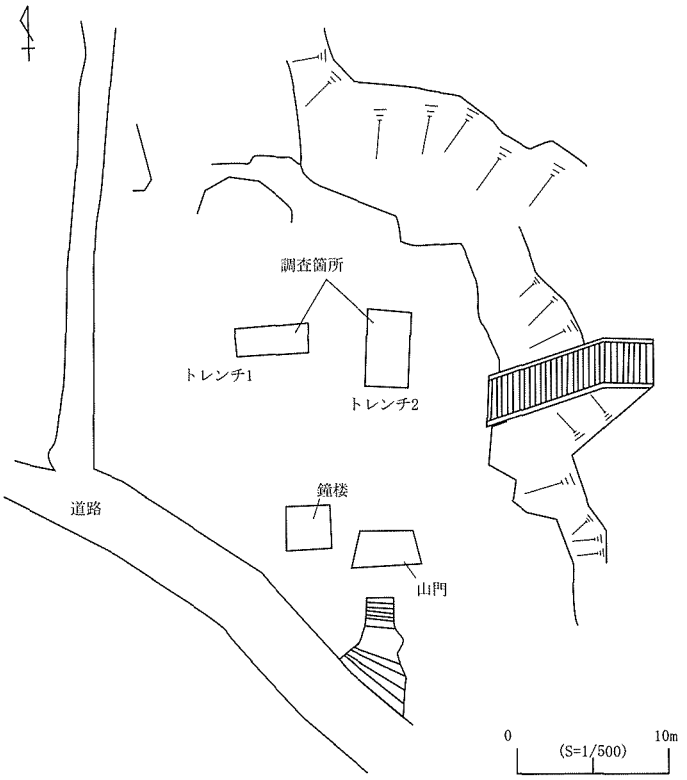
２）調査に至る経過

平成 27 年５月 18 日付で慈光寺客殿の建設工事にかかる埋蔵文化財発掘の届出が提出された。前述のとおり慈光寺僧坊跡はこれまで発掘調査履歴がないことや、建設に伴い解体される建物には礎石とみられる平坦面をもつ石を束石として利用していることから、室町時代以前の慈光寺に伴う遺構が現在も残されている可能性が考えられた。このため協議代理者と協議を行い、基礎掘削深度の範囲内



第１図　調査位置図

で埋蔵文化財の有無を確認する調査を行うこととした。調査は、建物解体後の８月５日～８日の４日間で行った。調査の結果、平安時代から室町時代後期までの慈光寺に伴う遺構は検出されなかったが、近代以降の整地層より室町時代後期の土師器皿が大量に出土したため、以下のとおり報告を行う。



第２図　調査トレンチ配置図

３）調査の概要

調査は、工事予定範囲で、室町時代後期以前の慈光寺に伴う遺構の有無を確認する目的で行った。調査トレンチは２か所設定した。

トレンチ１は２ｍ×５ｍの範囲で設定し、トレンチ２は３ｍ×５ｍで設定した。

トレンチ１は、今回の届出にかかる工事の基礎掘削深度 GL-0.5 ｍの範囲で行った。堆積状況は以下のとおりである。

第１層　オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 粘土質シルト。
第２層　にぶい黄色 (2.5Y6/4) 粘土質シルト。炭層薄く含む。
第３層　黄褐色 (2.5Y5/6) 粘土質シルト。上部に 3cm の炭層含む。
第４層　黄褐色 (2.5Y5/3) 粘土質シルト。
第５層　にぶい黄橙色 (10YR6/) 粘土質シルト。
第６層　灰黄色 (2.5Y6/2) 砂質シルト (上層) とにぶい黄橙色 (10YR6/3) 粘土質シルト (下層) 。下部に焼土含む。
第７層　にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘土質シルト。炭層と焼土層と浅黄色 (2.5Y7/4) 細砂層を含む。
第８層　浅黄色 (2.5Y7/4) 粘土質シルト。
第９層　灰黄色 (2.5Y7/2) 砂質シルト。0.5 ～ 1cm の風化礫 (花崗岩) 含む。
第 10 層　にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質砂。1 ～ 2mm 砂粒多く含む。
第 11 層　褐色 (10YR4/4) 粘土質シルト。1 ～ 2mm 砂粒多く含む。
第 12 層　にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質シルト。
第 13 層　暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質シルト。
第 14 層　浅黄色 (2.5Y7/4 砂質シルト。1 ～ 5mm 砂粒含む。
第 15 層　にぶい黄橙色 (10YR6/4) 粘土。
第 16 層　にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルト。炭層を薄く含む。
第 17 層　にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘土質シルト。

検出した層は全て近代以降の瓦片や陶磁器を含んでいることから、明治末～大正期にかけての整地

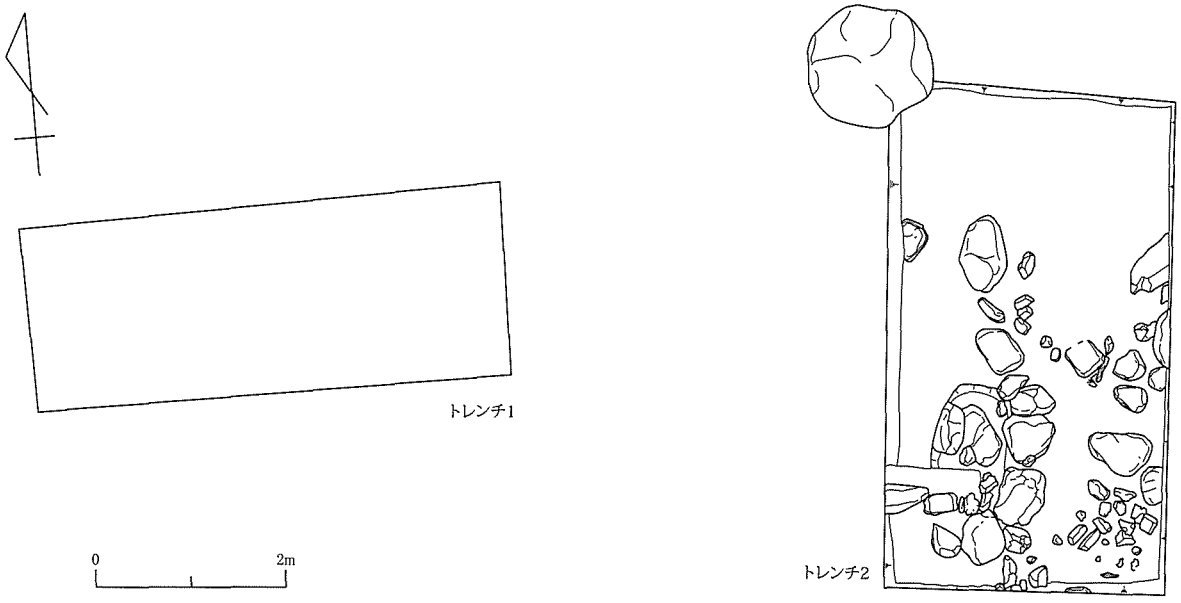
に伴うことが分かった。今回取り壊された前建物も同時期に建築されたものであるため、前建物と同時期の整地であろうか。前建物に利用されていた礎石とみられる石も、石そのものの由来は不明であるものの、前建物の建築に伴い据えられたものであることを確認した。

トレンチ２はトレンチ１の東に設定した。堆積状況は以下のとおりである。

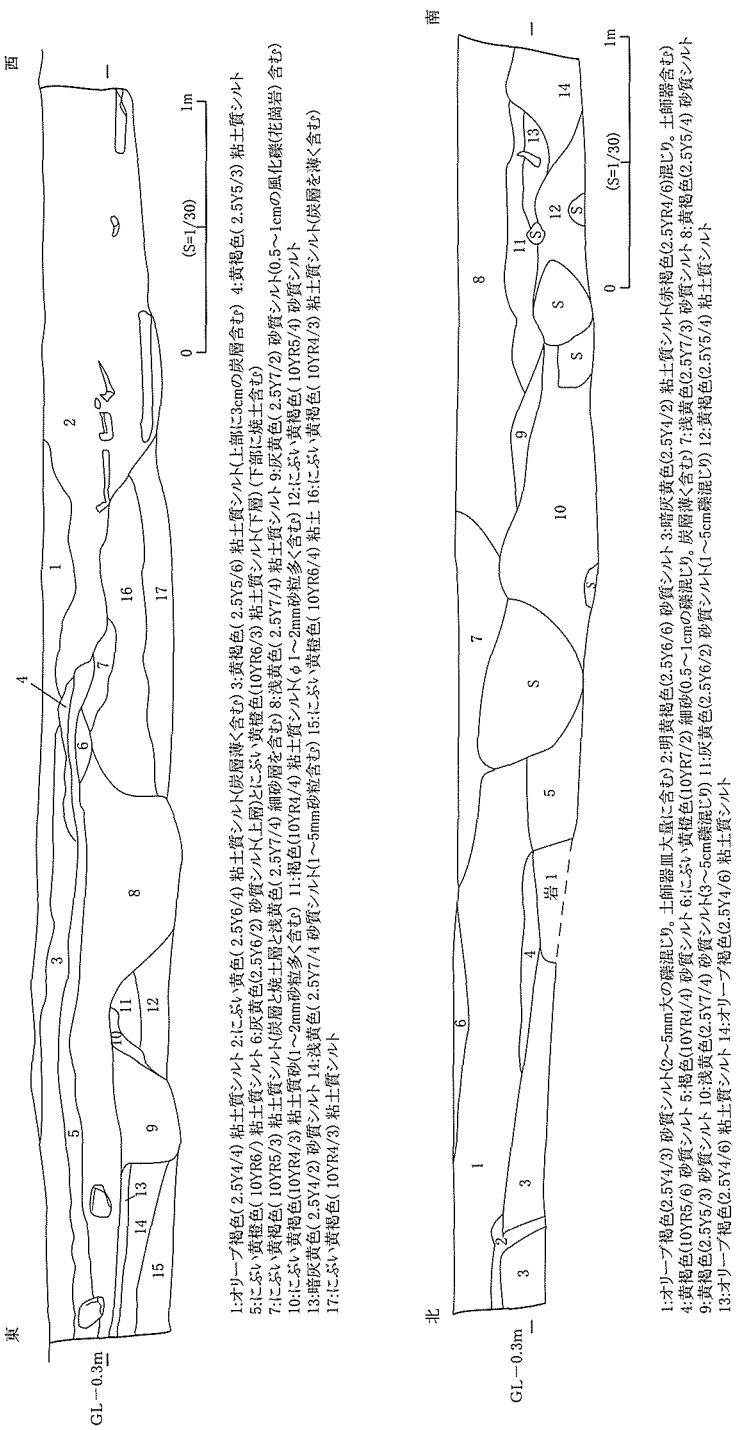
第１層　オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 砂質シルト。２～５mm 大の礫混じり。土師器皿大量に含む。
第２層　明黄褐色 (2.5Y6/6) 砂質シルト。
第３層　暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘土質シルト。赤褐色 (2.5YR4/6) 混じり。土師器含む。
第４層　黄褐色 (10YR5/6) 砂質シルト。
第５層　褐色 (10YR4/4) 砂質シルト。
第６層　にぶい黄橙色 (10YR7/2) 細砂。0.5 ～ 1cm の礫混じり。炭層薄く含む。
第７層　浅黄色 (2.5Y7/3) 砂質シルト。
第８層　黄褐色 (2.5Y5/4) 砂質シルト。
第９層　黄褐色 (2.5Y5/3) 砂質シルト。
第 10 層　浅黄色 (2.5Y7/4) 砂質シルト。３～５cm 礫混じり。
第 11 層　灰黄色 (2.5Y6/2) 砂質シルト。１～５cm 礫混じり。
第 12 層　黄褐色 (2.5Y5/4) 粘土質シルト。
第 13 層　オリーブ褐色 (2.5Y4/6) 粘土質シルト。
第 14 層　オリーブ褐色 (2.5Y4/6) 粘土質シルト。

第１層からは室町時代後期の土師器皿が大量に出土した。完形品は少なく、また同層からは瓦器椀や近代の陶磁器も出土したことから同時期の堆積ではなく、盛土として調査地に運び込まれたものであることを確認した。第２層は噴砂である。噴砂上面が第１層下に留まることから明治・大正期以前に発生した地震に伴うものである。第３層は土師器を伴う近世の整地層である。北から南へと低くなる。第５層はビニール片等を含む現代の整地層である。第３層を除き前建物の整地に伴う層である。

トレンチ北半分の第 10 層下で 50cm ～１m 大の礫の集積を確認した。礫は積まれた状態を呈して



第３図　遺構平面図



第4図　調査トレンチ断面図

おり、周辺の堆積土を除去し、掘り下げたところ内部に空洞をもつことを確認した。空洞内からは、近世の丸瓦が出土した。空洞は暗渠状に伸びる様相を呈していたものの、調査範囲及び掘削深度範囲により全容は不明である。また、積まれた礫は同方向に対して平坦面をもっておらず、またその並びも不整形であった。トレンチ内での礫の集積と同じ検出面では、投げ入れられた状態の約30cm四方の五輪塔の台座部分や、近世～近代の陶磁器・瓦等の遺物が出土している。

4）出土遺物

出土遺物のうち瓦を2点、土師器皿を34点図化できた。

1は丸瓦である。凸面胴部は縦方向のナデ調整を施し、玉縁部はヨコナデ調整する。胴部と玉縁部の連結面はナデ調整する。凹面胴部には布目が残り、中央やや右寄りに布袋綴じ紐の痕跡が残る。側面はケズリにより面をもつ。16世紀代の所産か。

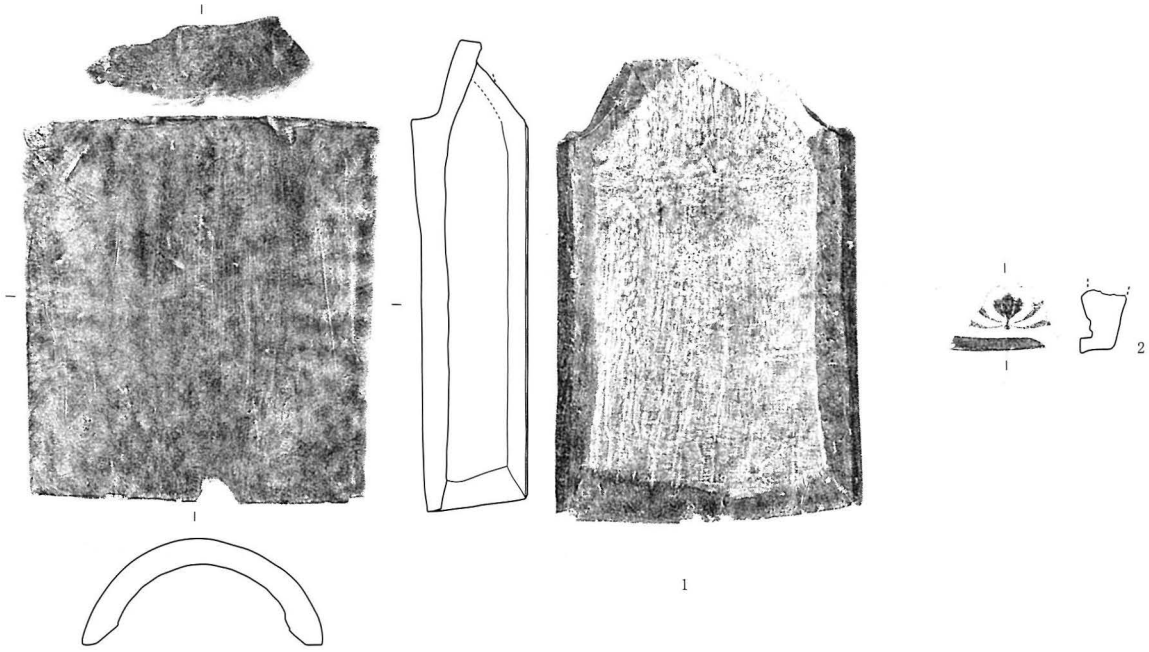
2は軒平瓦である。中心飾に花文を配する。外縁はナデ調整する。顎凸面はヨコナデ調整する。瓦当裏面には強いヨコナデ調整が残る。

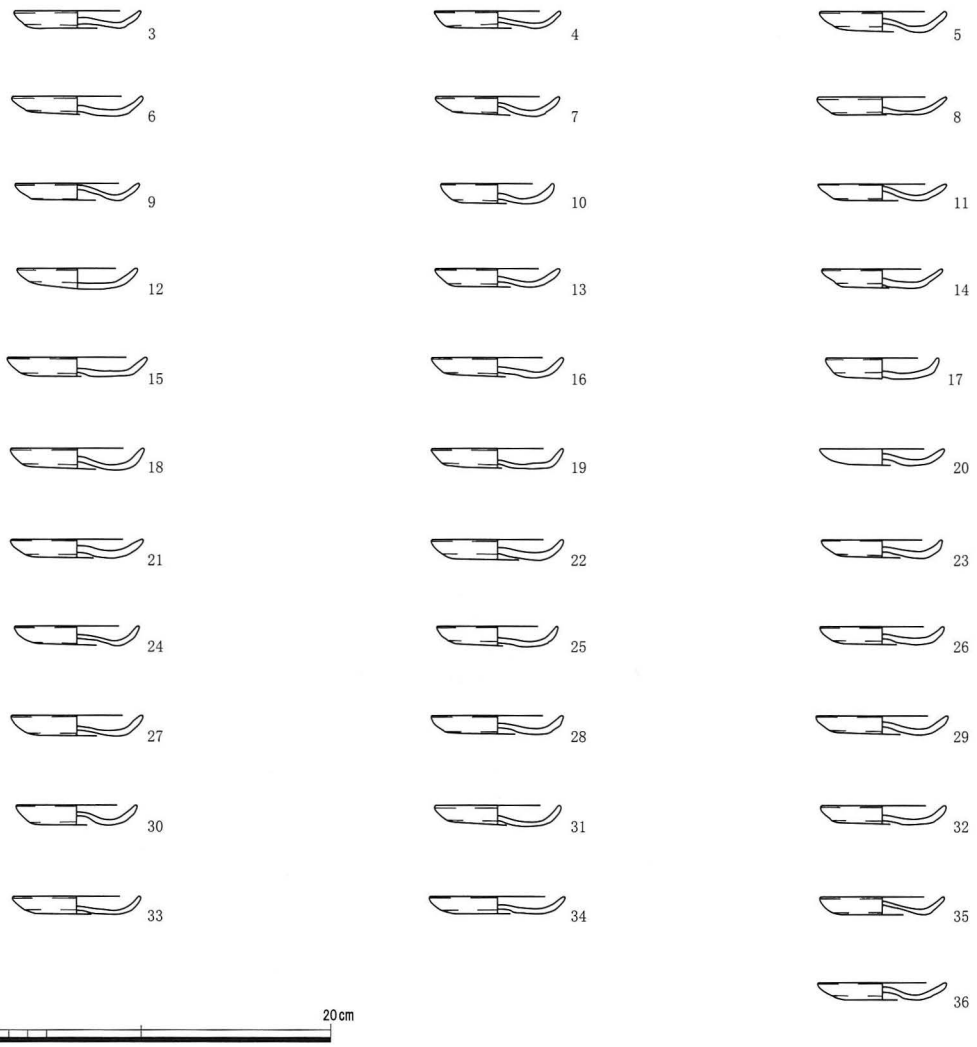
3から36は土師器皿である。

6・8・10・12を除き全て、底部が突出するいわゆる「へそ皿」である。8・12は平底を呈し、6及び10は底部がやや突出する。

体部は内湾するものと外上方に立ち上がるものとに分かれる。6・8・15・19の4点は体部が外上方に立ち上がる形状をもつ。11・28は体部が内湾気味に立ち上がる。その他の体部は全て内湾する。

体部の調整方法は、ほぼ全て体部外面をユビオサエ調整し、体部内面をヨコナデ調整する。ただし、3の体部外面には、ユビオサエ調整した後のヨコナデ調整による稜線をもつ。4・11の体部内面の調整方法は風化により不明である。





第５図　遺物実測図（軒平瓦・丸瓦・土師器皿）

口縁部及び口縁端部の形状については、大きく三つの形状に分かれる。口縁端部が外上方に立ち上がり、口縁端部が丸みを帯びて終わる形状を呈するもの（5・8・9・11・20・26・28・30・35・36）と、口縁部は外上方に伸び、口縁端部が尖り気味に終わる形状をもつもの（3・4・15・16・17・18・19・25・31）、口縁部が肥厚し外反し、口縁端部は丸みを帯びて終わる形状を呈するもの（13・21・22・23・24・29・32・33・34）の三種類である。6の口縁部は直線気味に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に終わる。10の口縁部は内傾気味に立ち上がり肥厚する。口縁端部は丸く終わる。12の口縁部は直線的に伸び、口縁端部はやや丸みを帯びて終わる。14の口縁部は外傾気味に立ち上がり、口縁端部はやや丸みを帯びて終わる。27の口縁部は肥厚し外上方に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に終わる。

口縁部の調整方法は内外面とも全てヨコナデによる調整を施す。

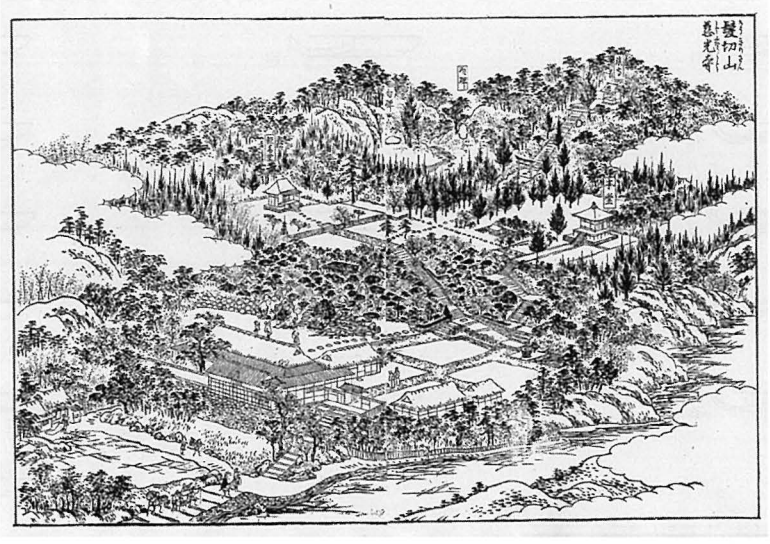
5）まとめ

調査地より大量に出土した土師器皿は、室町時代後期の所産である。前述のとおり、慈光寺には天正年間の花崗岩製十三仏板碑が残っており、大量に消費・廃棄されたものであろう土師器皿との関連が考えられる。調査地周辺には、同時代の遺構が残っている可能性もある。

トレンチ2で検出した石の集積は、何らかの施設として組まれたものではなく、トレンチ1と同様に前建物建築に伴う整地として傾斜地（第3層）を平坦にする造成として行われたと考えるべきである。造成は盛土だけでなく、これら礫をも利用して行われたのであろう。実際調査地周辺では同じ大きさ又はそれ以上の巨大な礫が多くみられた。また仮に、礫の集積が何らかの施設に伴うものであったとしても、出土遺物よりその時期が室町時代後期まで遡ることはない。可能性としては、トレンチNo. 2の第2層で地震に伴う噴砂を確認していることから、江戸時代後期に存在していた石垣が地震により崩落した後、その場所を盛土により埋め立て、旧建物を建設したとも考えられるが、想像の域を出ない。

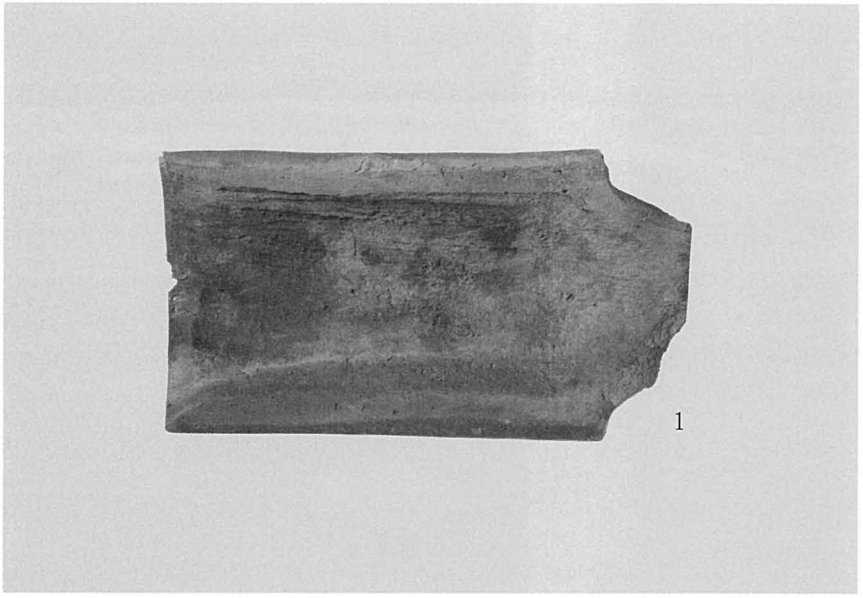
【参考文献】

中世土器研究会編 1995『概説　中世の土器・陶磁器』



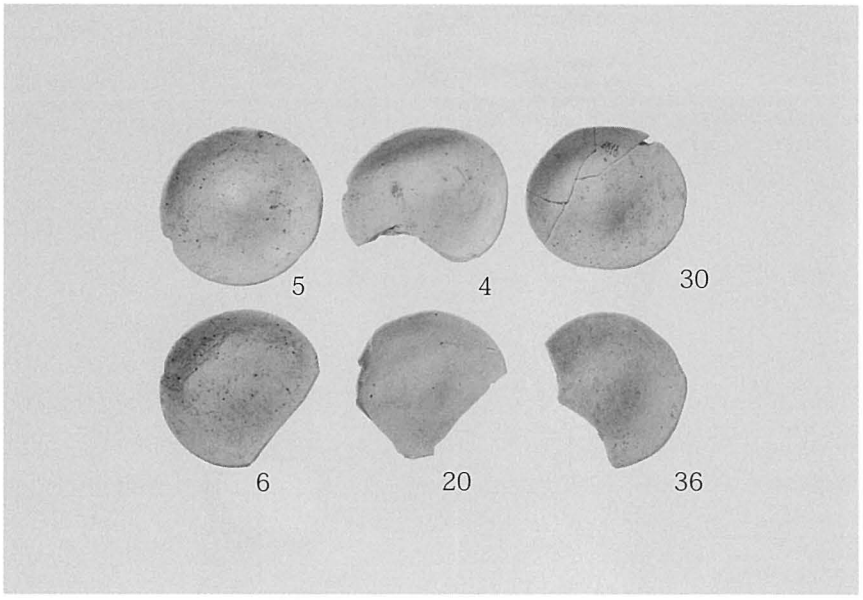
第6図　『河内名所図会』に描かれた慈光寺

図版1　慈光寺僧房跡第1次発掘調査　遺物



1．トレンチ1第1層出土
軒平瓦

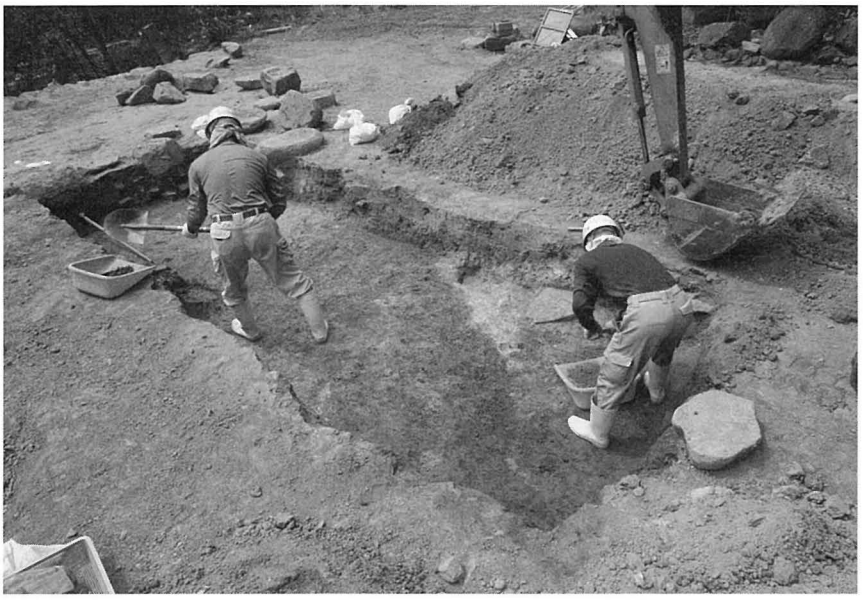
2．トレンチ2第1層出土
丸瓦



3．トレンチ2第1層出土
土師器皿

図版2　慈光寺僧房跡第1次発掘調査　遺構

1．人力掘削状況（南東から）



2．人力掘削状況（南東から）

3．トレンチ1完掘状況
（南東から）

図版３　慈光寺僧房跡第１次発掘調査　遺構

１．トレンチ２東壁
（南西から）

２．トレンチ２完掘状況
（西から）

３．調査区全景（東から）

図版4　慈光寺僧房跡第1次発掘調査　遺構

1．土嚢養生状況（南から）

2．埋め戻し状況（北から）

3．埋め戻し完了状況
（西から）

第８章　若江遺跡第 91 次発掘調査（遺物編）

１）はじめに

若江遺跡第 91 次発掘調査は、東大阪市若江南町二丁目において平成 26 年７月７日から同 18 日までの間に実施した調査である。調査では、調査の概要については『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報－平成 26 年度－』（東大阪市教育委員会 2014）において既に報告を行っているため、本報告は出土した遺物についてのみ行うものとする。

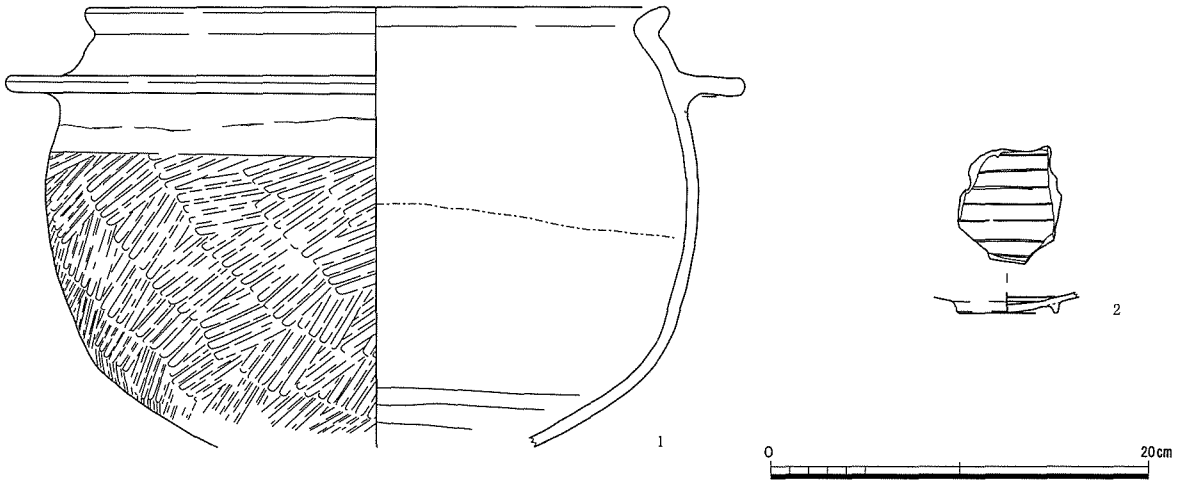
２）出土遺物

１は土師器羽釜である。底部は欠損する。体部は内弯気味に立ち上がる。鍔部は水平に伸び、端部は丸く終わる。口縁部は内傾しながら立ち上がる。口縁端部は外上方につまみ出すように折り返す。体部外面はヨコナデ調整する。体部内面の調整は不明である。鍔部はヨコナデ調整する。口縁部は内外面ともヨコナデ調整する。若江遺跡出土土師器羽釜の分類によればＤ型式に分類される。13 世紀代の所産である。第３層出土。

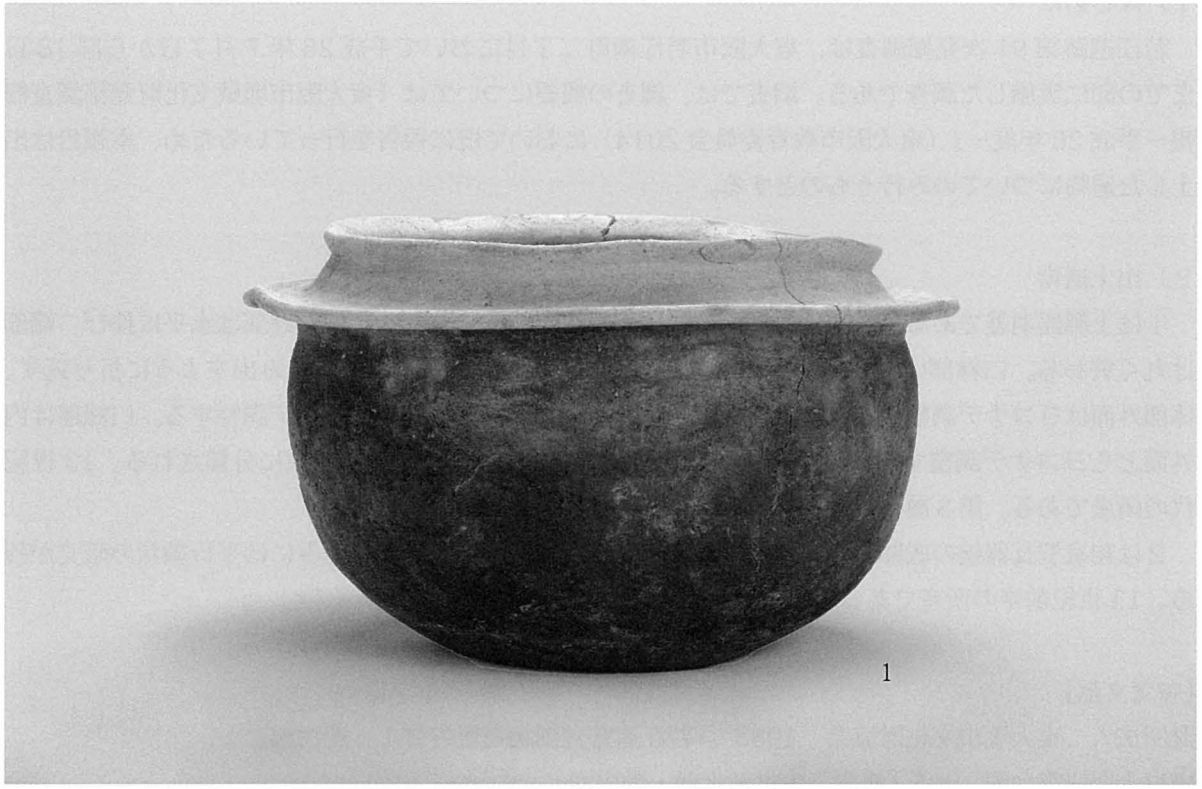
２は和泉型瓦器椀の底部である。底部には断面台形の高台が残る。見込みには平行線状の暗文が残る。13 世紀前半の所産である。第３層出土。

【参考文献】

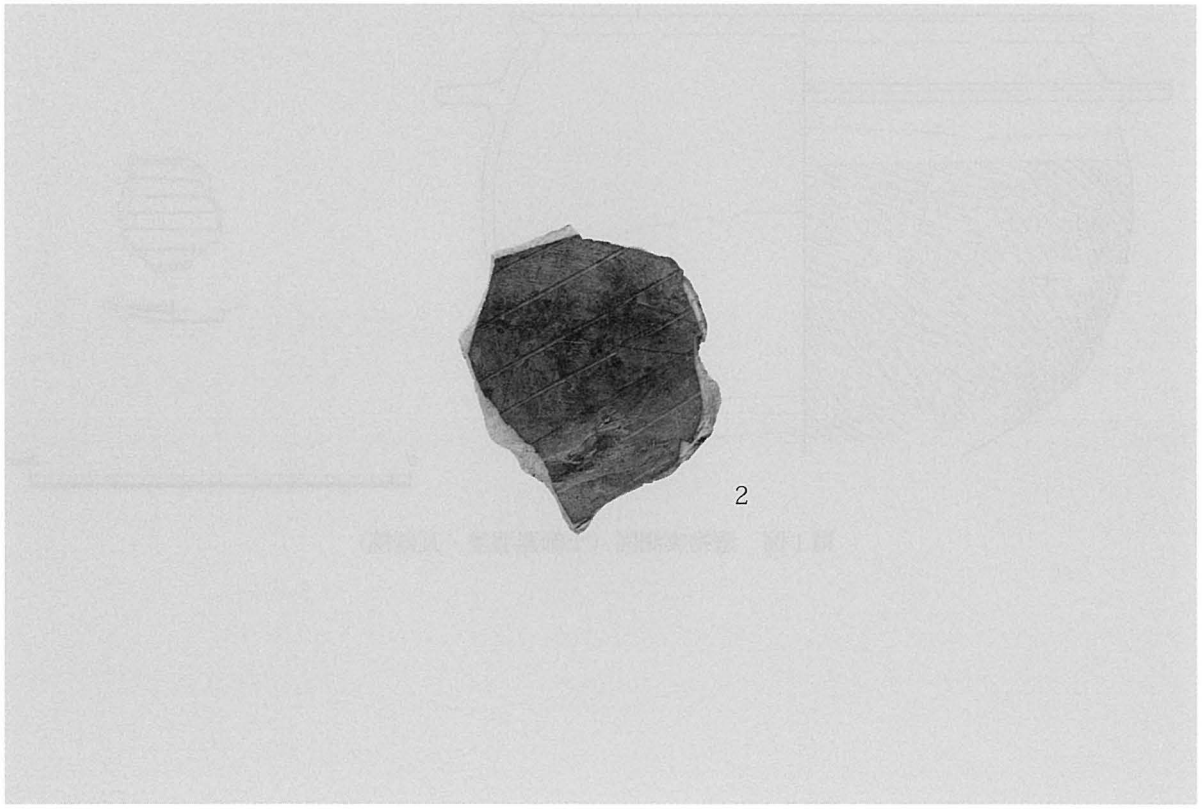
財団法人　東大阪市文化財協会　1983 『若江遺跡発掘調査報告書Ⅰ　遺物編』
中世土器研究会編 1995『概説　中世の土器・陶磁器』



第１図　遺物実測図（土師器羽釜・瓦器椀）



1．第３層出土　土師器羽釜



2．第３層出土　瓦器椀

報告書抄録(その 1)

ふりがな	ひがしおおさかしまいぞうぶんかざいはっくつちょうさがいほう －へいせい 27 ねんど－
書名	東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報　－平成 27 年度－
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	仲林篤史・奈良拓弥・今井真由美
所在地	〒577-8521　東大阪市荒本北一丁目 1 番 1 号
発行年月日	2016 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡	所在地	市町村コード	遺跡番号	調査期間	調査面積	調査原因
にしのつじいせき 西ノ辻遺跡	東大阪市東山町 1256 番	27227	45	平成 25 年 12 月 18 日 平成 26 年 1 月 7･8 日	16 ㎡	個人住宅建設
かわちでらあと 河内寺跡	東大阪市河内町 674 番 17 の一部	27227	63	平成 26 年 12 月 22 日 平成 27 年 1 月 7 日～ 1 月 9 日	20.5 ㎡	個人住宅建設
ぜんこんじいせき 善根寺遺跡 (第 4 次～5 次)	(4 次) 東大阪市善根寺町一丁目 650 番、640 番、651 番、649 番 (5 次) 東大阪市善根寺町一丁目 652 番 13	27227	131	(4 次) 平成 27 年 2 月 23 日～ 3 月 31 日 (5 次) 平成 27 年 4 月 14 日 4 月 21 日～4 月 22 日	(4 次) 254 ㎡ (5 次) 8.5 ㎡	(4 次) 老人ホーム建設 (5 次) 個人住宅建設
しじりいせき 市尻遺跡	東大阪市四条町 582 番、583 番、590 番	27227	154	平成 27 年 3 月 10 日～ 3 月 13 日	51 ㎡	宅地造成
しばがおかいせき 芝ヶ丘遺跡	東大阪市北石切町 2012 番の 3、4 の各一部、中石切町二丁目 2023 番 2	27227	23	平成 27 年 6 月 22 日 平成 27 年 6 月 24 日～ 7 月 4 日	34 ㎡	共同住宅建設
じこうじそうぼうあと 慈光寺僧坊跡	東大阪市東豊浦町 1823 番 1	27227	47	平成 27 年 8 月 4 日～ 8 月 8 日	25 ㎡	客殿建設
わかえいせき 若江遺跡	東大阪市若江南町二丁目 79 番 5	27227	98	平成 26 年 7 月 3 日～ 7 月 18 日	19 ㎡	事務所建設

報告書抄録(その 2)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西ノ辻遺跡 (第 51 次調査)	集落跡 その他 の墓	弥生時代		弥生土器	
河内寺跡 (第 23 次調査)	社寺跡	室町時代	柱穴・落ち込み	土師器	
善根寺遺跡 (第 4・5 次調査)	集落跡	(4 次) 奈良時代 ～室町時代 (5 次) 奈良時代 ～平安時代	(4 次) 柱穴・土坑・河川 (5 次) 自然河川	(4 次) 須恵器 土師器 円筒埴輪 (5 次) 須恵器 土師器 縄文土器	「讃岐[大カ]」 の墨書土器
市尻遺跡 (第 2 次調査)	集落跡	古墳時代		須恵器 土師器	
芝ヶ丘遺跡 (第 17 次調査)	集落跡	縄文時代 ～中世	溝・落ち込み	須恵器 土師器	
慈光寺僧房跡 (第 1 次)	社寺跡	江戸時代		土師器	
若江遺跡 (第 91 次)	城郭跡	鎌倉時代	井戸・溝	土師器 瓦器	

東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報
－平成 27 年度－

発　行　日　　平成 28 年 3 月 31 日
編集・発行　　東大阪市教育委員会
〒577-8521
東大阪市荒本北一丁目 1 番 1 号
℡06-4309-3283
印　刷　所　　株式会社近畿印刷センター
東大阪支店